（單位瓩）

縣 入	鴎浦縣 移出	鴎浦縣 移入	呼瑪縣 移出	呼瑪縣 移入	璦琿縣 移出	璦琿縣 移入	奇克縣 移出	奇克縣 移入	烏雲縣 移出	烏雲縣 移入	佛山縣 移出	佛山縣 移入	蘿北縣 移出	蘿北縣 移入
[illegible]四四、〇三三	三、二八七	七一六、一六三	九、九七二	一、二五六、八四四	五、二二七、八九一	八、五三八、二九三	二一七、八一五	八九三、五二五	六九七、七四六	六六二、四八八	三、三八五、三三三	一六〇、七七四	二六九、六二四	一、七〇四、七五四
一三、四五一	—	四、七五二	—	四、六〇一	二二、四四三	二八、八六八	—	—	—	—	—	—	四五、一四二	五、五九五
一〇、九八四	—	—	—	五、五七三	一六、五五七	三七、六一七	四四、六三六	—	—	—	—	—	—	—
一〇六、二六四	—	一一三、八二四	六六八	一七四、九二七	五〇二、五四五	一、〇三〇、七一一	八、二四九	五二、七〇九	二四、六二八	二五、六四三	—	一四、六三九	一七〇、九〇六	一〇四、八三三
九、八二三	—	五、三〇四	—	三、六〇八	二四、〇七一	二五、五三三	—	四、六四一	八、六九六	三、二五五	—	二四六	三、一八九	三五、二三六
—	—	—	四九	—	五九、四六八	四九	三三、八九二	二一三	一三七、〇四八	—	一三、三一一	—	三、四六〇	—
二一〇	—	四九	—	三七四	四〇三	一三、〇四四	—	—	—	二一三	—	二九四	—	二、三〇[illegible]
八、七三八	一九七	六、九〇一	三九三	一、一七九	一一、五三三	四、八九四	—	—	—	—	—	—	—	—
一六四	—	—	—	八四	一九一	六八八	—	—	—	—	—	—	—	一〇五
—	—	六七八	—	八二	九二四	五、五一六	—	—	—	—	—	—	三七	一、一六四
—	—	—	—	—	一、一三三、〇一六	三三、九五一	—	—	二、八二〇	一六四	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	一九一、〇六六	八〇、八二三	—	四七五、六五四	—	三、三七一、三三〇	—	—	—
—	—	—	二、〇〇〇	二、〇〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	一、三一一	—
六五、四七五	—	三〇、〇〇〇	—	三〇、〇〇〇	三六、五五七	一、二六二	—	—	—	—	—	一、〇八二	—	—
—	—	—	—	—	—	一、五一七	—	—	—	—	—	—	—	—
一、〇九二	—	二九五	—	四、六七一	一一、五六〇	二、〇八五	—	七二五	—	一、二五九	—	—	—	六、〇四五
二九、一四七	—	一、三二三	—	二五、九〇二	五八、一八〇	一九一、一三三	一四、〇七二	七、二三四	二二、三三五	—	—	二、九五〇	三、九三四	七三、八一〇
七六、四二八	—	三七、三二八	—	五三、二八六	一四九、三五一	三〇八、五九二	—	三七、六八七	—	八、八六四	—	三、三三三	一、三九四	一七、七一一
五〇、二三九	—	一、五九〇	—	五二〇	五三、五七九	四五四、二九七	—	—	—	—	—	—	—	二、四五九
七二七、三四六	—	二〇六、二〇八	—	四九九、八八二	一、三六四、八四三	四、二五九、一七五	一一、四七五	四三一、七三六	六、四〇〇	三〇一、二〇五	—	五二、六三八	一一、二四五	八三七、四四一
三、七四三	—	—	—	一、三四八	三、二三〇	三九、九〇一	—	六、八四八	—	七、二〇九	—	—	—	八、九五七
一一、〇九七	—	七四八	—	一、二二三	五〇、〇四六	一、〇一六	—	八、一三三	—	二四、七二七	—	六、八九六	—	四四、〇五六
七一、七八〇	一、〇四九	三二、六五五	四、七一五	六一、九七七	一五二、四一三	一五五、五六八	三、〇九〇	二〇、九九五	—	三二、五八一	八〇二	九、五四八	二四、六七九	五三、三九二
一、三二六	—	一一〇	—	一一四	一、二六五	一一、二二九	—	三、三九五	—	三、四七五	—	四三六	—	四、七五二
二、三五七	二九五	一、五八九	一、〇八三	一〇、〇一四	五二、七七三	三八、四一八	八、四九三	五六四	—	八二三	—	一一八	—	七、二九〇
—	—	—	—	—	三、八八五	一、九六八	—	一三、〇一六	—	—	—	—	—	二、二九五
三、四二五	—	一、一二八	二五四	五、四九四	四八、九六〇	一六五、六三五	一、五二五	八、五七六	—	三、三六一	—	二、〇二六	—	三一、〇四六
一三五	—	二〇	—	九〇	三、四〇七	一〇〇	—	九九一	—	一、六三九	—	三七一	—	一、九一九
二、六八一	—	一、〇九九	三八	一、三八〇	一一、八七二	一三〇、一一八	—	三、六〇二	二三、二六六	三、五七三	—	六三八	—	三、七五七
—	一、六四〇	—	—	三六一	五、二三八	一三、八三六	—	六五	—	八三〇	—	二〇八	—	一、一七〇
六七一、八九四	一〇六	二三九、八四七	四六二	三六四、五三七	一、二七〇、一七二	一、二五八、〇八八	一一、五六〇	二六五、三九三	一七八	二三〇、一六八	—	六一、一八三	二、一七三	四二四、四三〇
四〇、七七三	—	三、三八〇	—	三、二一一	二〇、八五六	三二、七八二	—	三、八一五	六、七三一	二三、八二九	—	四、〇三三	—	二〇、八四一
二六、三四九	—	二七、三六六	—	四一七	四六、三八七	一五、六七一	—	九一四	—	—	—	—	—	—
二〇二	—	—	—	—	三、一七七	四、九六五	—	二、九七五	—	六七一	—	一四六	一、八〇四	四、一五三

移出ノ部

品種別	合計	其他	木綿及種子	雜穀	食料	他品	合計
河漢	三四、四六六	三、三三、三三	三六、四四四	—	—	一、三六、三五	三、三四、四六六
黑河	一、三三、三〇	一、三三、三〇	—	—	—	一、三三、三〇	—
烏蘭	一、三三、三〇	一、三三、三〇	—	—	—	一、三三、三〇	—
木拉沙及礁	八、七六	八、七六	—	—	—	八、七六	—
鑒佛山	四、五七、七七	四、五七、七七	—	—	—	四、五七、七七	—
兆興鎮	三、三〇、三三	三、三〇、三三	三、三〇、三三	—	—	—	—
合計	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三〇、三三	—	—	一、三六、三五	三、三四、四六六

第四章　商工業及物資移動

移入ノ部

品種別	合計	其他	石油	雜貨	食料	他品	合計
河漢	四、八三、〇五	三、五〇、二六七	二、四六、三七	三、九九、三七	二、八三、三一	三四、三四、四一	六、〇、〇五、七七
黑河	六、一、三六	一、九三、三三	—	—	四、一九、三三	四、六六、四四	一、五、三三、三七
金山鎮	四、九五、三三	一、九三、三三	—	—	八、七、二	一、一、一、一	一〇〇、〇、三、八
烏蘭克奇	三、三一、三六六	一、八三、三六七	一、九三、三六七	一、九九、三六七	一、三〇、八	一、一、一、一	四、七、〇、三、七
雙鴨山	三、三一、三六六	一、八三、三六七	—	—	—	—	一、一、一、一
太平溝	三、九九、〇四	三、九九、〇四	—	—	—	—	—
兆興鎮	二、三二、三三	二、九三、三七七	一、九三、三七七	一、九三、三七七	一、三〇、八	一、九三、三七七	一、九三、三七七

（單位　瓩）

主要艙頭別主要貨物輸送數量

品種別	合計	其他	大豆	豆粕	別鎮	合計	其他	木綿及種子	雜穀	食料	他品	合計
河漢	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	河漢	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	—	—	—	三、三四、四六六
黑河	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	黑河	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	—	—	—	一、三三、三〇
烏蘭	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	烏蘭	一、三三、三〇	一、三三、三〇	一、三三、三〇	—	—	—	一、三三、三〇
木拉沙及礁	八、七六	八、七六	八、七六	八、七六	木拉沙及礁	八、七六	八、七六	八、七六	—	—	—	八、七六
鑒佛山	四、五七、七七	四、五七、七七	四、五七、七七	四、五七、七七	鑒佛山	四、五七、七七	四、五七、七七	四、五七、七七	—	—	—	四、五七、七七
兆興鎮	三、三〇、三三	三、三〇、三三	三、三〇、三三	三、三〇、三三	兆興鎮	三、三〇、三三	三、三〇、三三	三、三〇、三三	—	—	—	三、三〇、三三
合計	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	合計	三、三四、四六六	三、三四、四六六	三、三四、四六六	—	—	—	三、三四、四六六

（單位　瓩）

康德二年度黑龍江各埠頭主要品別輸送數量前年對比

（單位　瓲）

康德二年度				元年度對比△印減			
品名	移出	移入	計	移出	移入	計
小麥	六一	一四四	二〇五	△	△	△
雜穀及種子	七九九	一、七九〇	二、五八九	三一七	五九	四八〇
豆粕	一三七	三六三	五〇〇	六〇	七〇	△
豆油	一九〇	五六〇	七五〇	一四四	一七〇	一〇
麥粉	五九	五一四	五七三	二三	二二二	三一四
鹽、砂糖	一、五八四	七、四八八	九、〇七二	△	△	△
飲食料品	五六	一六七	二二三	八二九	二一五	二五八
木材	二八一	四八二	七六三	△	△	△
薪	一、一三六	三三九	一、四七五	八	五二八	一八七
雜貨其他	三、九二八	一九一	四、一一九	二六	二一三	一一一
計	二、四五九	六、八七九	九、三三八	△	△	△
計	一〇、六九〇	一八、九一七	二九、六〇七	△ 一一、四一五	△ 六、三九六	△ 三、九八一

第五章　地方誌

一、漠　河　縣

（一）自然及住民

自然　滿洲國の最北端に位する。蘇聯のゼーヤ州と相挾む黑龍江は蜿蜒約四〇〇粁の國境線を描き、東は鷗浦縣、西は興安北省、南は興安東省と隣する。一口に言つて山地であり、縣の東部には西羅爾奇山嶺、南部には伊勒呼里山脈、西部には大興安嶺の餘脈たる雉雞場山、縣域内も亦其等の諸支脈を以て滿され、其多くは黑龍江及其支流たる額爾古納河の沿岸に懸崖となつて臨んで居り、阿穆爾河（額穆爾）、旁烏河、呼瑪爾河等の大河は雉雞場山、伊勒呼里山脈に發源してゐる。平地は縣城漠河附近の江岸一部のみである。

縣の報告書は氣象に就て次の如く誌してゐる。

五月初旬解氷と同時に氣溫は上昇、六月中の漠河は花園である。花は、つゝじ、しやくやく、あやめ、山百合、鈴蘭。六月下旬から七月中旬にかけて屋外平均溫度は華氏一二〇—一三〇度を往來する。而してこの六七月の彼の白夜に似て殆ど夜とては無い。八月下旬降霜、九月初旬より雪、吹雪。住民は八ヶ月間を爐邊に籠る。斯くて氣永な生熟を要する大豆、高粱等の特産は生産しない、只小量の小麥、馬鈴薯、碗豆が刈り取られる。

尙、黑龍江の結解氷狀況は十月下旬流氷開始、十一月初旬結氷完了、四月下旬解氷開始、五月初旬解氷終了が普通である。

住民　人口密度は滿洲國中興安省を除いて最も疎、康德二年十二月末現在の次表に見ても〇・〇四五に過ぎぬ。

面積（平方粁）	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	平方粁當人口密度
四三、三一五	四二九	一、五五二	四〇六	一、九五七	〇・〇四五

之を前年末現在に比すれば九八戸六九〇人の增加である。民族別にすると漢人一、六二六、滿人二一六（俄倫春人一二六を含む）、蒙古族二、回族二、日本內地人三八（男二九、女九）、朝鮮人三（男）、無國籍六九（男一三女五六）其他女一、滿漢人は男一、五〇六女三四〇である。

住民は漢河はじめ江岸部落に集り、滿人系俄倫春人は二五站、旁烏河、西爾根奇河地帶に住み露人系俄倫春人は縣城、新化堡附近に居住、女は殆ど滿漢人の妻となつてゐる。俄倫春人の女尊男卑は特に徹底し男は矢張り酒を鯨飲する。

一葦帶水蘇聯に接し滿蘇間の人種的關係濃厚の爲め漢河の如きは戸數一五〇の內滿露婚姻五一組、小學兒童の半は混血兒數と稱せらる。

（二）政治及治安、文化

政治 清朝は瓊琿を除いた黑龍江右岸地方には餘り注意を拂はなかつた。然るに露國事業家は一八八三年から今の漢河の地に金鑛を經營し一八八五年の春迄に四〇〇布度の金を採取搬出した。尤も同金鑛は一八六〇年來コザックが金の採取に從事してゐたものであるが、金鑛が愈々盛となり一五、〇〇〇人の坑夫を集めたこと等が問題となつて、初て清朝政府の注意を惹き、一八八六年一月清朝は軍隊を送つて此金鑛を占領し、一八八八年には資本金二〇萬兩を以て金鑛會社を創立した。

一九〇〇年北清事變の際漢河市は破壞されて守備兵及住民は四散し、其後一九〇六年迄露人は此地及江の右岸各地に支那人の立入ることを許さなかつた。一九〇六年露軍の占領が解かれて以來支那の採金業者及商人は政府の善後局の援助を得て歸還し始めた。一九〇九年守備隊設置、一九一四年設治局設置、同年縣となる。累年の採金の減少に加へて一九二九—三〇年露支紛爭に際し露人進入して、掠奪放火し住民は四散した。一九三四年（康德元年）黑河省管下に入る。

康德三年度漢河縣歲入出豫算

（單位圓）

歲	二年度（決算）	三年度	增	減
縣收入額	三四、〇八四	三四、三一八		二三四
國庫補助額	五、九三三	八、五〇五	二、五七二	
	二八、〇八八	二五、八一三		二、二七五

治安 露支紛爭前數度小匪賊が現れたのみで、露支紛爭の際は縣民は虐待を蒙り慘狀を呈した。現在は極めて良く治安が維持されてゐる。警察隊、軍隊並に保甲自衞團が置かれ、保甲制は三保五甲四〇牌の組織（自衞團三團五〇名）で團員は便衣である。

文化 民度頗る低く、教育は縣城初級小學校一、其の教員一、兒童四八、前年（康德元年）より一八名增加、就學兒童率四〇%である。また縣城に城區民衆學校一がある。縣城には義倉、協和會分會（會員八四）等が在つて社會事業に關與し縣公署設立の一善堂は禁煙戒酒を目的としてゐる。宗教は在裡を主とするものの如く縣城內に約六〇名の信者があるといふ。人口稀薄の爲未だ衞生狀態に就ては記すべきものがない。

（三）資　源

農產 本縣は縣城附近及江岸の一部を除き全く山岳地帶で占められ、平地は縣面積の一割に過ぎず、總面積に對する可耕地の比率五・一%、平地と雖も農耕に適せざる荒地沼澤地が多く、地形上一度豪雨に遭へば忽ち氾濫し、且又嚴冬のため耕作期僅かに四ヶ月、開墾費も高いので農業の自立不可能とされてゐる。之がため農民も薪伐採、紅豆又は藥草採取等を重要な副業

としてゐる。而も露支紛爭以來水災匪害打續き阿片栽培及沿岸伐木の禁止、紅豆の賣行不良は農民の生計に致命的打擊を與へ農村は極めて疲弊してゐる。

農家一戸當平均耕作面積は康德二年度に於て二・〇八陌（農家總戸數一三一戸として）となつてゐる。康德元年七月縣公署の調査では農家の種別戸數は地主一一、自作農七〇、自作兼小作農八三、小作農一〇〇、計二六四戸とあり、之で見ると農家は半數に激減してゐる。主要農產物たる小麥、燕麥の價格も逐年下落の步調を辿る狀態である。

副業の內、養蜂場が一箇所あり、康德元年には三、二〇〇斤を生產した。

紅豆（ヤーガダ）は本縣の特產で、之は石楠科に屬するコケモモを謂ひ、釀酒、製菓の原料とする。多年哈爾濱を始め遠く北支方面に年五、〇〇〇—一萬甫度移出し其の價格二萬圓內外を算したが、大同元年七月海關接收に依り支那海關の二種課稅に逢着して以來北支輸出は殆ど杜絕、現在は哈爾濱、黑河方面に年一、〇〇〇甫度內外を出荷するに過ぎぬ。採取地は縣城二〇滿里附近一帶で、最近四年間の產出數量は大同元年度二、四〇〇甫度、同二年度九、五〇〇、康德元年度一、八九〇、同二年度一、五五〇、單價は康德元年に入つて二圓から一圓六十錢に、同二年度更に一圓二十錢に下落した。

縣面積並土地利用狀況（實業部發表）

（大同二年）

總面積	可耕地			總面積ニ對スル比率		可耕地ニ對スル比率	
	既耕地	未耕地	計	不可耕地	可耕地	既耕地	未耕地
四三、三一五平方粁	三、二一六平方粁	二、二一九平方粁	四一、〇九六平方粁	五・一%	九四・九%	〇・〇〇七%	五・一%	〇・一%	九九・九%

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	七〇陌	六〇蒲
其他豆類	—	—
高粱	二〇	二〇
粟	七〇	九〇
玉蜀黍	四〇	三〇
小麥	—	—
水稻	—	—
陸稻	—	—
其他雜穀	三〇	三〇
計	二三〇	二三〇

特用作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
煙草	七陌	二蒲
線麻	四	二
計	一一	四

畜產　家畜數八〇〇、大同二年に比し三倍の增加である。狩獵による獸毛皮類は大同二年度に於て黃狼皮三〇〇張價格一、〇五〇圓、灰鼠皮四八〇〇枚價格五、二八〇圓、白兎皮一、三五〇枚價格四〇五圓、鹿茸八架、鹿胎一五個、熊膽一五個等で之等は凡て黑河方面に移出された。其後の調査資料は無い。

畜　産（實業部調）（康德二年九月一日現在）

種別	數量	備考
牛	五九頭	前年より馬は約二倍、豚は三倍以上の增加（縣報告との比較）康德二年六月末現在黑河省公署調では牛四九、馬五八六、驢一、豚二四四計八八〇、鷄三八五
馬	五〇三	
騾	—	
驢	一	
羊	—	
豚	二三七	
計	八〇〇	
鷄	三九三羽	

林産　森林面積は二九、五八七平方粁、全面積の六八%、立木蓄積量五億立方米、本書記載十縣九億立方米の過半を占めるほど豐富である。民國八年（一九一九年）頃迄は露國に搬出されたらしく、其後黑河に移出するやうになつた。而し運賃の關係で哈爾濱での商品化を圖ることは困難と見る向もある。

樹種別を擧ぐれば大體落葉松四割、紅松（油松）三割、白樺二割、其他は杉松、臭松、柞、楊等で、呼瑪爾河上流と阿穆爾河との中間に大森林を形成し、樹齡一五—二〇〇年、人跡未踏の原始林で、阿穆爾河左岸より黑龍江沿岸に至る地域が之に次ぐ密林地帶である。此の外、阿穆爾河約二〇〇滿里上流の兩岸二、三滿里の地域及老溝附近は比較的密生してゐる。

康德元年九月現在の價格は薪材每サージェン原價二圓、市價五圓、材料材每本（一本は長さ一八尺徑二尺を標準とする）原價一圓二十錢、市價三圓。伐採法は日傭、請負の二種あり、伐採夫は各期間二人一組となり、斧又は鋸を用ひ適當な長さに伐り之を二頭立馬橇で江岸に搬出、解氷を待つて筏流する。作業能率二人に付一日一〇—二〇本、薪材は三〇本內外である。筏は普通一組五〇〇—八〇〇本、一組の筏に一〇—一四名の人夫が筏夫頭の指揮を受けて黑河に向ひ、普通二週間で黑河に到着する。賃銀は筏夫頭二五〇圓、筏夫一人當七〇圓。

林　産　（實業部調）（康德元年現在）

森林面積	立木蓄積量（立方米）		
	針葉樹	濶葉樹	計
二九、五八七平方粁	二〇七、一〇九、〇〇〇	三二五、四五七、〇〇〇	五三二、五六六、〇〇〇

鑛産　漠河縣は金鑛に依て開發された。浦鹽市建設の咸豐十年（一八六〇年）コザックが金鑛を發見秘かに發掘してゐたが、或る俄倫春人が母の遺骸を埋める時數個の金塊を發見して以來宣傳され、露人を始め、支那人、朝鮮人、猶太人、俄倫春人、獨逸人、波蘭人、米國人等各種族が續々蝟集するに至つたと傳へらる。又一說には光緒七年（一八八一年）俄倫春人の發見後、李鴻章の北洋通商事務大臣たりし光緒十五年佛山縣觀音山金鑛と共に北邊々防の一策として官民出資による漠河金鑛有限公司を組織し直隸總督直轄の下に經營したるに始まるとも云ふ。同公司は資本金二〇萬兩、亂掘の爲成績思はしからず、光緒二十六年（一九〇〇年）團匪事件の際一時露國に占領せられ採金夫の殺害されたもの三〇〇に及び、露人の蹂躙に委せ事業は頓挫、光緒二十八年之を回收して其後幾變遷、宣統三年（一九一一年）以來採金量頓に減少し官民合辦の奇漠金鑛局も其後解散、地方產金地帶を開放して自由採掘に委ね官銀分號が採金を收買してゐた。

建國後、康德元年五月滿洲採金會社の設立に依て漠河金鑛地帶は滿洲國政府の現物出資として同會社の所屬となつたが、同年十月北滿洲採金會社が經營權の讓渡を受け、同社は頭山滿主宰の杉頭奉仕團を使用してドレッジャー三台を以て採掘中であるが成績は芳しからず、本地方は舊態依然たる自由採掘であると。

一八八二—五年の採金熱は素晴らしく漠河の金鑛に集つた者約一萬五千人（露人九千支那人六千）と稱せられ、彼等は一種

の自治國を形成した。滿鐵編露亞經濟調査叢書「黑龍江省下卷」にはジエルトガ（漠河）金鑛として右共和國に關する記述を載せてゐる。記錄に依れば曾て一日産金一甫度乃至三甫度に達したこと稀らしからず價額四萬三千圓に上つた。康德元年度財政部調査では最少に見積り一年平均一人一日當り純金〇・六ゾロトニーク（一ゾロトニークは約四，二六六瓦）として年産量七、三〇〇ゾロトニーク即ち金額にすれば一年約四—七萬圓と見られた。

1　漠河金場

位置は阿穆爾河支流の什都克河上流與安北省の神仙洞上流に散在する縣城西南約七〇滿里にあり、金鑛道路は險惡な山道で峠五箇所あり平地など見られない。前述の沿革は本金鑛を物語つたものである。砂金床は巾一四〇—七〇〇尺、長さ二〇—二五滿里に亘る濕土の溪谷で、上部は厚さ三・五—六尺の石炭層を以て蔽はれ、其下は七—二三尺に達する砂金床となつてゐる。土壤は到る處水分を含み各季凍結しても採掘容易といふ。砂金は往年は主に塊狀であつたが近年は小粒のため困難を感ずるが、一布度の土砂中五、六厘の含有量で、含金量八〇%、鑛區二、八〇〇餘畝は上老溝、下水道、福興溝小北溝等を一括したもので、漠河金鑛の他、老溝金溝とも稱す。

2　二十一站德利溝金廠

民國十四年廣信公司が發見、同十五年經營開始、最も活況を呈した同十八年には一日産金量八、一九〇瓩に達したこともあるといふ。含金量八五%。滿洲建國後縣公署の管理するところとなり、康德元年孫紹明なる者が滿洲採金會社の委託を受け、同會社より資本金一萬圓を借入經營し、收買砂金の時價の七割五分を契約に基き會社より金廠に給してゐる。本金廠は物資の專賣を實施してゐる。

3　依陵古魯河一帶

一九一五年此の地帶の砂金床をロシア人が發見した。阿穆爾河支流で現在日本人組織の滿蒙拓植協會なる者が手掘に從てゐる。含金量八〇—九〇%。

（附）

興安北省奇乾以北の漠河縣境に近い地方には金鑛地多く、その主なるものは神仙洞河流域の吉興溝金鑛（同河兩岸三〇〇米幅の鑛區）、漠河西南二五〇滿里の中興溝金溝、その南方二五〇滿里にジャガタ金鑛（熱克多地方）、更にその南方約六〇滿里に烏瑪金鑛、吉拉林河流域一帶の金鑛等があり採鑛方法は頗る粗放である。此處の日本人の採金團體は北滿洲金鑛會社、海拉爾産業公司、滿蒙拓植協會等である。

鑛産別鑛區

（康德元年末現在滿鐵中央試驗所調）

種別	産地名	位置	推定埋藏量	品位又は品質	産出高	經營者其他記事
砂金	漠河金廠	漠河市の南西二五粁	大溝の面積延長二一支里餘、砂金層は三尺内至四尺	含金量は一布度の土砂中五—六厘	光緒二二年六—七萬兩 民國初年三萬兩 〃一五年一千兩	産金地は大溝、小溝等あり、大溝は漠河砂金地の代表鑛區、光緒一五年より官營となり、民國六年露支事變より休む一九一七年坑夫一、二五〇人を算す。
〃	洛古河	洛古河上流				
〃	烏桐河	漠河金廠大平溝區の上流に位する谿谷	延長一〇支里			
〃	盤古河	漠河金廠ノ東南一四〇支里				
〃	拉烏林幹					
〃	南倭根河西北岔					
〃	北大雅拉根氣河					
〃	秋拉巴氣溝					
石油	呼瑪と漠河とを結ぶ略中央					經營者　陳謨 西比利亞事變前後參謀部の現地調査の際發見

（四）交　通

道路　漠河の交通路は黑龍江の外に舊來の公道が一條ある。即ち嫩江縣城から嫩江に沿ふて北上し、二十站を過ぎれば漠河縣內に入り、二十一站より三十二站迄を縣內の驛站とする棧道である。漠河は其の三十站に當る位置に在り、嫩江漠河を結ぶ此の站道を往時嫩漠官道と稱し延長千八百支里といはれ、更に延びて興安北省奇乾河金鑛總局に達する。全線今は蕭條たる荒道と化し、一度降雨に遭へば泥土馬腹を沒すると縣報告に書いてある。他に漠河から江に沿ふて呼瑪に到る道路があると云ふが不詳。漠河金場に至る馬車道のほか背後地金鑛に通ずる道路は日本人採鑛業者らの手で漸次建設されてゐる。兎に角、本縣の夏季陸上交通は先づ杜絶と云つて良い。冬季は橇の交通は冬地間可能である。

水運　夏冬共に黑龍江が利用される。結氷期には氷上の車行が可能、五月下旬より十月初旬の開江期には哈爾濱航業聯合會の汽船三隻（康德三年より〇〇餘屯—〇〇餘噸の輪船を配船）が毎五日に一回くらい黑河—漠河線に就航し、遡江に七日下航に三日を要する。新開拓の漠河—奇乾—吉拉林四九九粁航路には〇〇噸級汽船一隻及新造ディーゼル船一隻が不定期就航。康德元年（昭和九年）夏、滿洲國江防艦隊砲艇がアルグン河を遡つて海拉爾に達し北滿開航史上に新しい光彩を添えた。而して從來漠河に集る毛皮は結氷期を利して海拉爾に出されたとのことである。

車馬　全縣の車馬數は康德二年二月調に依れば荷馬車〇〇〇、木頭車〇〇、橇〇〇〇。

通信　漠河縣城には郵寄代辦所が設置せられ、黑河から漠河に到る郵便物所要日數は夏季一〇—一五日、冬季三〇—四五日、解結氷時五〇—六〇日、漠河鷗浦間遞送回數は一箇月二回を標準とし稀に三回あり一回の所要日數一〇日である。

建國前、嫩江—漠河に有線電信（民國五年開設）ありたるも長距離且つ山間僻地のことゝて補修困難の爲め民國十六年以後使用不能となつた。民國二十年東北無線電信分局が設立民間電報を取扱ひ、大同元年六月呼瑪に移轉後、國防上、治安工作上施設の急を認め康德二年治安維持會の手で〇〇〇〇〇を新設し治安關係及行政上必要なる電報を取扱てゐる。公衆用の電信、電話施設は未だ進められてゐない。

主要區間交通機關運賃

區間	距離	夏季（汽船） 所要日數	夏季（汽船） 運賃	冬季（橇） 所要日數	冬季（橇） 運賃
漠河—黑河	八二七粁	下航 三	一一・二〇圓	一箇月	六四・〇〇圓
漠河—鷗浦	三七六	〃 二	四・〇〇	十五日	四〇・〇〇
漠河—吉拉林	四九九	上航 七	七・〇〇	二十二日	六〇・〇〇

備考　食料及警衛費は各自負擔

漠河縣內碼頭間距離（粁）

	伊西肯	安羅卡	前站	開庫康卡	車家營子	新立屯	阿穆爾站	連金	烏蘇里	漠河
伊西肯		三九	六二	九九	一二八	一四六	一六九	一八六	二五五	三二三
安羅卡			二三	六〇	八九	一〇七	一三〇	一四七	二一六	二八四
前站				三七	六六	八四	一〇七	一二四	一九三	二六一
開庫康卡					二九	四七	七〇	八七	一五六	二二四
車家營子						一八	四一	五八	一二七	一九五
新立屯							二三	四〇	一〇九	一七七
阿穆爾站								一七	八六	一五四
連金									六九	一三七
烏蘇里										六八

碼頭別船客數

漢河縣上流地方

碼頭名	乘船	下船
吉拉林	四七	三五
畢拉爾卡	一	—
牛耳河	一〇	一九
珠爾河乾河卡	九二	一〇一
溫河卡	六八	四一
長甸卡	一	七
依穆河卡	二三	五七
奇乾河	五一六	七七七
永安山卡	一六	四
額勒和哈達卡	二七三	三二六
計	一、〇四七	一、三六七

康德二年度水運概況（哈爾濱航業聯合局調）

碼頭別貨物移出入數量（單位瓩）

漢河縣上流地方

碼頭名	移入	移出
吉拉林	一、一一二	二六、二六一
打木蘇	—	九、一八七
牛耳河	一七、九〇五	—

漢河縣

碼頭名	乘船	下船
洛古河	一〇	六八
額慶哈卡	三	四六
漢河	二、一四五	二、六四九
連金	七	一三五
阿穆爾站	二四八	一四三
馬林站	二五八	六三二
開庫康	—	一七
計	二、六七一	三、七九〇

漢河縣

碼頭名	移入	移出
洛古河	八九、四三八	三二八
漢河	一、七九三、六六〇	七九五、六二八
阿木爾卡	—	一、六〇九

珠爾河	五、七三九	二、一七一
溫河卡	四、八三八	二六二
長甸卡	五九〇	—
依木河卡	一、三八一	—
奇克河	—	五九〇
奇幹河	五八〇、二四二	二五、四八八
額勒和哈達卡	二、四一七、九九九	二四、六八九
計	三、〇二九、八〇六	八八、六四八

連金	二、四四二	—
阿穆爾	四三、九〇五	—
馬林站	一、九八八	—
車家營	一六、八八九	—
開庫康	九二、〇八五	一、〇一一
安樂卡	三、六一五	八二〇
計	二、〇四四、〇二二	七九九、三九六

（五）商工業

本縣の商業は金鑛を背後地とし對貿易に依つて發展した。從つて金鑛の衰退と對露貿易の禁止とは漢河の商勢を逆行せしめた。民國八年露國革命前迄を最盛時とし當時の人口は一萬五千とも稱せられ、革命後再び對露貿易を開きたるも、民國十二年蘇聯の對外貿易禁止、加ふるに同十八年の露支紛爭、連年の水害、滿洲事變の馬占山叛亂等に依て急激に衰微した。元來本地方は滿洲國の最北端に位し地理的條件に甚だ惠まれず、而かも豐富な金鑛を背後地に控へてゐたので、交通不便、冬季交通杜絶に依る物資の缺乏と運賃及物價の暴騰等が一の原因となり、對岸イグナシーナ又はボクロフスキーとの密貿易は盛に行はれた。現在は密貿易も行はれず商業は全く沈滯し商戸僅かに七戸に過ぎず、工業も依然として見るべきものが無い。

商品は殆ど黑河より夏季水運に依て仕入れ哈爾濱よりの仕入は極めて少い。冬季は夏季仕入の不足に依て生ずる必需品に限り馬橇に依て仕入れてゐる。移入品の主なるものは食料品、雜貨類、移出品は毛皮類を主なるものとし、本縣特產の紅豆は價格下落のため近年は振はない。

物價は建國當時に比較すれば沿岸各縣同樣急激に低下し其高低も水運の利便增加に伴ひ緩慢となつたが黑河に比すれば割高

である。

主なる商店

（黑河省公署調査康德二年末現在）

地名	店名	開業年	資本金	營業品目	從事員數
同縣城隍興街	永泰和	民國二十年	三〇〇〇円	雜貨兼糧業	八
同	利盛永	大同二年	一〇〇〇	同	五
同	義和永	康德元年	一〇〇〇	同	三

康德二年度に於ける漢河出入船舶の移出入品別數量を掲げる。

康德二年度漢河移入品

（哈爾濱統業聯合會調）　（單位瓩）

地別＼品種別	大豆	小麥	種雜穀及子	麥粉	石炭	石油	鹽	飲食料品	計
哈爾濱			三、五三三	五、〇三七		三五、四〇九	四、六三四	一四、一九三	一四、六三六
同江		一〇、九四							一〇、九四
其他黑河	九、四五三		一五、五六六	五九、六〇	三五、四七三	三、七三三	五、四六一	四八、九二三	八五、二六四
計	九、四五三	一〇、九四	一五、〇六九	六五、七七六	三五、四七三	三五、一三九	一〇、二二〇	一〇、一〇一	六六、六〇一
前年計	一一、七六〇	—	一四、四〇〇	二一一、二〇〇	—	六、三三〇	一、七〇〇	六、八〇〇	三〇五、七三〇

康德二年度漢河移出品

（單位瓩）

地別＼品種別	大豆	雜穀及種子	麥粉	鹽	飲食料品	計
哈爾濱					二五、八四四	二五、八四四
奇克特河		一四、一六六	一六、七五六		四、四六六八	三五、三九〇
黑河		九、七四四			一四、六八一	二四、四二五
額洛和古	三六一					三六一
勒哈達河					二七、〇一二	二七、〇一二
其他奇乾河	四九二	五〇、八六八	一四一、六三三		一五、〇三二	二〇八、〇二五
計	八五三	八一、四八九	一七四、六二四	二、三六八	九〇、五三三	二四九、八六七
前年計	一、八五〇	六六、六一〇	二六、一三〇	—	二三、〇一〇	二一七、六〇〇

物價

康德元年度（國幣圓）

品目	單位	夏期價段	多期に於ける價段
鷄	羽	五・〇〇	一〇圓—一二〇圓
豚	斤	一・五〇	二圓—三圓
麥粉	布袋	三・〇〇	六圓—七圓
米	布袋	一〇・〇〇	二〇圓以上
石油	罐	二・八〇	六圓以上
白酒	〃	一・四〇	四圓
豆油	〃	七・〇〇	一六圓以上
豌豆油	〃	三・九〇	八圓—一〇圓
		四・〇〇	六圓

食鹽	一フント	・一四
白糖	〃	・二五

（六）邑鎮

漠河　六十年前開設された滿洲國最北端の邑落で、縣公署所在地、鷗浦へ三七六粁、黑河迄八二七粁。採金の全盛期には從事勞働者の慰安所として相當の繁榮を示したといふが、既述の諸原因に依て人口漸減、一九二九年露支紛爭當時は二〇〇名に落ちた。康德元年十二月末現在民政部調査では戸數一五一、人口五六五（男二六二、女三〇三）となり、日本人は官公吏と其家族が多く男一三、女四、他に杉頭奉仕團員三一人が老溝に入つて採金に從事してゐる。ロシア人は男七女五七（主に滿人の妻）である。

主要機關　縣公署、滿洲國軍隊、國境警察隊、商會、農會、自衞團、山林自衞團

財政部調に依ると康德元年度の商賈業種別は雜貨商五、肉商一、客棧四、理髮所三、浴塘一、阿片零賣所一、妓館二と在り農戸は一一六戸。

連金（連金鎭）黑河より水路六九〇粁に在り別に連驛と稱ばれてゐる。對岸は蘇聯ヂャーリンダ町、此の附近阿穆爾上流々域には森林豐富、少量の砂金が在る。西比利亞出兵當時日本軍のヂャーリンダ駐屯中は同町の影響を受けて市況頗る活潑となり人口三〇〇を算し日本人雜貨商一、洗濯業二、妓樓二、支那軍隊一聯駐屯してゐた。對岸との密輸旺んに行はれ黑河との往來頻繁で、ヂャーリンダは密輸口として一時哈爾濱から酒二、〇〇〇樽、砂糖五〇〇餘噸等を密輸入したほどである。而かし日本軍の撤退、露國革命、露支紛爭など禍因打續きヂャーリンダの衰微に伴ひ現在は廢趾となり、僅かに農戸三に過ぎぬがたゞ將來背後地の林業開發が囑目されてゐる。現在は南方一、二滿里の山中に豐富な森林を有し勞力及馬匹無きため伐木してゐない。砂金は下流一〇滿里の江岸に於て減水時の採取可能、四人組一日の採金量八、一〇多羅、國幣九角內外である。

阿穆爾站　連金下流水路一七粁の黑龍江、阿穆爾河合流點に横る一島嶼の邑落である。對岸には歷史に著名なアルバジーン（雅克薩）を控へてゐる。當地は嘗て阿穆爾卡倫の置かれた地で現在は人口七九（女二二の內ロシア人一二）の寒村で商戸も無い。農耕地二六晌、小麥、燕麥、蔬菜類等の收穫物は勿論自家消費に充てられる。家畜は馬四七、豚三五、鷄六〇。薪材年三〇〇サージェン、毛皮少量、鹿茸（大同二年）二一對等で之等は農民が小舟にて渡河し副業として收穫する。金溝は阿穆爾河上流一〇〇粁の奥地に在り、十五人乘モーターボートは二〇〇粁上流に遡航可能である。交通具は橇三〇、小舟四、大車は無い。

烏蘇里卡　黑河上流七八三粁、漠河下流七〇粁に在り漠河迄騎馬で一日半を要す。戸數一、人口五（女はロシア人一）、耕地二晌、民國十八年迄は卡倫が在て兵七名駐在し侵入露兵との衝突が屢々起された。當時の耕地一五晌。薪材年三—五〇〇サージェン。大同二年は四〇〇サージェン。交通具は四輪車一、橇二。

二、鷗浦縣

（一）自然及住民

漢河及呼瑪の兩縣に挾まるゝ一四、三二二平方粁、山岳高原重疊して平野少く、既耕地の如きは僅かに三平方粁を數ふるに過ぎない。氣象は漢河、呼瑪を以て之を推すことができるであらうと思はれるが、今日迄のところ信ずべき報告がない。

面積及戸口數

（康德二年十二月末現在 黑河省公署民政廳調）

面積（平方粁）	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	一平方粁當人口密度
一四、三二二	四三三	一、八二二	四〇五	二、二二七	〇・一五

之を康德元年末現在の民政部地方司調に比較すれば、約二二六戸一、三七六人の增加を示してゐる。前表人口を民族別にすると漢人一、九二〇、滿人二八一（俄倫春人二五三及不明の漢人若干を含む）、日本內地人二二（男一四、女八）、其他男四、滿漢人の男は一、八〇四である。縣民の大部分は農業を主とし筏夫を副業としてゐる。其他縣城に一二戸の商戸があるだけである。尙康德二年九月末現在の職業別人口調を見ると農業五〇〇、商業四一、工匠一五、採金六八九とある。住民は概ね木の丸太を組合せて之に土を塗り、屋根は木板で覆ふた原始的構造の家屋に住み、燕麥、粟、メリケン粉、小麥、馬鈴薯を主食、葱、野菜類を副食物とする。

俄倫春人は主に伊勒呼里山嶺に近き山林地帶に獸皮の天幕を張り轉々として狩獵を業とする。言語は露語を使用し多少支那語を解する。衣服は獸皮、主食品は粟、黑メリケン粉、鳥獸肉で酒、煙草を好む。

（二）政治及治安、文化

縣公署所在地鷗浦は黑龍江の一島嶼に在る。交通甚だ不便なるも治安は概して良好。康德元年二月約四〇名の匪團が山島鄉を襲うた後は嘗て匪襲を聞かぬ。警備組織は警察隊、滿洲國軍及び自衛團等によつてなされ、保甲制度の實施に依つて一保四甲二一牌とし自衛團は一團團員三〇名を有する。

本縣の沿革は光緒三十三年（一九〇七年）現縣城に倭西門卡倫が設置せられ民國四年（一九一五年）卡倫は倭西門縣佐と改稱、更に民國十年鷗浦設治局と改稱後更に又鷗浦縣政府と稱したが、黑河省設置に依て現縣公署が設けられた。

文化の程度は勿論低い。縣立小學校は山東鄉に初級小學校一、教員一、兒童數一七、その就學率は二三％で黑河省內の最低率を示す。民衆學校は城區民衆學校と山島鄉民衆學校とあり、其の兒童數五七に過ぎず、未だ滿洲帝國教育會は其支會をも設置してゐない。社會事業團體も協和會分會も未設、衛生方面でも滿人醫師一名のみで賣藥業者もない。

康德三年度鷗浦縣歲入出豫算

（單位 圓）

歲	二年度	三年度	增	減
縣收入額	二六、五五三	三〇、八四七		四、二九四
縣出額	三、六一〇	六、一二〇		二、五一〇
國庫補助額	二二、九四三	二四、七二七		一、七八四

（三）資源

農產 本縣面積の約七〇％は山林地帶で、六・四％が可耕地といふ農耕に惠まれない土地である。加之氣候不順の爲め作物に見るべきものなく、平年でさへ現地の需要を充たし得ない。農民は冬季五ヶ月間副業として薪材伐採の筏夫となり、其薪材

は殆ど（康德元年は約一〇〇サージエン）航行船舶に供給してゐる。露支紛爭以來、洪水、匪害打續き農村は愈々疲弊して來た耕地は江岸に見られるだけで山東鄉附近を主なるものとし、老卡鄉、縣城、安幹卡、懷柔站等に在り、康德二年度黑河省公署調の農家一戸當り平均耕作面積では二・六八陌を示し烏雲、漠河、佛山より上位に在る。自作農中に本縣耕地面積に等しい土地を所有する農夫が居り相當の機械農具を以て其所有耕地一五〇晌に使用してゐる。

農家の耕地所有別を見るに一—五晌のもの大部分を占め六—一〇晌もの一一戸、二〇晌迄二戸、三〇晌以上一戸である。

狩獵 生産量は大同二年に於いて灰鼠皮一、三四四張、狍皮一〇〇張、狼皮二〇張、鹿茸七架等で之らは嫩江との縣境に近き山境の密林に棲む俄倫春人の獲物である。

林産 漠河縣境に近き二十站附近一帶の西羅爾奇山嶺に赤松、落葉松、白樺、榛、楊類の密林あり、又伊勒呼里山嶺、呼瑪爾河上流々域にも森林がある。直徑一—三尺、特に一・五尺もの多く、依西肯、倭西們の奥地のものは樹齡三〇〇年に達するものが少くない。電柱及枕木用材の産出を以て著名である。大同二年度伐採量二九、二〇〇本（建築材一九、七〇〇本、枕木一七、〇〇〇本、薪材八、〇〇〇本等）は九割を黑河に移出、他は地場消費に當て、黑河迄の流筏日數八—二〇日、筏夫賃銀は筏夫頭二〇〇圓、筏夫八〇圓。大同二年度の價格（圓）は次の如し。

種別	桦木線			桦方木			火柴木	大木	
原價		二・五〇	一・〇〇		二・〇〇		〇・六〇		二・〇〇
鷗浦市價		四・〇〇	不詳		不詳		一・〇〇		三・〇〇
黑河市價		八・〇〇	一・五〇		六・〇〇		一・五〇		六・五〇

鑛産 鷗浦背後地域の砂金礦は縣城より約三〇滿里の地點で富拉罕洪源金廠と稱し、鑛區は小東溝、腰溝、富拉罕溝等多數あり、民國十二年發見、翌十三年より廣信公司の經營となり物資專賣及産金專賣を爲す。最盛時は鑛夫六〇〇余蝟集したが物資極度に高く産金收買價格が安くなり加ふるに産金量減少の爲經營不振となり民國十七年現地事務所は廢止され廣信公司二十一站事務所の經營に移つた。翌年露支紛爭の際一時經營を放棄した結果自由採掘に委せ、康德元年六月滿洲採金會社の分局設置同年八月從來の自帶金制度を廢止して專賣に改め、採金會社所有鑛區を分局長が請負ふこととなつてゐる。

縣面積並土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地			不可耕地			總面積ニ對スル比率			可耕地ニ對スル比率		
	既耕地	未耕地	計	可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地	
一四、三二二 平方粁	三 平方粁	九〇九 平方粁	九一二 平方粁	一三、四一〇 平方粁	六・四 %	九三・六 %	〇・〇一 %	六・四 %	〇・三 %	九九・七 %		

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	一〇	一〇
其他豆類	一	一
高粱	一	一
粟	二〇	二〇
玉蜀黍	三〇	四〇
小麥	一〇	一〇
水稻	一	一
陸稻	一	一
其他雜穀	三〇 畝	三〇 瓩
計	一〇〇	一一〇

地價

（康德二年十月現在　黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
第一區	耕地	上	（每畝）一〇・〇〇円	產業類傾約一〇〇圓
		中	八・〇〇	同　六〇圓
		下	五・〇〇	同　四〇圓
第二、三區	同基	上	（每方丈）三・〇〇	
		中	一・八〇	
		下	七〇	
	同宅地	上	（每方丈）二・〇〇	
		中	一・〇〇	
	同耕地	下	五〇	
	同	上	（每畝）四・〇〇	產小麥八甫度
	同	中	三・〇〇	同　六甫度
	同	下	二・〇〇	同　三甫度

畜產

家畜數（康德二年九月一日現在　實業部調査）

種別	數量	備考
牛	八五頭	前年に比し合計は三倍以上の增加、特に馬は四・五倍となつた（縣報告との比較）
馬	五〇四	
騾	—	
驢	—	
羊	—	
豚	七七	
計		
雞	五九七	
計	六六六	

林產

森林狀況（康德元年現在　實業部調）

森林面積	立木蓄積量（立方米）			
	針葉樹	濶葉樹	計	
五、三九六平方粁	三二、三七六、〇〇〇	五九、三五六、〇〇〇	九一、七三二、〇〇〇	

（四）交通

鶴浦縣城は黑河より水路四五三粁、漠河より同三七六粁、黑龍江上の島嶼に在る。對岸に至るには粗末な櫓櫂を用ふる木造船三隻があり日常渡航の便に供せらる。夏冬とも寧ろ江上の利用多く陸上交通は閑却されてゐる。五月中旬—十月初旬の間は哈爾濱航業聯合會の黑河—漠河線定期航路の汽船が毎五日寄航する。冬期は橇に倚るほかなく、黑河へ十五日乃至二十二、三日を要してゐる。交通機關は四輪車〇〇、三輪車一一、橇〇〇〇がある。

道路は往年對露軍事道路として嫩江より漠河に通ずる嫩漠官道が本縣の畧中央を經て建設（十八站より二十站迄三站は本縣に置かる）され、其後此の道路は瑷琿より江岸に沿ふて漠河に至る連絡道路として兼用せられた。而し乍ら此の舊道は甚だ粗惡なもので雨季は全く利用し得ず橋梁さへ見受けられない。

縣內各埠頭間秤程

察哈彥	二六	五四	一〇六	一二四	一五九						
懷友站		二八	八〇	九八	一三三						
安幹卡			五二	七〇	一〇五						
鷗浦				一八	五三						
桂花站					三五						
依西肯											

康德二年度鷗浦縣水運概況（哈爾濱航業聯合局調）

碼頭別船客數

碼頭名	乘船	下船
桂花站	三五一	九三七
鷗浦	一、九五三	二、四二九
計	二、三〇四	三、三六六

碼頭別貨物移出入數量　（單位瓩）

碼頭名	移入	移出
依西肯	五、三七五	
桂花站	二一四、九六〇	一、六四〇
安幹卡	六四〇	
懷友站	五、二九二	
鷗浦	四八五、八〇九	一、六四七
察哈彥	四、〇八七	
計	七一六、一六三	三、二八七

註　品種別數量は總論參照

（五）商工業

商業　本縣の商業は連年の水害をはじめ、唯一の金廠たる富拉罕金廠が自帶金制度（總論鑛產の項參照）を禁じた結果同鑛々丁は縣城商店の顧客たり得ざるに至つたこと、沿岸より二十粁の間森林伐採を禁ぜられ又阿片栽培禁止に依て一般農民の購買力が極度に低下し回復の見込立たざること、對露貿易禁止等の諸理由に因つて甚だ振はず商戶は縣城を除けば富拉罕金廠附近に同金廠鑛丁を顧客とする物資專賣所が在るのみである。

本縣々城の主なる商賈は雜貨商五、茶社一、飯館三、棧房三、資本金は三、〇〇〇圓を最高とし總額一萬圓に滿たぬ。此の他燒餅舖二、山貨舖、木舖、理髮店、洗坊（ロシア女）の小舖がある。

民國十八年以前は相當殷賑を極め、民國四年以來ロシアとの交易は益々密接の度を加へた。之は現縣城（當時の倭西門）が政治の中心地となつたからである。當時宛も露西亞に革命起り酒類の密輸激增し、倭西門に於ては對岸チエルニロフと交易關係を結び酒を販賣して砂金と交換し寡少な資本を以て多大の利益を得たもの多く、從つて他業から此の商賣に轉じたもの尠からず其の最も盛んなる時の同業者は三、〇〇〇名に及び、之と同時に他縣から進出し來る資本家の經營する商店も增加し、縣下の商店數は三〇戶に近く鷗浦鎭のみで二〇戶に達したといふ。當時の旅館は四戶、旅客は日に二〇〇人に上ること珍しからず終日江上に人跡が絕えなかつたと。然し殷盛時代は六年にして過ぎ民國十年に至つて遽かに露貨低落し商業は衰勢に向ひ同十四年には十四戶に減じた。現在商品は黑河より夏季水運に依て仕入、冬季は必要品のみを馬橇を利用して購入するが、住民の需要に應ずる程度の商業である。

鷗浦縣城商店

（康德二年末現在　黑河省公署調）

店名	開業年	資本金	營業種目	從業員數
萬發合	康德元年	五〇〇円	雜貨店	七
復昌祥	大同二年	三、〇〇〇	同	四
福德永	同	五〇〇	同	五
發記號	康德二年	三〇〇	同	三
久大商店	同	一、〇〇〇	同	三
隱關茶社	同　元年	四〇〇	茶館	四
德順齋	同	三〇	飯館	三
如意館	同	一〇〇	同	三
鴻盛園	同　二年	二〇〇	同	三
鴻美樓	大同元年	一〇〇	樓房	二
邱家店	康德二年	一〇〇	同	二
永順店	同	一〇〇	同	二

鷗浦縣城物價（單位國幣圓）

（康德元年度　黑河省公署調）

品名	單位	一月	四月	七月	一〇月	品名	單位	一月	四月	七月	一〇月
白米	每甫	七・二〇	七・四〇	六・八〇	七・〇〇	猪肉	每斤	〇・四〇	〇・五〇	〇・五〇	〇・五〇
包米	〃	二・四〇	二・四〇	二・二〇	二・一〇	鷄肉	〃	—	—	—	—
元豆	〃	二・一〇	二・一〇	二・〇〇	二・〇〇	鯉魚	〃	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇
小麥	〃	二・八〇	二・八〇	二・四〇	二・五〇	毛巾	每條	〇・四〇	〇・四〇	〇・二五	〇・二〇
面粉	〃	五・〇〇	五・〇〇	三・五〇	四・〇〇	洋襪子	每雙	〇・四五	〇・四五	〇・三五	〇・三〇
燒酒	〃	九・〇〇	九・〇〇	八・五〇	九・〇〇	火油	每罐	一〇・〇〇	一〇・〇〇	七・五〇	八・〇〇
蜂蜜	每斤	〇・七五	〇・七五	〇・七〇	〇・七五	豆油	每甫	七・五〇	七・五〇	五・五〇	—
白糖	〃	〇・三〇	〇・三〇	〇・二五	〇・二五	醬油	每斤	〇・三〇	〇・三〇	〇・二〇	〇・三〇
紅糖	〃	〇・三〇	〇・三〇	〇・二〇	〇・二五	粒鹽	每甫	九・〇〇	九・〇〇	六・五〇	七・〇〇
氷糖	〃	〇・五〇	〇・四五	〇・四〇	〇・四五	食醋	〃	四・五〇	四・五〇	三・〇〇	三・五〇
牛肉	〃	〇・五〇	〇・五〇	〇・四〇	〇・四〇	豆餅	每塊	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇	〇・七〇

（六）邑鎮

鷗浦 縣公署所在地。嘗て倭西門と稱ばれてゐた。黑龍江上の島嶼に在り、島の面積六平方滿里、周圍は約四百米幅の水流に圍繞されてゐる。露支紛爭當時は人口三、〇〇〇を算し、一九三一年には二三〇に激減、康德二年（一九三五年）には前年より回復して三五戶一六九人（男一四三、女二六）となつた。此の內日本內地人は男六女二である。

民國十年設治局鷗浦縣政府時代から縣城內の商店は相繼で倒產し民國十八年露支紛爭に甚大な損害を蒙り、民國二十年支那軍隊の叛亂に遭て住民は不安に陷り商況も昔日の俤を留めぬ悲況となり現在僅かに商戶四に過ぎぬ。主要機關は縣公署、國境警察隊、滿洲國軍、商務會。

山島鄉 鷗浦縣城の對岸陸地より六滿里を距てゝゐる。康德元年度戶數五一、人口二〇九、本縣最大の部落で、農務會、小學校があり、滿洲國軍が駐屯してゐる。

三、呼　瑪　縣

（一）自然及住民

地勢　北西より南東に流るゝ黑龍江を以て蘇聯と境し灣曲多き國境線を描き北は鷗浦縣、西は興安東省、南は瑷琿、嫩江の兩縣。その大部分は小興安嶺の山岳又は丘陵地帶、最高五〇〇米、それが黑龍江に迫るところは處々斷崖をなしてゐる。呼瑪河の下流南北三〇支里、東西一二支里を除けば、餘は江岸に掌大の平坦地を見るに過ぎぬ。

縣の中南部を貫く小興安嶺より東流して黑龍江に注ぐ河川と、西流して嫩江に入る小河川とがある。最大の河川は呼瑪爾河大興安嶺を發し漠河、鷗浦の二縣を經て來り、本縣の中北部を曲流して下流にデルタを造り黑龍江に合してゐる。流路延長四八〇粁、集水面積約二二、二〇〇平方粁に亙り其流域には廣袤たる大森林を擁し本縣唯一の經濟的原動力となつてゐる。

氣象　日本海を距る最短距離一、三〇〇粁大陸的氣候で寒暑の差著しく變化は極端である。黑河地方觀象台の觀測記錄、縣公署の調査記錄等に依れば次の如くである。

氣溫（康德二年の每月平均氣溫）

一月	（一）二七・〇度	二月	（一）一六・八	三月	（一）八・五	四月	（一）	五・六	五月	六・一	六月
一二・四	七月	二四・一	八月	一八・一	九月	八・二	十月	〇・六	十一月	（一）二二・七	十二月
（一）二七・五	降水量	一月	〇・七mm	二月	一三・〇	三月	一・一	四月	一九・一	五月	四八・四
六月	六〇・九	七月	六七・四	八月	五五・六	九月	四三・七	十月	五・三	十一月	三・一
十二月	一・五										

降雪は初雪十月上旬晩雪四月中旬、積雪量二尺內外。積雪適當であるため伐木、造材、運材等は冬季を最も可とし、夏季林木の生長季には氣溫高く、降水量も亦適量、且つ高緯度のため日照時間長く比較的林木の年生長量は多大なるものがある。

氣象に關する縣の報告に依れば——

夏季最高八七—八（華氏）度、冬季最低四五—六度。冬季强風全くなく謂はゞ無風帶と稱すべき狀況に在り比較的凌ぎ易い夏は晝夜寒暖の差甚しく、山地では六月中朝霜を見ること珍しからず。結解氷は氣溫の差に拘らず一定してゐる。結氷は十月下旬完了、二週間後に馬車橋を通ずる。解氷は四月下旬—五月上旬開始以後一週間流氷を見る。解氷前二週間は車馬の通行危險。陸地の凍結は地下六尺と稱してゐるが、採金調査隊調査の結果は夏季地下六乃至三〇尺凍結しありと云ふ。夏は白夜に似たる現象を呈し夜は夏至の頃が一時間半位、冬は殘照長き爲夜逆比して長からず一年の多くは晝夜の差が甚しい。五六月の交雨量最も多く夏季にかけて平地の一部又は大部に浸水を見る。草木は五月中旬に發芽、蒲公英の開花について菖蒲、芍藥、山百合等一時に咲き誇り、秋の七草に至るまで花園の觀を呈する。五月下旬より八月中旬迄虻蚊最も多く、日中に於ける山地旅行は勿論農耕も甚しく困難、旅行の如き早朝又は夜間を撰ぶの他なき有樣である。又、毒蛇も多いと謂はれてゐる。

尙、康德三年（一九三六年）六月十九日呼瑪に於いて日本斯界の權威が集り、日蝕觀測に大成功を收めたことは世人の耳新しい記錄である、

住民　康德二年十二月末現在黑河省公署總務廳調の本縣戶口は六五三戶、二、五九五人で一平方粁當人口密度は〇・三〇〇、民族別にすると次の如くである。

	總人口	滿漢人	回族	日本人 內地人	朝鮮人	歸化	備考
男	一、六四五	一、五七〇	一四	一〇	五〇	三	滿人中には漢人若干及オロチョン人五六一を含む歸化の內一〇九はロシア人。
女	九一七	八一二	八	一三	三一	一〇六	
計	二、五九五	二、三八二	二二	二三	八一	一〇九	

一九一二—三年は縣內の產金最も豐富で產金地帶の入口をなした金山鎭の如き戶數二千人口一萬五千を數へた。當時日本人

の居住者五〇〇、滿人の妻となつたもの一二人、現に邦人の墓地がある。庫瑪爾も亦下流產金地帶の入口として人口の蝟集を見た。然るに產金漸落の兆を示し露支紛爭の頃は殆ど廢墟と化した。

(二) 政治及治安、文化

政治 清朝時代呼瑪爾に協領を置いて鄂倫春人を統轄した。宣統元年(一九〇九年)に至て呼瑪河に卡倫本部が設置せられ民國元年(一九一二年)に代つて呼瑪設治局を置き、更に一九一四年設置局を改めて呼瑪縣とし現縣城の地に公署を移して黑龍江管下に屬せしめ、康德元年(一九三四年)以來黑河省の管下となつた。嘗て繁盛を極めた產金地帶も一九一八年頃より產金減少に依つて凋落、一九二八年には黑龍江の大水害、更に其の翌年の露支紛爭に依る掠奪放火を蒙るに至り殆ど廢墟と化し、加之一九三一年には滿洲事變後の駐屯軍の兵變、翌年馬占山反亂と大水害等相次ぐ禍因に交通は杜絶し耕作は不能となり物資は極度に窮乏を告げた。

康德元年縣行政機構の改組あり、行政區劃を二區に分ち、第一區は呼瑪縣城を中心とする二十四屯、第二區は金山鎭を中心とする十一屯及金鑛地帶となつた。縣財政は縣勢の衰微甚しきため極度に逼迫してゐる。康德三年度の縣財政は左の通りである。

康德三年度呼瑪縣歲入出豫算

(單位圓)

歲入出	二年度	三年度	增減
縣收入額	二九、四四〇	三六、二八三	六、八四三
國庫補助額	六、九四六	九、五六三	二、六一七
	二二、四九四	二六、七二〇	四、二二六

治安 大同元年十二月百餘名の匪團が縣城を襲ふて擊退されたが、其後江岸には匪團を見ない。只金鑛地帶には所謂金匪の出沒を見る。呼瑪、金山鎭を中心として縣公署員を以て特別工作班が組織せられ又縣職員を以て治安工作班を編成し、何れも治安維持會の統制下にあつて保甲制の强化、戶口調査の徹底、採金苦力の身分證明書發給、隱匿武器の回收、對蘇特別工作及縣宣撫小委員會の宣撫小作が行はれ又討匪通匪の檢舉等に効果を收めてゐる。保甲制度も整備し二保五甲四八牌とし自衛團は二團五〇名である。

教育 康德二年の教育費二二八〇圓、學校は初級小學校四、教員數五、兒童數九四、就學率四〇%で、特に本省唯一の鄂倫春小學校は康德二年十月一日より佐關佐領公署に開設されたものである。元來本縣の鄂倫春小學校は民國十七年(一九二八年)湖通鎭(舊呼瑪爾)に設立された當時は經費比較的潤澤で成績見るべきものがあつた。而し乍ら同民族は天性讀書を好まず、經費支出困難となり就學兒童の激減を來し有名無實の狀態となつて建國後は閉鎭してゐた。民衆學校は城區及金山鎭に各一校あり其の兒童數四〇。文教團體としては滿洲帝國教育會呼瑪縣支會がある。

宗教 儒教、回教、天主教(希臘正教)が主なるもので、金山鎭に關岳廟、呼瑪附近に關帝廟がある。

社會 社會事業としては康德二年三大槨牧公司に義倉一棟設置された他見るべきものは無い。

衛生 醫師(商務會長)一、藥商一あるのみ。

(三) 資源

農產 總面積に對する可耕地は一・一%、既耕地は〇・三%、從て現在農業として見るべきものなく、將來に對する期待も無い。一九一三年迄は蔬菜以外の栽培を見なかつたが、一九一四年に至り始めて小麥と燕麥との播種を見たといふ。江岸一帶は比較的砂礫を混ずる沖積土より成るが、呼瑪河流域は腐植質壤土地帶多く些か地力大、小麥、燕麥等良質のものを產するが、縣內消費に多額の不足を告げ大部分黑河から移入してゐる。無霜期間は黑河の一三〇—一三五日なるに比し呼瑪は一二五—一三〇日、從て黑河に於て可能なる水稻の栽培も呼瑪では疑問とされる。農家は康德二年度は於て二七八戶、一戶當耕作面積三・九一陌。農民は富裕ではないが食ふに食なしと云ふ者はない。一部鮮人部落を除けば殆ど小作人なく、自ら開墾の上自

作せる小農が大部分である。

縣面積並土地利用狀況

總面積	可耕地			不可耕地	總面積ニ對スル比率				可耕地ニ對スル比率	
	既耕地	未耕地	計		可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
八、六一九平方粁	二平方粁	七三平方粁	九五平方粁	八、五二四平方粁	一・一%	九・八九%	〇・三%	〇・八%	二三・二%	七六・八%

（大同二年現在）

普通作物

種目	作付面積	收穫高
大豆		
其他豆類		
高粱		
粟		
玉蜀黍		
小麥	二三〇畝	一九〇瓲
水稻	二〇	二〇
陸稻		
其他雜穀	七〇	三〇
	二一〇	六〇
	一三〇	二六〇
		一〇〇
	五〇	四〇
計	七一〇	七〇〇

（康德元年現在）

特用作物

種目	作付面積	收穫高
煙草	三畝	一瓲
線麻	二	二
計	五	三

（康德元年現在）

大同二年（昭和八年）此地方を踏査した滿鐵調査班は縣下の作付歩合につき左の報告をしてゐる。（前掲康德元年調とかなりの相違がある）

耕種作物	作付歩合	晌當收量
小麥	三〇%	三五瓲
大麥	一三	四五
燕麥	一三	四〇
包米	一〇	三五
大豆	五	二五
粟	三	三〇
黍	六	四〇
蕎麥	二〇	二〇
馬鈴薯	五	五〇
其他蔬菜	三	三〇
計	一〇〇	

地價

（康德二年十月現在　黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
警察區	耕地	上	（每畝）一圓	
同	同	中	四・〇〇	產小麥　四甫度
同	街基地	下	三・〇〇	同　三甫度
宅		中	（每方丈）・八〇	
地		中	・六〇	

尙玆に注目すべきは縣城の南西二杆半の地點に於て、大農式經營をなしつゝある三大墾牧公司である。同公司は民國四年創立當時滿人三人合資江洋六〇萬元、後に李雲書の經營となる。既耕地六〇〇晌、未墾地三、〇〇〇晌、地味は腐埴質壤土にして呼瑪縣としは最良、黑河方面の土地に類似、多數の機械農具を使用して左記耕作を行ふ外、公司生產の小麥により六、〇〇〇布度以上の麥粉を製造販賣してゐる。事變後深刻な打擊を受けて缺損を續けてゐるが、兎も角北滿大農經營の一標本と云ふことができる（昭和八年滿鐵調査班報告による）尙、康德元年度同公司使用農具に關する縣報告は、トラクター六、鐵鹵一〇、割地機九、打草機一、播種機七、清量機一、打場機三、所有車及橇は車八台、橇一〇台、馬匹二八、使用人四一となつてゐる。製粉工場に關しては工業の部參照。

三大公司作付面積及收量

（昭和八年滿鐵調査）

種別	作付面積（晌）	平年作一晌當收量（布度）	生產高（布度）
小麥	三〇〇	三〇	九・〇〇〇
燕麥	二七〇	四〇	一〇・八〇〇
大麥		四〇	・二〇〇
包米		四〇	・〇四〇
大豆		三〇	・〇六〇
糜子		四〇	・〇八〇
粟		二五	・〇二五
馬齒		三〇〇	六・〇〇〇
其他雜糧		三〇〇	六・〇〇〇
計	五八五		三二・二〇五

畜產 畜產に就ては特記すべきものがない。只縣城の南方一邦里半に牧養場と稱するものあり、土地七〇〇晌、地主朱國安、農家より牛馬の依託飼育をやつてゐる。滿鐵の調査班は、山野到る處に牧草繁茂せることを述べ、第二のホロンバイルを想像すると記してゐるが、露支紛爭以後家畜は減少の一途を辿り特に馬匹の不足は農耕並物資輸送難を來しつゝあり、縣の報告はその補給の急務を說いてゐる。左表の內馬は棲林馬約八〇〇を含んでゐる。

畜產

（康德二年現在　實業部調査）

種別	數量	備考
牛	一四六頭	前年に比し合計約二百の增加で馬は三倍以上の增加（縣報告との比較）即ち馬の增加はオロチョン人使役の棲林馬（四不像子なるべし）七九六頭を新に加算したる爲か。
馬	一、二七一	
騾	一	
驢	四五	
羊	一六八	
豚		
計	一、六三二	
雞	二、三七四羽	

林産

立木蓄積量（立方米）（康德元年現在實業部調査）

森林面積	針葉樹	濶葉樹	計
一、七四七（平方米）	七、八六一、五〇〇	一六、五九六、五〇〇	二四、四五八、〇〇〇

呼瑪縣森林分布狀態（黑河林務署調）

林種	面積（町歩）	百分率%	立木蓄積量（單位石） 針葉樹	濶葉樹	計
針葉樹林	三二三、一〇〇	三三	一四、〇三二、〇〇〇	一〇、九六二、〇〇〇	一五四、九九四、〇〇〇
針過混淆林	二三五、〇〇〇	二四	八二、七三一、四〇〇	二二、二七三、〇〇〇	一〇五、〇〇四、七〇〇
針濶混淆林	一七六、二〇〇	一八	四〇、三三六、〇〇〇	三六、九八二、〇〇〇	七七、三一八、〇〇〇
濶過混淆林	一一七、五〇〇	一二	一一、六九八、六〇〇	三六、七一八、〇〇〇	四八、四一六、六〇〇
濶葉樹林	一二七、二六〇	一三	五、六三四、四〇〇	三七、七〇七、二〇〇	四三、三四一、六〇〇
計	九七九、〇六〇	一〇〇	二八四、四三二、四〇〇	一四四、六四二、五〇〇	四二九、〇七四、九〇〇

樹種混淆歩合（同署調）

樹種	蓄積量（單位石）	針濶葉樹百分率%	混淆歩合 全蓄積百分率%
アカマツ	六三、三一九、〇〇〇	二二・三	一四・八
カラマツ	二二、一一三、四〇〇	七七・七	五一・五

針葉樹計	二八四、四三二、四〇〇	一〇〇・〇	六六・三
シラカバ	一一七、八七四、三〇〇	八一・四	二七・五
ヲノヲレカンバ	八、六一四、八〇〇	六・〇	二・〇
ナラ	一七、九二六、五〇〇	一二・四	四・二
雜木	二二六、九〇〇	〇・二	—
濶葉樹計	一四四、六四二、五〇〇	一〇〇・〇	三三・七
合計	四二九、〇七四、九〇〇		一〇〇・〇

林産 滿鐵の調査に依れば金山鎭の西なる暖泉子以北江岸を距る一五—三〇滿里の間約四—五〇〇町歩には一〇〇—二〇〇年の赤松が密生してゐる。用材としては此地方を第一とする。また楢、白樺が混生してゐる。次に二道盤査の西北十五站に達する呼瑪河西岸、約五萬町歩の區間は五〇—四〇〇年の落葉松密生、其一部の如きは前人未踏にして俗に幽靈谷と呼ばれる。金山鎭—十四站間本街道以南は一〇—七〇年生のダフリカカラマツ、モンゴリナラが白樺雜樹林に混生し密林を形成、二道盤査—呼瑪渡口間の呼瑪河兩岸二〇滿里には七〇—一〇〇年生の落葉松密生し電柱材に用ふるに足る。新街基山道より鷗浦縣境に向へば五〇滿里に亘り白樺、柞の密生を見るも薪材としても不適當のものが多いとある。

黑河林務署は康德二年八月末より呼瑪縣森林の實地調査を行つたが其報告によると、呼瑪爾河流域の大森林は總蓄積量約四億三千萬石に達し針葉樹林が最も多量である。樹種は主要樹種を擧げると、

針葉樹　シベリアアカマツ、ダフリカカラマツの二種

濶葉樹　モンゴリナラ、アムールシナノキ、ハルニレ、ドロノキ、アムールドロノキ、シラカバ、ヲノヲレカンバ、イヌエンジユ、ヤマナシ、エゾノウワミヅザクラ、ハンノキ、ナナカマドの十二種

分布狀態より見ればダフリカカラマツ最も多く好みて低濕地に生育しシベリアカラマツは高燥瘠地に多い。濶葉樹では白樺が

最多量、モンゴリナラ之に亞ぐ。

林種を五大別すれば森林の分布狀態は次の如く概測された。尙ほ黑河林務署の調査報告は詳細を極めてゐる。

本縣の國有林は闊達罕、嗳泉子、旺哈達の三箇所である。總生長量の推定は四四〇萬六千餘石、全森林の百分の一强に過ぎないが本地方は過熟林分であるから至當で、合理的伐採方法を利用して更新を確實ならしむる必要がある。

各樹種の利用步合を見ると赤松(樟子松)及唐松(義氣松、黃花松)は共に六〇%白樺は大級木少く用材としての利用率四〇%利用し得べき立木材積は赤松三、一〇〇餘萬石、唐松一億八三六萬石、白樺二、六〇〇餘萬石、濶葉樹を合計すると三、三九〇萬石總計一七、三二六萬石となつてゐる。

此の利用し得べき蓄積に對し輪伐期百二十年として見込年伐量を算出すると、赤松二五萬八千餘石、唐松約九〇萬三千石、濶葉樹二八萬二千石(內、白樺二一萬七千石)計一四四萬餘石となる。本地方は從來呼瑪爾河、黑龍江流域附近に於てのみ造材してゐたため筏流の經驗無く、多くの場合は積雪を利用して編成地點に五月上旬迄に集積し、五月下旬解氷後編材し流筏してゐた。而して流筏の容易な黑龍江本流附近の森林地帶は殆んど伐採されてゐるので今後は小川を遡て伐材する外無く從て管流を爲さねばならない。造林は露西亞式方法に據つてゐるから今後は哈爾濱と同樣にする必要がある。編筏は普通丸太二—四〇本。拌子の薪材編筏は普通二一尺の末口一尺位丸太四本を以て枠を作る方法で一載二四—五サージエン(一サージエンは實積五〇九立方尺)位を積載、又は丸太筏の上に二—三尺の高さに積載することもある。流送夫は一〇—二〇名、二道盤査附近から五—七日位で黑河に到着する。

山貨　狩獵は專ら樓林人(鄂倫春人の俗稱)によつて行はれるが近年は振はない。黑河林務署の康德元年度調査では狩獵高概數次の如くで、表中の鹿茸は藥用とする。

種類	狼皮	灰鼠皮	狐狸	貂子皮	白兎皮	黃鼠	水獺	狍皮	猞猁皮	香猁皮	鹿茸	計
數量(張)	七五	七、四五三	三	一五	五〇	一三			一八	八四	八(架)	
單價(圓)	一七・六	一・二	三〇・〇	二・五	〇・三	二・六	五〇・〇	一・〇	四〇・〇	一・〇	一五〇・〇	
總價額	一、三二〇・〇	八、一九七・二	九〇・〇	三七・五	一四・〇	三九・二	二五〇・〇	五〇〇・〇	七二〇・〇	八四・〇	一、二〇〇・〇	二二、七五一・九

木タールは現在本地方で採取してゐるのは赤松と白樺から採取する二種で其の製法は頗る原始的な樹皮の乾溜法である。用途は車軸の減磨油、保革油、木材防腐劑、鐵材の防鏽用塗料、煤烟(活版用インクの原料)、燈用油及クレオソート油等がありクレオソート油は工業上の價値あるものと認められてゐる。

鑛產　呼瑪縣の地質は基岩の殆ど全部を花崗岩とし、土質は之が風化に依る腐埴壤土を主とする。表土の深さ六—七寸、結合土は疎なるも濕度は適當、但し多量の潛水の爲大面積の低濕地を爲す所がある。

砂金　本縣は砂金を以て識られてゐる。金廠地三五箇所に達し、地圖を見ると鑛山の記號で埋められてゐる。之を大別すれば縣の西北部呼瑪河流域の金廠地帶、金山鎭の西方なる二道盤查より南西にかけての金廠地帶となる。光緒末年より民國五年(一九一六年)に至る七、八年間は黃金時代を現出し、一日一人當り採金量五〇—一〇〇ゾロトニーク、一箇年總產量五〇〇プードを下らなかつたといふが其後衰微を辿つた。

呼瑪爾河上流一五〇滿里一帶に金鑛發見當時は露國人が蝟集し、露商和記公司は採掘權及物資專賣權を不法獲得、光緒三四年江省巡撫が之を回收して官營とし呼瑪爾河金鑛總局を設置した。全盛時代は呼瑪爾河金廠、餘慶金廠、官銀號踊苗公司、廣信公司及濬源公司を五大金廠と稱してゐた。滿洲採金會社の設立後本縣在來の鑛區は同會社の所有となり、目下經營中の金廠(裕利金廠を除く)と採金會社との請負契約又は更に其下請となつて經營してゐる。即ち康德二年九月現在の左記金廠がそれである。

イ、福興公司金廠　資本金一萬圓、康德二年春より自帶金制度を開始、採金會社との關係は金利貨利の二割を請負料として

受く。鑛夫二〇〇含金量八二%、所屬鑛區は福興溝、二龍溝、大平溝、達拉罕溝、東烏勒。

ロ、達拉罕金廠　福興公司の下請をなし、又同公司と共同購入をしてゐる。含有量八二%、鑛夫四〇。

ハ、格良滿河金廠　興安金廠の下請をなす。含金量八六%、採金苦力數一五〇、鑛區は罕達河、格良滿河。

ニ、大昌金廠　興安金廠の下請、含金量八〇%、採金苦力約四〇〇、鑛區は三分處、二道溝、三道溝、四道溝、五道溝、大溝、老溝支溝、上溝。

ホ、裕利金廠　鑛區は呼瑪縣城を距る西方一三〇滿里、其の面積三〇〇方滿里に及ぶ。民國十八年二月作業を開始したもので、滿洲採金會社と何等の契約は無い。含金量八〇%、年產平均五、〇〇〇ゾロトニーク、鑛夫二五〇、自帶金制度を實行してゐる。

主要鑛區は興隆溝、萬興溝、高力店、高勝溝、寶全溝、蒙古力、北習力、瓦習力、安娘々、倭克達、吉龍小溝、博西力、瓦拉里、金龍溝、全勝溝、全西力、交不列、會寶溝等で興隆溝と總稱する。

本縣金鑛の採金方法は漠河方面と同じく水洗法を行ふ。砂金層は通常地下八—一六尺に在り、先づ長さ六尺幅四尺位の長方形の穴を掘下、砂金層に達すれば一定の距離を隔てゝ同樣作業を繰返し、鑛脈の測定後採掘に着手する。冬季結氷中は先づ地表で薪を焚き凍結の溶解を待つて穴を掘り、その穴に燒石を投じて蓋を施し、其儘二、三時間經過後採掘を開始すると謂ふ極めて在來式の粗放な方法による。

古老は治安の確立を見たる上合理的方法を以て開鑛すること可能となれば、產金現在に五倍することは容易だと云てゐる。(年產五、五〇〇ゾロトニーク)として之が五倍は二七、五〇〇ゾロトニーク)。而して從來此の地方の產金は金山鎭を取引中心地とし、蘇聯は民國二十年ウシヤコウオ・トルグシンの手を以て滿洲側產金の吸收策に努め、金山鎭一帶の物資缺乏に乘じ密貿易頻る旺んに行はれ、一方黑河商人の手に買收されて特殊經路に依り上海に流失したと記されてゐる。

石炭　縣城北方一二〇滿里に比拉額炭坑があり炭貨は唐山炭に伯仲するといふ。

水產　年漁獲高約一、二〇〇布度にして、毎年十月頃呼瑪河に鮭が遡上し、農民は網又は魚釵で之を漁る。其魚獲高年六〇〇—一、〇〇〇布度に達することもあり、之らは橇で黑河の市場に送られるといふ。康德元年度の魚獲高概要次の如し。

種別	鯉魚	鮒魚	黃花魚	狗魚	草根魚	鯰魚	大瑪哈魚	細鱗魚	鴨綠魚	チヨーロ魚	計
年產額(布度)	五〇	一〇〇	一五〇	二〇〇	一〇	二〇	六〇〇	二〇	五〇	二〇	一、三三〇
一斤價格(圓)	·二〇	·一五	·二〇	·〇八	·一〇	·〇五	·一五	·一〇	·一〇	·二〇	

(四)　交　通

道路　この縣の邑落は江岸に在り、夏は水路冬は氷上を往來する爲道路は甚だ惡く、山地に入る道路の如きは採金伐木に從事する者の爲にのみ存在してゐる。但し堅氷期は橇による交通到處概ね可能である。

康德元年の縣の報告に依れば道路は

一、金山鎭—十四站　幅員約〇間延長〇〇〇滿里

夏季馬車純露式四輪車を通ず、途中呼瑪河一、五〇〇米渡舟。

一、呼瑪及庫瑪爾—五道溝　幅員約〇間延長〇〇〇滿里

夏季馬車を通ず、途中呼瑪河に渡舟あり、馬車二台を一時に運搬可能。

一、金山鎭—呼瑪爾(湖通鎭)　幅員約〇間延長〇〇滿里

夏季馬車を通ず。

一、金山鎭—黑河

冬季江水面又は陸路を自動車を通ず、黑河迄自動車にて〇日、橇にて〇日、解氷後一ヶ月は交通不能である。

車馬　黑河日滿長途汽車組合は冬季(十一月—三月)のみ黑河・金山鎭間のバスを營業してゐる。結氷は金山鎭及呼瑪に於て

一・三二米、呼瑪爾に於て一・五五米(何れも康德二年二月調)自動車の氷上速力は二〇乃至三五哩といふ。康德二年二月調全縣車馬數は荷馬車〇〇〇、木頭車〇〇、牛車〇〇、轎〇〇である。

水運　五月下旬—十月中旬に至る約六箇月間、黑龍江に依る水運が利用され、上流は漠河、吉拉林迄、下流は黑河、哈爾濱へ交通がある。哈爾濱航聯の黑河—漠河線には〇〇〇噸級乃至〇〇餘噸の外輪船が航行毎五日呼瑪（古站）に寄港してゐる。黑河—呼瑪の所要航行時間は普通上航四十時間下航十二時間である。

黑龍江の支流たる呼瑪爾河は本縣最大の河川で、主として流筏に利用されてゐるが、吃水二尺、〇〇〇〇斤積の發動機船は約一七〇粁迄遡航可能と謂はれてゐたが、康德二年八月呼瑪爾河調査隊(最近呼瑪河と通稱す)の調査の結果、河口より九〇粁上流(呼瑪縣城より一〇〇粁)の三間房迄は吃水〇・八米以下の船舶は概ね航行可能と報告せられ、所々の淺灘部を整備すれば將來有望なる可航河と謂はれてゐる。

各碼頭區間距離（粁）

	沙漠天	庫馬爾	委門站	瑪爾河	呼瑪（古站）	呼瑪河	新節克	新街基
沙漠天		九	二二	四六	七四	九四	一〇八	一三七
庫馬爾			一三	三七	六五	八五	九九	一二八
委門站				二四	五二	七二	八六	一一五
瑪爾河					二八	四八	六二	九一
呼瑪（古站）						二〇	三四	六三
呼瑪河							一四	四三
新節克								二九
新街基								

康德二年度水運概況（哈爾濱航業聯合局調）

碼頭別航客數

碼頭名	乘船	下船
金山鎭	一、四二八	二、六一九
古站	一、〇六三	一、七三六
瑪通河	三四	四一
庫馬爾	三	一四八
計	二、五二八	四、五四四

碼頭別貨物移出入數量　（單位瓩）

碼頭名	移入	移出
新街基	四七八	—
呼瑪河	八一六、一二七	八、五四五
古站	二九八、一九三	一、〇三三
瑪通河	一二〇、三五五	—
庫馬爾	二一、六九一	三九三
計	一、二五六、八四四	九、九七一

註　品種別移出入數量は總論參照

通信　金山鎭に郵局がある。爲替の振出又は拂渡金額は同一日同一人に對し一〇〇圓を限度としてゐる。黑河より呼瑪縣に至る郵便物の配達日數は船舶航行期間のみ三日、結解氷期は毎月四—五回配達、一回の所要日數は七日である。

電信は建國前には嫩漠線呼瑪支線（有線電信）が在り民國十六年使用不能となり、大同元年六月馬占山は呼瑪無電台を黑河に、漠河無電台を呼瑪に移轉し、康德二年四月改めて治安維持會の手で新設せられた。而し乍ら一般電報は取扱つてゐない。

電話は治安維持會の手に依つて呼瑪—金山鎭警備用電話線を架設、又縣城から三大公司にも通じ同公司を中心とする附近部落を連ねる電話線も康德三年中に完成の筈である。

（五）商工業

商業　產金地を背後地として發達した本縣の商業は、產金の減少と共に當然衰勢を萌し、又幾度か戰禍、水禍を蒙り、加之

對露貿易の禁止に遭ひ、今は全く往時の盛況を偲ぶ面影さへ失はれ、僅かな土民と採金勞働者とに物資を供給する程度である。大同二年三月の馬票回收は必然的に地方民の購買力を低下させ、同月七日の水害に依て縣民全體が致命的な痛手を受け、一般金融緩慢の爲め資金涸渇の現狀である。雜貨其他食料品一切は哈爾濱より黑河商人の手を經て移入(年約一一萬圓)されるので物價は極めて高い。滿洲事變當時は哈黑間の交通杜絶に因て物資は極度に缺乏した爲め金山鎭對岸ウシヤコウォより生活必需品を密輸入してゐた。又、遇々入港する內國汽船々員は無關稅、無運賃の物資を江岸で販賣する爲め呼瑪、金山鎭の商人は非常な打擊を受けるといふ。商戶は縣城に四戶、金山鎭に八戶あり、金山鎭の商狀は依然として縣城を凌いでゐるが、何れも市內に於て小賣業を主とする程度である。物資は夏期水運に依り、冬期は必要品に限り馬橇を以て運送し、北黑線の開通後は從前より物資供給は圓滑となつた。

工業　既述の三大公司農場經營の製麪粉を代表的なものとするの他見るべきものは無い。縣城の南方二粁に在る同公司に大北機器火磨製麪粉廠が民國十九年冬から開業、冬期間のみ操業し、原料は自家農場の生產物を使用する。工場設備の概要を示せば長一五サージエン幅四サージエンの工場に獨乙マグデブルヒ製動力機(三〇馬力ステイムエンジン)一台獨乙製製粉機六台、打麥機一台淸粮機一台、及風車を据付、生產品は三、四、五號麪粉の內三號品を主とする。生產高は大同元年八、一三一甫度、大同二年三、八八五甫度、康德元年(八月迄)一、六一六甫度で、之等製品(五號麪以下とも云ふ)は品質不良のため移出せず、現地の貧農の消費に充てる程度である。而して康德元年はトラクター用石油高價の爲收支償はず頗る振はなかつた。

呼瑪縣工業狀況　(康德元年度)

工廠名稱	種別	類別	實際出資額	職工	生產總額	主要生產品目
恒發爐	金屬工業	鐵匠爐	一五〇元	一	一、〇七〇元	〃
萬盛爐	〃	〃	五〇	二	一、〇八八	馬蹄申瓦

黑河省公署民政廳調

三盛爐	金屬工業	鐵匠爐	一五〇	一	一七六
三大麵粉廠	食料品工業	麵粉製造業	一〇〇、〇〇〇	一六	七、四八八
震守信木廠	雜工業	木舖	五〇	二	五七〇
福盛公	〃	皮舖	二〇〇	二	七六〇
朱家皮舖	〃	〃	一五〇	一	一四〇
孫家皮舖	〃	〃	一〇〇	一	一五七

(六) 邑鎭

呼瑪　縣城所在地。呼瑪爾河の流域に位し、黑河を距る二七六粁、對岸は蘇聯アレクセエフスキイ村である。康德元年末現在の戶口八六戶三八五人、其內日本內地人男九、女三、鮮女一、ロシア女一六を含む。縣公署は民國三年(一九一四)金山鎭より此地に移つた。當時市街は東西二里、南北二里餘、幅員三十間の大道四方に走り繁榮を示したが、今は僅かに中心地たりし縣公署のみ殘影を止めてゐる。

主要機關　縣公署、稅捐局、商務會、農務會、郵局代辦所、國境警察隊分駐所

商工業者　(資本金千圓以上)

營業種別	店名	國籍別	財東氏名	執事人氏名	資本金
雜貨	三盛號	滿洲國		王德新	二、六〇〇円
〃	東永茂	〃		宋方興	二、七〇〇
其他	二戶				

小賣物價（國幣圓）

（康德元年八月現在）

品種	單位	價格 本月	價格 前年同月	品種	單位	價格 本月	價格 前年同月	品種	單位	價格 本月	價格 前年同月
大米	一甫	四・〇〇		鯽魚	一斤	・一二		豆油	一甫	四・五〇	
高粱米	〃	二・八〇		豬肉	〃	・四五		醬油	一升	・六五	
小米	〃	一・三〇		牛肉	〃	・三五		醋	〃	・五〇	
包米	〃	・七〇		鷄蛋	一〇個	・四〇		燒酒	一瓶	・二六	
元豆（黃豆）	〃	一・二〇		其他食料品				香煙（哈德門）（雙鶴牌）	一盒（一〇枝入）	・〇七	
吉豆（綠豆）	〃	二・二〇		麵粉	一甫	三・四〇				・〇六	
小豆	〃	二・〇〇		調味及嗜好品				茶葉（毛峰）	一斤	三・四〇	
鯉魚	一斤	・二〇		糖	一斤	・一八					

金山鎮 蘇聯のウシヤコウォ村に對し、黑河上流第一の邑落で、呼瑪縣城を距る約二〇粁。對岸と同じく丸太を組合せる露式家屋が並んで特色ある外觀を示し、嘗つては人口一萬五千、多數の露人を擁し金鑛地出入の要路として黑河に次ぐ商況を示した。即ち前清時代早くもウシヤコウォとの密貿易頗る旺盛で民國元年設治局開設により市況更にまた活潑となり背後地金鑛の鑛夫を合すれば人口三萬餘と稱せられたものだつた。然るに近年の產金減少に加へて大同二年六月の火災は市邑の大部分を燒き、之に續く七月の水災と惡疫とは住民を窮乏に陷れた。人口今は僅かに四五〇。併し縣の經濟中心は依然として此地に在り、金鑛及林業勞働者への物資供給、オロチョンとの毛皮交易等に依て、縣城の商況に比ぶれば充分の活氣が見える。移入品約五萬圓、すべて船便によるが、小雜貨類の一部は對岸から密輸入されるといふ。官民合同の密輸團なるものが組織されたのは大同元年末之を呼瑪縣食糧維持會と名稱し、縣長の內諾を得て大規模な密輸が始められ、麥粉、鹽、石油、燐寸、火藥藥莢等續々來金したが翌二年五月匪賊の金山鎮占據により掠奪を受け終りを告げた。

公私機關は警務分局、郵政分局、中央銀行出張所、商會、滿洲國軍若干、國境警察隊分駐所、郵便局代辦所、當地に於ける資力千圓以上の商戶は雜貨商四戶のみ。其他小舖としては雜貨商三、洋鐵舖二、靴舖二、藥舖二、豆腐舖一、飯館子二、鐵廠二、木廠二等がある。

商工業者（資本金千圓以上）

營業種別	店名	國籍別	財東氏名	執事人氏名	資本金	開業年月	一ヶ年賣上高	聯號及支店其所在地
雜貨	東興永	滿洲國		劉冠五	一、〇〇〇			
〃	東順和	〃		于雲波	一、五〇〇			
〃	福興昌	〃		張聖言	一、五〇〇			
其他五戶								

湖通鎭（庫瑪爾） 呼瑪縣城の下流四八粁、黑河上流二三三粁戶數一一、人口三七（露人三を含む）の部落。耕地一一晌、薪材の年產一〇〇サージエン程度。民國三年頃は產金量も多かつたので戶數一五〇、商戶一八を算したが、同八、九年から產金量も減少し現在では湖通河の西南二〇里に亙り採金夫が七、八名居り辛うじて一日二五ザロトニークを採取してゐるに過ぎぬ。交通具四、輪車一、橇三、小舟三。

玉石袋夫 呼瑪下流六五粁。戶數四人口一一（ロシア女二）既耕地三晌、未耕地二〇〇晌。薪材は年一〇〇サージエン程度を寄港船舶に供給してゐる。狐、狸、狼、栗鼠等の毛皮を年三〇張內外產出する。

四、嫩江縣

（一）自然及住民

自然　嫩江縣は小興安嶺と嫩江本流とに挾まれた南北に長い地域で、小興安嶺西斜面に發源する嫩江各支流の流域を以て占められる概ね高原台地狀である。北は呼瑪、東は瑷琿、龍鎭、南は德都、訥河の各縣に接し、西は嫩江本流を以て興安東省と境してゐる。

河川の主なるものは科洛爾河、泥鰍河、那阿爾河、那斯哈爾河等で、科洛爾河流域平野に連なる小興安嶺支脈は甚だ低く他の諸支流域の山脈に比較して本地方の特長たる溪谷に遮ぎられることも少く、又樹木の無い諸峰が高原台に浮遊してゐる。

特に注目されるのは旺安山嶺の南西端に當り半圓を描く休火山脈が聳立してゐることである。此の休火山は四個の休火山と一箇の圓錐丘から成り、其の形狀極めて奇、而かも偉觀をもつて著名である。之に就ては滿鐵の露亞經濟調査叢書「黑龍江省」下卷に詳述してゐる。

而して嫩江流域は黑龍江流域に比して農業的でなく、南部墨爾根方面を除く地域は人煙甚だ稀薄なる森林地帶である。氣象に就ては統計の據るべきものを缺くが、大體に於て嫩江は訥河、齊齊哈爾とは格段の差があり、十二、一、二の三箇月は零下五〇度に降ること屢々で、夏は最高八五度に過ぎず淩ぎよいといふ。十月下旬から十一月上旬に結氷し四月上旬から中下旬にかけて解氷する。初霜は平年九月中旬、晩霜は五月上旬で、無霜期間は約一二〇日—一三〇日、小興安嶺以東の黑龍江流域に比し稍短い。初雪は平年十月上旬、積雪は一尺內外を普通とする。降水量に就て滿鐵、國道局らの共同調査では五〇〇粍圈內に含まれてゐるが、雨季七月には六〇〇粍を下るまいと想像される。風は三月中下旬より五月中下旬に至る間最も强く、倒伏せる樹木に依て判斷すれば二五—三〇米の風は珍らしくなからうと思はれる。冬から直ぐ夏になり最高氣溫の候は百花一時に咲誇つて高原は一大花園と化する。

昭和八年十一月滿鐵調査班は嫩江縣城を發し嫩江本流に沿ふて北上し、また嫩江縣城から東北に進路をとり泥鰍河を經て黑河に向つたのであるが、その沿道について、次の如く報告してゐる。

「縣城の北二站に至る間は比較的平坦地にして腐埴質壤土地帶よりなる。已に大豆は落葉の末期で秋收作物の收獲期に當つてゐる。二站附近までは比較的集團部落多く從て農耕地も多いが、三站五站と北行するに伴れて一—二戶の獨立家屋を見るのみ、極めて人煙稀薄の地帶となる。土壤も北進するにつれて粘質、砂質、礫質の壤土、砂礫土等の土質よりなる山岳森林地帶となる。埴土地帶もあるが表土が薄い（五〇—六〇糎）斯くて農業的には何等見るべきものなく、僅に二晌地內外の圃場に於ける玉蜀黍、馬鈴薯、其他の野菜類の栽培に限られて居り、自給自足さへも困難だと思はれるやうな原始農業をやつてゐる。從て家畜を農耕に使役するといふ如きは三站より十站迄の間に於て見出されず、物資も殆ど林產資源（一町步三〇〇—五〇〇石）である。」

「嫩江を去る北約一五〇滿里內外の地は緩漫なる波狀地を形成し、農耕地多く、部落も集團をなしてゐる。供し之から以北及北東の地は之に反して丘陵地となり山岳地となる。林相は嫩江本流域に比して密度大ならず、一町步二〇〇石內外を普通とする。所に依て三〇〇石內外の箇所もあるが其區域は廣くない。更に進んで大岔子以北、小興安嶺を越えて黑河に近き山神府に達する迄は金厥地帶で、地力は劣つてゐる。」

要之、縣城を中心として東南一帶の地は埴土地帶で、有機質及植物營養分に富み、所謂農耕地帶に屬してゐるが、その底土は砂土であつて南方なる訥河に比し地力が劣つてゐる。埴土はまた北方にもあるが表土が薄い。縣の西部なる嫩江本流の一帶及び東北部なる山岳地帶は共に礫質壤土又は壤質砂土であつて、概して農耕に不適である。斯くて比較的肥沃なる南部地方に於てのみ農業が行はれつゝあるが、まだこの地帶と雖も農墾發達の境には達してゐない。

住民　本縣人口の九割は漢人を以て占め奉天、吉林、河北、雲南方面から移住したものが多い。總面積に對する人口比率は

次の如し。

縣面積及戸口

（康德二年十二月末現在　民政部地方司調）

面積（平方粁）	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	一平方粁當人口密度
一九、五六六	三、七七六	一二、七四二	八、六〇二	二一、三四二	一・〇九

之を民族別にすれば滿漢人二一、二一九（男一二、六七七女八、五四二）、日本人は內地人七一（男三六女三五）、朝鮮人六（男四女二）其他四六（男二四女二二）である。

漢人の移住は康熙二十五年（一六八六年）に始まり、清朝は封禁制を解いて移民を奬勵し露國勢力の侵入に備へたが、支那本土から流謫の犯罪人も多かつた。

滿洲人は漢人に全く同化したので區別し難い。地方民が老達子と稱ぶダウール、オロチョン、索倫人等各種族は明朝の永曆六年（一六五二年）黑龍江岸から移住し、アルバジン城爭奪戰の頃清朝に歸順し族族に編入せられた後、漢人に追はれて小興安嶺を越えたものが相當多い。墨爾根副都統管區の光緒二十八年（一九〇二年）彼等の人口はダウール人二、一四二、索倫人四一二（オロチョン人不詳）とあるが、康德元年八月の土着原始民族調査ではダウール人一、八二三、オロチョン人一一九、回族一三四となつてゐる。ダウール、索倫の兩族は半農、半獵であるがオロチョン人は狩獵のみに從事し山林に棲んでゐる。回族は住家の入口に槍に似た文字を書いた紙を貼り或は「西域回回」の看板を掲げてゐる。

外國人は康德元年末では日本內地人男一一、女三、朝鮮人男女各二、計一八、外國人男一七、女八であつたが、其後日本人は墨爾根線の敷設工事に伴ひ急激に增加してゐる。

住民は文化に惠まれず、草葺の家に住み、貧農が大部分を占め粟、包米を常食としてゐる。土民は五世同居と云つて家族は一の屋敷內に同居する風習がある。

（二）政治及治安、文化

政治　縣城嫩江は一六八五年建設せられ當時墨爾根と稱した。之より一箇年前露國はアルバジン（雅克薩）に城塞を築き住民地を創設し頻りに清國を脅威し始め、玆にアルバジンを中心とし二箇年に亙る露清の戰鬪が開始された。此の頃から清朝の北邊防備は嚴重となり、先づ瓊琿に將軍を置き次で一六九三年此の墨爾根に移し、後將軍の齊齊哈爾に轉ずるや此地に副都統が置かれた。之より曩墨爾根城都市建設と共に軍路郵便路が黑龍江岸に向て建設せられ、又先住民族たるダウール、オロチョン其他の異種族を歸服して族制を布く等諸政大いに進み、墨爾根は露の來侵に對する軍政の中心地となつた。

副都統は設置後二一二年即ち一九〇八年に廢止せられ、新たに漢人の知府（府長）を任命、同時に副都統管區は嫩江府と改稱したが、一九一三年滿洲に於ける一般行政區劃改正に際し嫩江縣に改め黑龍江省の管下に置かれ、更に康德元年省制改劃に當り龍江省に編入せられた。又、康熙年間墨爾根築城と同時に嫩江上流及小興安嶺に卡倫四箇所を設置し墨爾根城四門に防備兵を備へた。之が嫩江縣警察制度の濫腸である。舊墨爾根城は地變のため今は嫩江の河底に沈んでゐるといはれ、現在の縣城は道光二十五年（一八四五年）築造されたものである。

縣財政は縣民の納稅負擔能力微弱のため極度に窮乏し、豫算の五—六割は國庫補助を仰いでゐる。縣當局は縣民の大部分を占める納稅能力無き貧農の生計向上策に惱んでゐるが、大農中には未だ貧農に伍して納稅を免れんとする傾向がある。民政部地方司調査の嫩江縣財政左の如し。

康德三年度歲入出豫算

歲入	總計	經常部								臨時部
		財産收入	使用料及手數料	交付金	雜收入	縣稅	其他	計	前年度繰越金	國庫補助金	計
	七〇、二六七	一、三八〇	三五	五四七	一〇〇	二五、三四三	—	二七、五九五	—	四二、六九三	四二、六九三

歲出	總計	經常部								臨時部	
		祭祀費	公署費	警察費	土木費	教育費	社會事業費	衛生及病院費	其他	計	土木費	計
	七〇、二六七	二〇〇	二七、八八九	三〇、三二七	—	二、二〇二	—	八〇	六〇〇	七〇、二六七	—	—

（單位圓）

治安 滿洲國成立當時本縣には匪賊横行し、大同元年四月馬占山が齊齊哈爾を脱出し反滿抗日の旗を擧げるや、匪賊は相呼應して地方有力者を集め保衛團を「抗日補充團」に改編し、更に黑河僞政府樹立後本縣に蟠踞する東洋、南延芳、中洋らの匪首は大小匪團を叫合して「滅日救國救民義勇軍」を組織し跋扈甚しく、同年十二月日本軍の討伐迄は無秩序の狀態であつた。大同二年一月縣長新任し、各區警察署の强化を始め自衛團警備隊を改編、日本軍と共に治安維持工作を實施した結果、當時四〇〇を算した匪數も康德元年末には數十名に減少し現在は頗る平穩である。

治安維持機關は軍警の他、自警團、治安維持會内の宣撫小委員會があり、又保甲制度の實施に當り、先づ不良保衛團の淘汰整理を行ひ、自衛團、商團、保衛團の徹底的革正を終つて康德元年保甲制度を實施し五保三六甲三一四牌とし、保甲自衛團は五團二六四名（康德二年七月末日現在）となつてゐる。

教育 滿洲事變に際し縣内各小學校は一時閉鎖したが大同二年三月縣城内に二校開設、治安恢復に伴ひ漸次各部落に於ても開校し小學校數八、兒童四〇〇、康德元年には官私立を合して十二校七六九に增加し、民國二十年の一八校七〇〇に比し學校數は減少してゐる。此他各屯には私塾一〇兒童一八三あり何れも寺小屋式のものであるが文教部選定教科書を使用してゐる。

尙本縣には中等學校は無い。他に講演所は教育館經營のもの一、日語講習所一がある。

教育機關（康德元年）

官公立小學校概況

學校名	所在地	教員數	兒童數
縣立第一初高兩級學校	縣城	九	二四八
同第一女子初高兩級小學校	同	六	二〇六
同第一初級小學校	石頭溝	一	三〇
同第二初級小學校	二十里河	一	三〇
同第三〃	南陳屯	一	二九
同第四〃	庫漢屯	一	二二
同第五〃	塔溪	一	三五
同第六〃	沐納河	一	三一
同第七〃	柏根里	一	三〇
同第八〃	揚樹屯	一	三一
同中央民衆學校	縣城	一	五〇
天主教〃	同	一	二七
合計		一二校	七六九

私塾概況

私塾名	所在地	塾師	兒童數
育英私塾	南門外	一	二三
北玉〃	北門外	一	三〇
新發〃	新發屯	一	一〇
新立〃	二十里屯	一	九
依拉哈〃	依拉哈屯	一	一三
天主堂〃	古城西屯	一	三八
雙泉〃	雙泉屯	一	一九
廣興〃	關家屯	一	一四
合〃	四合村	一	九
滿〃	塔溪	一	一八
合計		一〇校	一八三

宗教 住民の大多數は佛教徒で寺院二を有すと云はれるが次表には現はれてゐない。縣城の關岳廟には孔子を合祀し、祀關岳、祀孔祭は古來の儘の盛儀を催し、五月五日、八月十五日及正月を三大節として正心堂公所が龍燈會を組織して町中を踊り廻て賑ふ。七月十五日盂蘭盆には嫩江に於て燈籠流しが行はれてゐる。

寺廟及宗教

（康德二年十月末現在　龍江省公署教育廳調）

名稱	所屬宗教	成立年月	布教者	信教者	摘錄
天主堂	基督教	大同二年	一	七八	
基督教會	同	民國八年	一	六五	附設小學校一處
正心堂公所	理教	同十七年	一	六八	
理善勸戒烟酒分會	同	同十四年	一	八〇	
關岳廟	道教	康熙年間	一		
清眞寺	回教				

社會　建國當時匪賊の跋扈甚しきため縣民は極度に生活を虐げられ加ふるに水災に見舞はれ縣民は疾弊し切てゐたので大同元年八月民食救濟金江洋五千元を交附せられた。

義倉は康德二年八月義倉管理規則が公布せられた際一箇所設置、最少貯蓄數量一、八〇〇石である。

社會事業團體としては民營事業に嫩江理善勸戒煙酒分會があり、民國十四年八月設立會員八〇名である。

衛生　大同二年八月縣城內に始めて共同便所五箇所が設置せられ、施療機關としては康德元年一月民政部より日本人公醫一名が派遣せられ一般施療に當る他滿人醫師五名がゐる。現在警務局、民衆學校を中心に衛生思想の普及に努めてゐるが、飲料水は多量の鹽分を含み科洛河沿岸の部落民は井戸を掘らず河水を使用する爲め夏季は赤痢が流行する。又夏季には嫩江名物の瞎虻と云て虻にやられて斃死する馬が多く、六月二十日—八月二十日頃の日中旅行は困難となる。龍江省內でも本縣は傳染病患者多く何れも衛生狀態の低さを物語てゐる。

（三）資　源

農產　可耕地は次表の縣面積並土地利用狀況表の如く總面積に對して六五・五％を占め乍ら既耕地僅に一・五％に過ぎぬ。之は住民稀少の關係と氣候が農作に甚だ不利であることに起因する。既耕地の土壤は地方の岩石が分解して成つた肥沃な黑土で、この黑土が作物に適することは、年々自然的に繁生する植物をもつて立證される。しかし降雪無き嚴冬の年は秋蒔の穀類に大障害を與へ作付不能となり、晝夜寒暖の差著しく且つ晩春初秋の夜間のみの寒氣は春蒔の穀類發育を阻害し、また穀物の水を要しない時期（六月下旬ころ）より初まる降雨に依て折角成熟の穀物を腐敗せしめ、その收穫を妨げること大である。本地方の中農以上の農家を除き殆ど輪作關係を考慮せず、極めて不規則な方法であり、輪作を行ふものは大豆、小麥、粟の順序で、所に依り小麥を速作するところ少くない。

一六五二年以來、ダウール人、ソロン人が極めて幼稚な方法によつて農業をはじめ一七三四年より官屯の農民（漢軍より轉じたもの）が農事に從つたが、開墾事業の初期と認められるのは實際は一九一四—一五年といはれ、當時の播種面積を見るに粟を第一位とし小麥、大麥、燕麥の順序で、收穫高は粟七七、〇四〇石（一晌當收穫量一・二〇石）、小麥三七、四〇〇石（一晌當一・二五石）を示した。しかし、近年大豆の耕作勃興し、康德元年度の收穫量は穀類中の首位を占めるに至つた。稻、高粱は氣候寒冷のため不適である。

農民は滿洲事變の治安維持されるや歸農したものも多いが、それも土地に愛着を持つ自作農が大部分を占め、康德元年九月縣報告によれば次表の如く農戶三、二八二のうち自作農九〇％强といふ狀況である。

農家の種別戸數次の如し。

地主	自作	小作	自作兼小作	計
三〇	二、九五四	二三一	六七	三、二八二

この他に農業勞働者と云ふべきもの約五千人に及び彼らは勞賃一人十箇月（農耕期）一〇〇圓程度で雇れてゐる。

小作條件は年々契約とし穀物の種類を問はず十分の二は地主に納入し冬期之を行ふを例としてゐる。小作料は固定租（死租）及不固定租（活租）の他農業勞働者との契約に分れ（滿鐵調査班北部黑龍江省經濟事情參照）地租及地方稅は地主の負擔とし他の雜稅は小作人の負擔とする慣習で、無一物の貧農は一切の生活必需品を地主より支給され收穫物を以て返納する方法を採つてゐる。而し近年は天災、匪害相次ぎ小作人の地料未拂多く、地主も默過のほかなき有樣である。從來本地方の土地は旗人の領有するところだつたので所謂「旗領民佃」が實行され、漢人は旗人の土地を小作するに過ぎなかつた。

民國十七年開設の墾務公司はトラクター等の新農具を使用して大農經營を行ひ農工六〇名を使役し一、〇〇〇晌餘を開墾したといはれるが現在見るべきものは無い。清朝時代農業移民を奬勵したが、外國人では事變前約二五〇名の白系露人が來往し馬占山敗走當時一時齊々哈爾に避難し康德元年五月歸農、滿人地主と小作契約を結び約六〇〇晌の荒地開墾に從事してゐる。農務會は在るが殆んど何もやつてゐないやうである。

縣面積並土地利用狀況

總面積	可耕地			不可耕地	總面積ニ對スル比率	可耕地ニ對スル比率
	既耕地	未耕地	計			
一九、五六六平方粁	二九三平方粁	三、五五九平方粁	三、八五三平方粁	六、七四四平方粁		
			可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
			六五・五%	三四・五%	一・五%	六四・〇%	二・三%	九七・七%

普通作物（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	四、八四〇畝	四、四九〇瓩
其他豆類	六〇	四〇
高粱		
粟		
玉蜀黍	三、一三〇	二、六五〇
小麥	一、〇九〇	一、三八〇
水稻	九一〇	六五〇
陸稻		
其他雜穀	五、〇九〇	四、四五〇
計	一五、一二〇	一三、六六〇

特用作物（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
棉花		
阿片		
煙草	五〇	二〇
線麻	一八	一〇
靑麻	一七	九
苧麻		
芝麻		
落花生	一一	六

瓜子	―	―
蔬菜	―	―
馬鈴薯	―	―
甘薯	―	―
果樹類	―	―
藍靛	―	―
蘇子	二九	一四
其ノ他	―	―
計	**一二五**	**五九**

地價　（大同二年現在）

區間	既耕地	未耕地	備考
上地	三〇圓	一五圓	畑地單位一晌當リ
中地	二五	一〇	
下地	一五	五	

春耕資金　（康德二年四月末現在調）

年度	貸付額			貸付戸數	回收額	貸付殘額
	本年度新貸付額	前年度貸付殘額	計			
大同二年	七五、二〇四圓	―圓	七五、二〇四圓	二三九戸	一、七三六圓	七三、四六八圓
康德元年	二〇、七一八	七三、四六八	九四、一八六	―	四、一〇〇	九〇、〇八六

畜産　本縣畜産業は將來發展の好條件に惠まれてゐる。それは高原台地狀の廣漠たる原野は一面牧草に覆はれ、幾百萬の家畜牧の養可能性ありと觀られ、冬季降雪が少いので四季を通じて放牧に適し、家畜牧養の經費と勞力とが省れ、省實業廳の炭疽病豫防注射により流行病を見ず（大同二年炭疽病猖獗牛九、一〇〇、馬一一、七〇〇罹病、各一〇％死亡）畜産發展の可能性が認められる。地方運輸機關として重要な馬が最も多く、牛馬は共に近年益々增加の傾向を示しつゝあり、養豚業も漢人移住以來發達し、豚肉は黑河、嫩江、齊齊哈爾並嫩江―黑河街道の諸村落に移出されてゐる。副業として豚、鷄は農家といはず商家でも各戸毎に多數飼育してゐる。

家畜數　（康德二年九月一日現在 實業部調査）

種別	數量
牛	八六五頭
馬	二、三八二
騾	四二
驢	八八
羊	五
豚	二、七六五
計	**六、一四七**
鷄	二、九九九

林産　本縣に於ける最も有望視される企業は林業で、本縣面積の三〇％弱の森林面積を有してゐる。林相及植生狀態は六站以北を森林地帶とし、森林植物帶より見ると寒帶圏に屬し、小興安嶺を以て滿洲植物區系と黑龍江右岸流域のダウール植物區系（アムール植物區系の影響あり）との限界をなして居り、此の地方が滿洲植物區系の北端をなすものと謂へやう。嫩江流域は門臚河と泥鰍河流域との分水嶺並附近小興安嶺の主脉にのみ帶狀のモンゴリナラ（柞樹）を主としてシラカンバ

（白樺）、コヲノヲレ（黑樺）を混ずる濶葉樹林がある。六站以南は概ねモンゴリナラを主とする散生地なるも、六站以北森林地帶では叭都河右岸の九站附近から以北にダフリカカラマツ（義松、黃花松、意氣松）を混じ、河谷に近い林椽附近から東北方小興安嶺の稜線に亙つて針過混淆林となり、他はモンゴリナラを主とする濶葉樹林である。（滿鐵調査班『北部黑龍江省の森林』參照）

本縣森林は何れも國有林で嫩江林務署の管内に屬してゐるが、從來は鐵嫩森林公司他二三の林業者が伐採權を所有し、住民も爲政及ばざるを奇貨として自由伐採を行つてゐた。康德二年九月林場權整理法が公布せられ同公司は消滅と審定、實質上存在しない事となつてゐる。

木材集散地は齊齊哈爾で嫩江縣城は通過地に過ぎない。康德元年の苦力入山數九〇〇、流筏八、〇〇〇本であつたが、平年流筏數九—一二萬本（甘河ものを含まず）此の内三〇％は薪材とされ、出材は滿洲事變後減少したるも、嫩江林務署の發表では康德元年度三萬石、同二年度三萬石である。伐木は流筏に依る積出を主とし、編筏は木材の大小に依て異るが一〇〇内外を一排としてゐる。嫩江本流のほか河身の屈曲分岐多く隨所に迷園を形成する支流では流筏に適しないこと勿論である。流筏は解氷直後より行はれ六、七月の增水期を利用するものが多く、流送日數は嫩江より齊齊哈爾迄四〇〇粁を七日乃至十日である。

昭和八年（大同二年）十一月滿鐵調査では一箇年の出材數量は嫩江流域三、三〇〇組、甘河流域五〇〇組計三、八〇〇組で、山元に於る一本の仕込賃一一元内外、これに木稅等を加ふれば墨爾根（嫩江）相場一本一・二〇—二圓、齊齊哈爾に流筏して一本三元内外であつた。

森林副產物は康德元年度縣報告に依ると木炭一、〇〇〇布度、木耳一萬斤、黃芪（藥用植物）二萬斤等。狩獵は麋子皮五、〇〇〇枚、狐狸皮四〇〇枚、獾皮二〇〇枚、灰鼠皮一〇〇枚、鹿茸一〇架で、此の外に棲息するものは川獺、猿、野猪、黑貂、剛鹿、狼、熊等があり、麋子は食用に供し美味であると。毛皮の取引は嫩江が中心地となつてゐるが、往年の殷盛は布西に奪はれた形である。

森林狀態

森林面積	立木蓄積量（立方米）（康德元年現在實業部調）			
	針葉樹	濶葉樹	計	
五、七九二平方粁	一七、三七六、〇〇〇	七二、四〇〇、〇〇〇	八九、七七六、〇〇〇	

鑛產　砂金が主なる鑛產である。然しながら本縣の代表的產金地たる興安金廠の如きは經濟的には黑河に依存してゐるため瑷琿縣の產金として謬られる向がある。興安金廠は嫩江支流泥鰍河及門臚河上流並に呼瑪縣内に及ぶ廣大な產金地帶を占め鑛區總面積四—五〇〇平方粁、其埋藏量は無限と稱せらる。宣統三年春漢人が發見し同年七月開掘、當初商辦合資組織に依り總局を餘慶溝に置き餘慶溝金廠と稱し古龍幹河上溝、同支溝及古瑪拉江の四箇處に分局を設置した。產金盛なりし當時は餘慶溝、汗達氣、其他の鑛區を含して苦力二萬人、產金量一箇年一〇〇布度（約三八萬四千ゾロトニーク）に達したと云ふ。民國十二年興安金廠公司に改組、更に新發見の鑛區（嫩江支流々域の查爾格力、閣拉溝、泥鰍河溝、河拉汽等の百望鑛區）を合し、江省金廠に一新地區を拓いた。新金鑛は含金層一、二尺—三、四尺にして含金量七〇—九五％であつたが民國末期に至り金苗乏しくなり、又匪賊の掠奪に因り不振となつた。事變前は鑛丁三、〇〇〇と謂はれたが康德元年には三一〇に減じ同二年の延人員二五、八三五、建國後は採金會社の鑛區と成り漸次經營も改善せられ、產金量も苦力も增加し隆盛に向ひつゝある。同金廠の經理人は孫絹武、鑛廠主管人は朱洪遠である。

砂金採取法は康德三年十月十五日より滿洲採金會社が汗達氣西南約十粁の泥鰍河々畔鑛區に採金船（總論に詳述）を使用せることは特筆すべきである。其他は舊式な方法に依り、大同二年度の產金額は三一、六七一ゾロトニーク、價格一七六、六七八元とあり、康德二年（一月—十二月）は六七、〇七二ゾロトニーク（鑛業公會調）に及び之を月別に見ると、九月の一三八、二六〇ゾロトニークを最高とし七月より十二月に至る期間の產金量が多い。

石炭　柏根里の炭層は埋藏量六〇〇萬噸と推定せられ、炭脈數十滿里と云はれるが交通不便匪賊出沒の不安のため未だ發掘に到らぬ。炭質は稍良質である。

銅鑛　柏根里の東北四〇滿里の泥曲河には古くより銅鑛脈ありと稱せられ十七、八年前に露人技師此地を踏査し試掘分析の結果良質の銅脈であると折紙をつけた。

此の他、科洛爾山らの休火山地帶の硫黃、縣北部の鐵、縣城附近の螢石等がある。

鑛區狀況　（康德元年現在）

種別	產地名	位置	品位又ハ品質	經營者其他記事
砂金	興安金廠			
〃	門臚河支流々域	嫩江ノ北方		
〃	墨爾根			
〃	東布特哈聯界			
〃	發爾必河			
〃	五呼拉泌溝			
〃	西站大溝			
〃	馬廠河溝			黑河、源利金廠ノ經營
〃	邁海支溝			黑河、逢源金廠ノ經營
〃	奇里石合溝			〃
〃	大孤山溝寬河			〃
鐵	縣ノ北方			〃
銅	石頭溝子			〃
石炭	柏根里	墨爾根ノ北東約三五粁		
〃	小石子	〃ノ南西西約一〇粁		
硫黃	科洛站	科洛南火山		
螢石	墨爾根	墨爾根西方一三粁開河部落東〇・五粁	良質ナリト云フ二疊石炭化ノ硬質粘土	
珪岩	盔淺南山	十二里灣子ノ南二粁		
耐火粘土	十二里灣子	興安金廠ノ北方一・五粁		
石灰岩				

興安金廠の縣別所屬鑛區名

嫩江縣內

博拉格里、第一支溝、小河力、阿拉氣、九道溝、（查爾格拉溝とも稱す）、霍龍門、汗達氣、葡萄溝

呼瑪縣內

寬河、罕達河、拉格滿河、五道溝、古龍幹河（大溝）、同（枝溝）、老溝、上溝、三道溝、湖通河

水產　縣內の嫩江に於ける一年間の魚獲數量は約三千布度にして、悉く縣城並附近鄕村にて消費せらる。主として農民が秋の收穫後網を以て漁撈に從事し、水深ある河では冬も漁獲がある。縣城に集まる康德元年度一年間の數量並價額を表示せば次の如くである。

（價格單位一斤）

種類	數量	一斤價格	備考
	布度	円	
狗魚	四〇〇	・〇六	
細鱗魚	八〇	・一〇	
胖頭魚	一〇〇	・一〇	
鰲花魚	二〇〇	・一二	
鯽魚	五〇〇	・〇七	一名ヨロシと云ふ、夏季のみにして冬季凍結時は市場に出ること稀なり
鯉魚	二〇〇	・〇八	

嘎魚	八〇	〇・三	〇・三
鯉條魚	二〇〇	〇・五	〇・七
草根魚	三〇〇	〇・八	〇・五
鯰魚	五〇〇	〇・五	〇・三
黑魚	二〇〇		
白魚	二〇〇		

（四）交　通

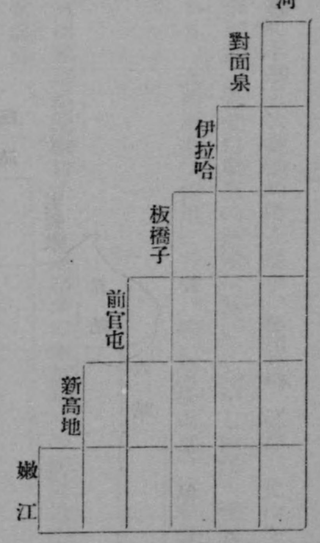
道路　本縣内の交通は十七世紀末葉、露國の東漸に刺戟されて清朝の對露防衛の目的から發達した。その内、齊齊哈爾より嫩江（墨爾根）を經て瑷琿、黑河に至る軍路郵便路（康熙二十五年建設）及漠河に至る官道がその主たるもので、經濟上、黑龍江沿岸地方並に對露貿易等に稗益するところ大であつたが、嫩漠官道は荒廢甚しく今では樵夫の通路に利用されるに過ぎぬ。

黑龍江水運の杜絶する頃は嫩江を中繼地とし又その水運に比較して冬季橇行の所要日數が短少なるため、嫩江—黑河道路の利用が多い現在でも國道は國防上重要性を持つので一般荷馬車の通行を禁止せられてゐるし、且つ嫩江及其各支流の水運未開發の現狀であるから現存の舊道は大いに役立てゐる。而し乍ら舊道路は何れも粗惡で夏季は降雨の爲め泥濘と化し交通は杜絶する。以下各道路別に就いて述べる。

1　嫩江—訥河國道　幅員〇米延長〇〇粁（國道局測定）

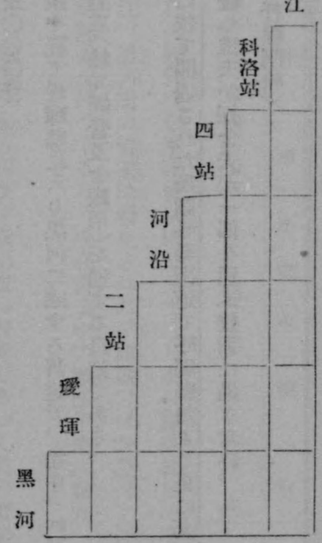
鐵路總局自動車營業粁程は〇〇粁となつてゐる。齊齊哈爾—黑河の郵便路たりし舊道の一部で大同二年六月末國道局は之が改裝工事に着手し大同二年十月竣工した。訥河より老萊河に沿ひ對面泉を過ぎて本縣に入り、伊拉哈、板橋子、前官屯の各部落を經て嫩江に達する。伊拉哈は標高三二五米の高地、伊拉哈以北は高原地帶であるが丘陵緩漫、平地に等しい。

沿線主要部落區間粁程（國道局測定）（粁程削除）



2　嫩江—黑河國道　延長〇〇〇粁（國道局測定）

鐵路總局自動車營業粁程によれば〇〇〇粁。大同二年九月起工、康德二年九月三十日竣工。古き郵便路に沿て建設されたもので、訥河—嫩江間國道の延長である。各區間距離（自動車營業粁程に據る）（粁程削除）



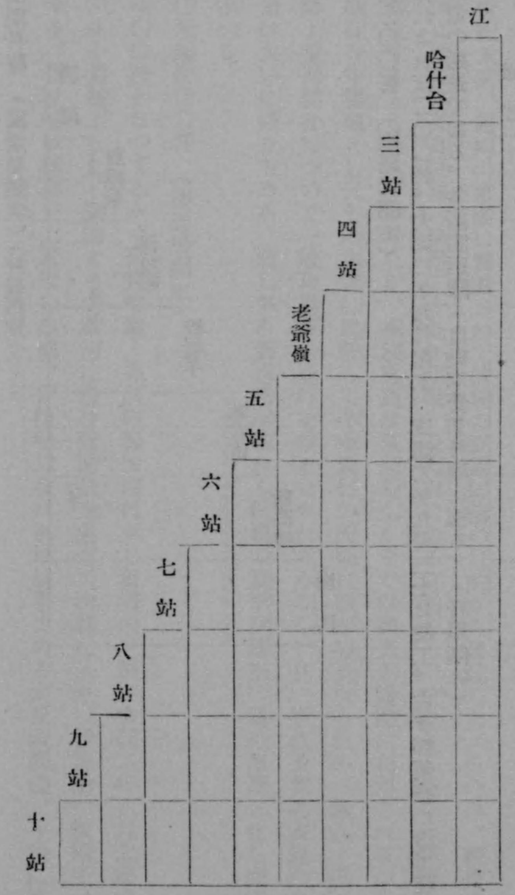
3　嫩江—黑河(西廻り線)國道　延長〇〇〇粁

柏根里—哈爾屯—汗達氣—興安金廠を經て瑷琿縣に入り黑河に達する舊道で、途中、門臚河附近の濕地帶を横斷して居り汗達氣—黑河間は四季を通じて自動車(總局經營及金廠用)を通ずる良道である。

4　嫩江—呼瑪道路　延長〇〇〇粁

此の道路は一九一四年鄂倫春族兵に依て開通された所謂呼瑪街道で呼瑪縣内より更に漠河に通ずる。嫩江本流に沿ふて北進、小興安嶺を越える。現在は荒廢し樵夫か採金夫が一部を通ふ棧道に過ぎない。

縣内主要部落區間距離　(粁程削除)



5　嫩江—海倫道路　延長三〇五粁

嫩江縣城より雙泉屯、湖山鎭(跡)を經て名勝五大蓮池の畔を過ぎ、雙龍泉、德都、克山を經由、海倫に至る舊道で、荷馬車の通行は四季可能、トラックは冬季可能、營業自動車の運輸は無い。しかし嫩江—雙龍泉—德都一四八粁は濕性草原多く、冬季を除き常に泥濘を存する年あり、支那馬車は使用に不堪、特に索倫馬車、達呼爾馬車又は蒙古馬車など輕快なものを使用してゐる。

6　三站—泥鰍口子道路

右は嫩江—漠河道路三站と嫩江—黑河西廻道路泥鰍口子とを連絡する本縣唯一の横斷道路である。

7　嫩江—巴彦旗柳屯道路　延長　二五滿里

馬車通行は四季を通じて可能、自動車の通行は不能である。

車馬　縣内交通の主要機關は車馬である。墨爾根—黑河道路では冬期旅客輸送に、齊齊哈爾より黑河へ雜貨、酒精を輸送してゐたが時に嫩江縣北部から黑河へ穀物を積出してゐる。縣内車馬數(康德二年二月現在)次の如し。

種別	荷馬車	牛車	木頭車	轎車	計
車數	(削除)	(同上)	(同上)	(同上)	(同上)

自動車　訥河—嫩江—黑河間〇〇〇粁の國營自動車路線は康德元年三月から鐵路總局の手で營業を開始したが、北黑線開通に伴ひ康德二年十一月二十二日より嫩江、黑河間の營業は廢止された。同線のほか黑河—汗達氣(興安金廠總局經由)間一五七粁に三日毎に一往復鐵道總局が自動車營業を行つてゐる。現在營業中の嫩江—訥河線九一粁の各站間距離及運賃は總論交通の項を參照。

民間業者は永遠汽車公司、興業汽車公司、裕逢汽車公司及び義信成の四者であつて其の標準運賃は大體、黑河迄二〇圓、訥

河迄四圓、拉哈迄六圓で總局自動車運賃に比し稍々高い。

鐵道 訥河線を嫩江縣城迄延長すべく目下建設工事を急いでゐる。即ち假に墨爾根線（〇〇粁）と稱し康德三年四月十八日工事に着手したもので建設完成豫定は康德〇年〇〇月である。本鐵道完成の曉は齊齊哈爾迄〇〇〇粁（齊北線齊齊哈爾—寧年〇〇・〇粁、訥河線八六・八粁及墨爾根線）となり、墨爾根線の大部分は嫩江縣內に含まれ鐵道の實現に依て嫩江縣狀は一變するであらう。

嫩江右岸より甘河炭坑に至るドコビール鐵道（約六〇粁）とは嘗ての運炭用輕便鐵道で、其の石炭は嫩江埠頭を經由し齊齊哈爾及び富拉爾基方面に輸送されてゐたが滿洲事變後は線路の跡形も失はれた。

水運 嫩江本流は船舶運航上、之を三區分し、上流區は嫩江縣城附近まで、中流區は齊齊哈爾まで、下流區はその河口までとしてゐる。本縣で船舶運航を許されるのは此の中流區の一部で縣城より哈爾濱に通じ、他の嫩江上流區及各支流は流筏に利用されるに過ぎない。之は嫩江上流區の如く水深があつても河底に岩礁多く流速急なるためで、各支流何れも屈曲多く急湍で船舶に利用されない。河口より嫩江縣城までは平底船（吃水六呎、積載八萬斤）が自由に航行し、航業聯合會では試驗的に康德二年度二百噸級汽船一隻を配船したが貨客無く採算不能のため中止した。しかし三百噸の汽船航行は可能と認められた。戎克航運は盛んで康德元年度の嫩江積出數量八、三〇〇瓩を示し、各船主は貨物積載量の增大を圖り曳船用の來多新造に力を注いでゐるといふ。航行所要日數は順風の時は齊齊哈爾から六日、下航三日、逆風の時は嫩江—齊々哈爾間八日同遡航二〇日で、七、八、九月は上流からの流筏は沿岸を埋める。

開江期は五月下旬—十月上旬を普通とし、夏季增水は松花江の他の支流より約十日早く例年六月二十日から八月迄である。滿洲國政府は嫩江の連年の水災を防止すべく百年の大計として訥河北方の安彥淺及嫩江縣庫漠屯に四七億立方米內外の大貯水池を建設する計畫が進められてゐる。

通信 通信施設は嫩江縣城の他に無い。縣城には郵局、電話局及び電報局が新設せられて居り、郵局は哈爾濱郵政管理局の管轄で電信電話は滿洲電信電話會社に屬する。嫩江郵局は大同二年一月開設せられ漸次業務多忙を加へつゝあり、電話は康德二年九月現在に於て市內に電話加入者一名も無く市外電話のみを取扱てゐる。

空路 總論交通の項に述べたる如く、齊齊哈爾—嫩江—黑河線を滿洲航空會社に於て經營し一週二回運行してゐる。

（五）商工業、金融

商業 本縣の商業中心地は嫩江縣城で他に見るべきものが無い。黑龍江將軍、副都統時代の墨爾根は江省中屈指の都邑として繁榮を極めたが、其後凋落して現在では僅かに嫩江上流に於る小鑛業及附近一帶の農村經濟の中心地たるに過ぎず、瓊琿街道に沿ふ諸部落を背後地とするも交通不便に妨げられてゐる。而し乍ら農村の恢復に依り農民の購買力漸次增加を來しつゝあり墨爾根線開通の曉は商況に活氣を呈するであらう。

移出品は林產を主なるものとし砂金、穀物、木耳及山林地方の特產物たる藥用植物特に黃蓍があり事變前年產一萬布度に達した事があるといふ。砂金は交通上の關係から黑河に移出せられ同地收買所の手を經てゐる。穀物の移出高を地方別に見ると比率は齊齊哈爾七〇黑河三〇、柔毛皮獸角藥草木耳等は事變前には遠く營口迄移出してゐたが現在營口向は絕無と云つてよい。嘗ては三姓と相並んで北滿に於ける毛皮の二大集散地と稱せられた嫩江の地位も民國十四年頃より對岸の布西に奪はれた。

移入に於ては從來上海、天津方面から日用雜貨を移入したが事變後は哈爾濱、齊齊哈爾、奉天から日本品を移入し、嫩江縣城を中繼地として奧地に販賣する他、豆油、燒酒を齊齊方面から輸入してゐる。尙ダウール、オロチョン等の原始民族は未だ狩獵による獲物で物々交換を行つてゐる。大同二年度調の嫩江縣城毛皮の取引高次の如し。

種別	狐皮	栗鼠皮	狼皮	川獺皮	鹿皮	狗皮	獾皮	黃皮	其他皮
數量	三〇〇張	〇、〇七〇〇張	四〇〇張	三〇張	三〇〇張	五、〇〇〇張	三〇〇張	三、〇〇〇張	三〇、〇〇〇張
一張當り單價	四〇—五〇元	一	四五—五〇	一〇〇	五	一	三〇	二	

計約一二萬張、取引金額一〇萬圓內外で、主として省城、哈爾濱及奉天を取引先としてゐる。

縣城の主なる商戶と云へば民國十五、六年頃迄資本金一、〇〇〇圓以上のもの二六戶に及んだものが現在僅かに其の三分の一にも足りぬ狀態である。縣城に嫩江縣商會があり、嫩江縣內の大小の凡有る商工業營業者を合すれば康德元年末現在に於て龍江省公署實業廳調では四六六戶とある。

嫩江縣城商戶（資本金千圓以上）（大同二年一二月現在）

營業種別	店名	國籍別	執事人氏名	資本金	開年月
雜貨	義信成	滿洲國	張潤亭	八、〇〇〇	大同二年四月復業
〃	義發德	〃	劉潤堂	八、〇〇〇	大同二年五月復業
〃	仁義德	〃	王逢春	四、九五〇	大同二年八月復業
〃	金昇義	〃	趙金晉	二、〇〇〇	大同二年六月復業
〃	復盛慶	〃	楊錫禮	一、五〇〇	大同二年八月復業
〃	同發和長記	〃	張樹田	一、五〇〇	大同二年八月復業

嫩江縣城小賣物價（國幣圓）（大同二年九月現在）

品種	單位	價格	品種	單位	價格	品種	單位	價格
大米	一吋	一五・〇〇	豬肉	一斤	・五〇	粉條	一斤	・二四
小米	一斗	三・四〇	牛肉	一斤	・三〇	糖	一斤	・三二
大葱	一〇斤	・五〇	鷄肉	大一羽	一・〇〇	鹽	一斤	・二四
白菜	一〇斤	・二五	鷄蛋	一〇個	・七〇	豆油	一斤	・三〇
地豆	一〇斤	・三〇				香煙（雙鶴牌）	一個	・七五
大根	一〇斤	・五〇	麵粉	一袋	四・七八	棉花	一斤	一・三〇

工業 縣城には四、五年前迄は資本金一萬圓以上の燒鍋三戶を有したるも現在は欠損のため一戶となつた。人口稀薄にして工業製品の需要範圍極めて狹く、近代的化學工業發展の道が未だに拓けてゐない。大同二年末現在では燒鍋業の他には極めて小規模な製粉業七、鐵工場四、木工場六となつたが、康德二年十一月末現在龍江省公署實業廳調では縣城の主なる工業狀態次の通りである。

業種別	戶數	資本額	生產品	生產額	價格
製油業	一	二、〇〇〇元	豆油	一〇、六二八斤	二、六五七元
			豆餅	一二、〇一三塊	二、四〇三
釀酒業	一	一〇、〇〇〇	白酒	一三九、七三二斤	二七、九四六
			酒糟	八三八、三九二斤	二、五一五

本縣工業も農業の恢復に伴ひ漸次活況を呈すべく特に火磨（製粉業）の復興を期待されてゐる。大同二年末現在の火磨狀況は總數七戶、資本金總額四六〇圓（一戶平均六五圓）一箇年製粉高約十二萬斤で地場消費にも滿たぬ狀況で、現在でも之ら製品の移入が多い。

金融 中央銀行辦事處（大同二年十二月十五日開設）は少額の融資をなし、商取引は主として現金取引をなす程度で滙票の發給亦極めて少額である。

中央銀行の貸出及預金（康德元年十二月末現在）

貸付	一〇四、〇〇〇圓
預金	二、〇〇〇圓

從來の金融について見るに、銀行、錢莊、當舖等の金融施設が無かつたので民間の金持が高利貸を營む習慣あり、今日未だ行はれてゐる。その一例として商家の習慣では月利六—八分といふ高利、農家の習慣は塾辦費と稱するものがある。之は資金を借りて耕作し其收獲期に現物返還を行ひ、此の場合は資金の倍額に當る品物を充てたもので、一般下層階級は常に不當な金利の搾取に惱まされてゐる。

通貨は大同元年に馬占山票一二萬元の流通を見たるも翌年全部回收せられ、主なる流通貨幣江洋も康德元年七月回收を完了し國幣が之に代つた。

（六）邑　鎭

嫩江（墨爾根）　舊都墨爾根は康熙二十四年（一六八五年）建設せられたものであるが、今は河中に沒し去つたと云はれてゐる。齊齊哈爾北方陸路二四〇粁、黑河迄二八〇粁で、嫩江左岸に沿ひ大同二年十一月現在では戶數一、二三八、人口五、五五四となり、康德元年十二月末現在は次の如く稍減少してゐる。

戶數	人口									
總數	總數	滿人		日本人				外國人		
		男	女	內地人		朝鮮人		男	女	
				男	女	男	女			
一、二二	五、二五〇	三、〇〇二	二、二九	一	一	二	二	一七	八	

縣城街基は東西二滿里、南北二滿里半の地域を有し、建設中の墨爾根線の終點で齊齊哈爾及黑河に通ずる街道の昔からの中心地である。訥河迄は自動車と鐵道とに據てざつと四時間を要する。

公私機關　縣公署、電報局、電話局、郵局、林務署、中央銀行辦事處、商會、農務會

伊拉哈　嫩江縣の玄關に當り古くからの驛站で、縣城より四一粁、第二區警察署がある。最近まで七、八軒の旅店があつたのみ、之は事變後の疲弊が甚しかつたからである。嫩江—訥河內自動車道路が通じて以來漸次戶數は增加しつつある。

科洛站　依拉哈と共に古くからの驛站で戶數四〇と云ふが大半は空屋である。第四區警察署があり、縣城まで四二粁、科洛富士（科洛南山）は南方に聳立し山容雄偉、北滿の名勝地とされてゐる。

四站（塔溪）　此の驛站は縣城に亞ぐ邑落で、黑河に通ずる小興安嶺越えの關門となつてゐる。科洛站より四四粁距り第五區警察署が在る。天嶮を擁し盆地中には萬福麟が建てた二萬人を收容し得る煉瓦建の大兵營がある。訥河より黑河行の總局自動車は此地に一泊してゐた。商舖は二三小さいものがあるのみ。

五、璦　琿　縣

（一）自然及住民

自然　西境をなす小興安嶺主脈からの緩漫な傾斜が東北境を流るゝ黑龍江に達する一帶の地域である。廣袤一萬三千餘平方粁、その中に小興安嶺の支脈が介在してはゐるが、大體開濶な農耕地帶に屬し、幾多の小河川が何れも東流して黑龍江に注ぎ此等諸河川特に黑龍江の流域は耕作し得べき平野を形成してゐる。

昭和八年の秋、嫩江から汗達氣を經、興安嶺を越えて黑河に達し、更に黑龍江に添うて北方呼蘭縣に進んだ滿鐵調査班は次の如く報告してゐる「小興安嶺から山神府に至る間は砂質及礫質壤土地帶より成つて地力劣り、農產資源地として見るべきものがない。山神府以東黑河に至る間は大波狀地、黑河に近づくに從ひ農耕地を增す。主として砂質壤土、地力稍劣るも高粱以外の作物は殆ど耕作されつゝある。而して黑河より北黑龍江岸一帶は到所平坦地とは稱し難いが、荒地と雖も悉く可耕未墾地であつて、黑河附近の水田を始とし麥類、粟、黍、玉蜀黍、蕎麥、蔬菜等高粱を除く一切の畑作に支障がない。また到所こむぎだまし、らいむぎもどき等禾本科野草の繁茂の程度より見て放牧の適地と思はれる。要之、この地域一帶は砂質、砂質腐埴質壤土より成る北滿農產資源地であつて何時までも放置さるべきではない」。

氣候は勿論寒い—否寒いと一般から考へられてゐる。併し海拉爾、滿洲里程ではない。一年を通じての最低氣溫は一月で零下二七度乃至三四—五度、例年四月上中旬になると黑龍江結氷も土地の凍結も共に解け初め、霜も四月下旬を堺として降らなくなる。尤も四月中は夜間零下二—六度、稀には一—二度に下つたこともあるが、それでも流石に春らしくなる。がこの解氷前後が最も北西の風多く且つ强い時であり、加ふるに十二月から三月へかけて降水量最も少く概ね一〇粍以下といふ乾燥の爲に、暴風に併せて黃塵萬丈の日が連續することがある。

五月、最高一四—二〇度、最低三—五度、もう零下には下らない。六月、最高一四—二四度、最低一一—一二度。七月は最高溫度で二六—二八、九度、最低は一六—一七度、八月はやゝ下る。併しこの眞夏でも六尺の地下は依然として凍結してゐる。雨量は四月五月と少しづゝ增して七八月最も多くなり、月二七〇粍を越したことがある。此地方の累年平均雨量は五八六、九粍（南滿平均六〇〇粍）であるが、乃ちどうかすると其半が夏の一ヶ月間に降る譯であり、要するに一年の雨の大部分が六月から九月までに降つてしまふ譯である。で、此期間には屢々洪水の憂がある。

九月下旬に初霜を見る。乃ち此地方の無霜期間は一三〇—一三五日で、南滿に比し二〇日內外短い。氣溫は最高一五—二〇度、最低七—九度、十月になると急に下つて最高四—一〇度。最低はマイナスになる。天氣淸朗の秋日和が續く。十月初旬初雪が降る。積雪は七寸內外が普通である。十一月に入ると氣溫は常に零下で二—一五度。黑龍江は十月下旬から流氷を見、十一月中旬結氷期に入り、中旬には其上を人馬の通行ができる。以上氣象に關する數字は何れも一九二七から三一年まで五ヶ年黑河に於て記錄された左の二表に據る。而し最近の正確なる氣象觀測は總論參照。

黑河に於ける月別最高最低溫度（總論參照）

月	年	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
一月	最高	一七・八	一九・八	二一・三	二〇・八	二五・三
	最低	二七・一	二八・八	二七・七	二七・九	三四・五
二月	最高	一三・七	一二・〇	一四・一	一七・七	二一・五
	最低	二六・二	二四・八	二六・一	二五・七	三三・〇
三月	最高	二・二	〇	三・六	三・〇	三・六
	最低	一五・一	〇	一三・一	一三・七	一五・六
四月	最高	八・六	一〇・一	七・六	九・一	四・七
	最低	二・三	一二・七	三・八	三・〇	六・二
五月	最高	一五・四	一六・八	二〇・二	一八・五	一四・〇
	最低	四・四	三・六	五・八	四・六	三・三

黑河に於ける月別降水量（粍）

	一九二七年	一九二八年	一九二九年	一九三〇年	一九三一年
一月	五・三	五・〇	〇・三	缺測	七・〇
二月	三・〇	一・三	一〇・八	二・〇	〇・八
三月	六・五	五・三	二・八	缺測	一一・一
四月	一七・八	五・五	一〇・三	缺測	一〇・〇
五月	二四・〇	二〇・三	二二・三	一二・三	二四・五
六月	六五・五	六九・三	一八七・三	二九・五	二一八・八
七月	九〇・五	二七七・五	一九八・三	五五・五	四〇・五
八月	一一八・五	一六五・〇	一四七・八	二二二・五	一一二・八
九月	三〇・五	一四五・〇	四六・八	六六・三	一七二・二
十月	三九・〇	六〇・五	三一・〇	〇・三	四四・八
十一月	一一六・八	一七・六	一三・六	一五・三	一三・一
十二月	二四・七	二六・五	二六・六	二九・八	二六・一
六月 最高	一一四・八	一一四・一	一二七・九	二三・九	二三・〇
六月 最低	一一・二	一〇・六	一〇・九	一二・一	一二・六
七月 最高	二七・一	二六・二	二六・四	二八・九	二八・二
七月 最低	一七・一	一六・七	一七・一	一六・七	一七・七
八月 最高	二四・一	二五・二	二五・五	二五・九	二六・一
八月 最低	一二・五	一六・四	一五・八	一五・九	一五・四
九月 最高	二〇・二	一五・七	一五・九	一八・二	一七・三
九月 最低	七・四	七・六	七・三	七・七	九・六
十月 最高	八・六	一・一	四・八	一〇・八	八・二
十月 最低	〇・四	一・一	二・四	一・八	〇・八
十一月 最高	二・五	八・一	四・一	九・二	二・七
十一月 最低	一・五	五・八	一・六	五・三	一・三
十二月 最高	一六・八	一七・六	一九・五	二三・九	二四・三
十二月 最低	二四・七	二四・五	二六・六	二九・八	二六・一

全年	四三五・四	七六八・五	六七二・七	四〇四・四	六五七・七
十一月	三二・五	一三・〇	二・〇	一四・八	一三・〇
十二月	二・三	〇・八	一二・〇	一・二	缺測

任民　康德二年十二月末日現在國務院總務廳統計處（民政部地方司調と同じ）調に依ると戸數七、五三一、人口三三、三四三、本縣面積に對して一平方粁當人口密度は二・四一七、全人口の三割强は黑河に居住し、從て黑河を除く人口密度は更に稀薄だと思はねばならぬ。尙全縣の人口は近年減少の傾向であつたが、北黑線開通後は黑河に於ける人口特に日本人の增加を見てゐる。尙國務院發表では滿漢人三一、九二一（男一九、四二八女一二、四九三）、日本內地人八二八（男四五六女三七二）、朝鮮人四七七（男二八九女一八八）、其他一一七（男六一女五六）とある。

當地方の民族史に依れば、支那南北朝時代（西曆三八六—五八九）には室韋人（ダウール人の祖先）が住んでゐただけで、清朝の北方經營が始まつて嫩江地方から追はれたダウール、オロチョンの原始民族が續々來往した。北清事變以來之ら先住民族も山岳地帶に姿を潛め漢民族が之に代つたのである。

民族別人口

（康德二年十月末現在　黑河省公署總務廳調）

總人口		漢人	滿人	回族	日本人 內地人	日本人 朝鮮人	其他	備考
男	二〇、七四四	一三、九七五	五、六一四	三二四	四七三	二九五	六三	其他ノ內ニハ蘇聯人一〇ヲ含ミ無國籍男五七女四七
女	一二、七七四	七、四四二	四、四九六	一九二	三九〇	一九二	六二	
計	三三、五一八	二一、四一七	一〇、一一〇	五一六	八六三	四八七	一二五	

尙、滿人中にはオロチョン人一、四九七を含み彼等は庫瑪爾路鄂倫春協領紀下の正白旗、鑲黃旗に屬する。

（二）政治及治安、文化

政治　黑龍江地方は一六四九年露人が攻畧の本據としてアルバジン城を築いてから露清間の問題となつた。當時この地方は漢滿族の住民殆となく只僅に土人の聚落を發見する狀況であつたので、清國政府はこゝに瓊琿市を建設し（一六八四年）殖民を奬勵した。一六八九年にはネルチンスク條約に依て黑龍江兩岸は清領となり沿岸の露人根據地は撤退したが、一八五八年露國は清に迫つて瓊琿條約を結び再び黑龍江左岸を獲得した。條約內容は左の如くである。

一、兩國の境界を黑龍江とし左岸は露領、右岸は烏蘇里河口迄清領とする。

一、烏蘇里江より東海に至る間の地は今後正確なる境界を定むる迄兩國の共有とする。

一、國境諸河川の航行貿易は露清兩國の船舶にのみ許す。

一、黑龍江左岸の清人は向後三年間に右岸に移る。

一九〇〇年北清事變勃發、露人はまた右岸諸都市を占領し、ブラゴエ市に於ては清人五千を殺戮して所謂アムール流血の慘事を惹起した。住民は悉く逃亡して露軍は一九〇六年迄此地を占據するや、同年對露交涉局が黑河に設置せられた。一九〇八年瓊琿同知直隸廳設置、一九一四年瓊琿縣と改稱（黑龍江省管下）康德元年黑河省設置、現在省公署も縣公署も黑河に在る。

瓊琿縣財政左の如し。

康德三年度瓊琿縣歲入出豫算

（單位圓）

歲出	二年度	三年度	增減
縣收入額	一〇〇、一五四	一九七、六二八	九七、四七四
國庫補助額	一〇〇、一五四	一九七、六二八	九七、四七四

本縣は民國十八年の露支紛爭の瘡痍と沿岸產金の衰退とに依つて豫ねて不況に苦しんでゐた所である。然るに滿洲事變後の地方紊亂、農村疲弊、それに馬占山が濫發した所謂馬大洋一六九萬餘圓の暴落等が拍車を加へて、縣財政は窮迫、大同二年度は一二萬圓の赤字を出した。右揭康德三年度豫算の不足は之に比して激減を示してゐるが、之を以て一概に縣財政の回復とは見るを得ない情況である。

治安　治安は比較的維持されてゐる。第三軍管區司令部管下の黑河地區警備司令部兼混成第十五旅司令部が黑河に駐屯、省警務廳、黑河警察廳、瓊琿縣警察署、國境警察隊等に依つて治安維持委員會を構成、日本軍隊と協力し、保衛隊、卡倫、保甲自衛團等之に協力して治安維持に當り、縣では此の保衛隊を重視し、又、自治的治安機關の誘導發達に努めてゐる。黑河警察署は其管下に二分所十二分駐所を置き、別に警察隊一中隊を置いてゐる。保甲制度の實施に依り本縣には六保六四甲、六五六牌を以て保甲自衛團を組織し、團數四五、團員約二、三五〇を算してゐる。尙、治安維持會指導の下に黑河省宣撫小委員會の瓊琿縣宣撫小委員會が活動してゐる。

內部的には匪賊の橫行少く治安が維持されてゐるが、對岸に蘇領の武市を控へ、當地方の國境監視は嚴重を極め、黑龍江沿岸地方の對蘇神經中樞は黑河を尖端としてゐるかの觀がある。

文化　文化は極めて低い。併し此の地方に於ては最も進んで居り、ロシア的影響を受くること最も多き特殊な地方である。殊に黑河、瓊琿の兩市に於ては若干の施設を見ることが出來る。

（一）教育　學校は康德二年度末現在に於て中等學校、小學校を含して五〇校、本縣の教育費二五、〇〇〇圓である。

學校種別	學校數	教員數	生徒數	前年比較生徒增加數
中等學校	三	一二	七八	二七
兩級小學校	六	二三	八六六	六三

初級小學校	四一	四二	一、一三一
中學校			三七六

前年に比し初級小學校は一四校を增加してゐる。小學兒童の就學率は六〇%、黑河省中最高率である。中等學校は瑷琿縣城內に縣立初級中學校、縣立女子初級師範學校各一、黑河省城內に縣立初級師範學校一、計三を有する。民衆學校は男子民衆學校及女子民衆學校各一が在る。

文敎團體として滿洲帝國敎育會黑河省分會及瑷琿縣支會、瑷琿縣初級師範童子團があり、特殊敎育機關にはオロチョン學校が營つて設立されてゐたが經營困難のため現在は閉校してゐる。尙ほ日本人小學校は康德二年黑河に開設された。

(二)宗敎　基督敎會二、回敎寺院一が在る。宗徒に就いては不詳。

(三)社會　社會事業團體には國立檢疫所、公立貧民院及私立の道德聯合會及理敎會が在る。義倉は瑷琿縣城內に一ヶ所設置されてゐる。

(四)衞生　先づ主なるものとして黑河國境檢疫所同診療所が在る。大同二年九月設立せられ、設備は概ね整備し、實績大いに上り、康德二年（一月—十二月）一ヶ年間の患者數は九萬人に近い。黑河には此の他、瑷琿縣立病院と私立醫療所五、賣藥店一六、齒科醫四、內科醫一五、產婆六を見る。

（三）資　源

農產　瑷琿縣の面積は一三、八〇〇平方粁、不可耕地は一二、〇〇〇平方粁で總面積の八七%を占め、可耕地は一、八〇〇平方粁で總面積の一三%に過ぎぬ。而かもその內で僅かに既耕地は三〇〇平方粁、總面積の二%、可耕地の一七%といふのであるから、現在のところ農業は殆ど云ふに足りない、と同時に尙一、五〇〇平方粁の未耕地が將來を期待させるとも云へる。

縣面積竝土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地			不可耕地	總面積ニ對スル比率			可耕地ニ對スル比率	
	既耕地	未耕地	計		可耕地	不可耕地	既耕地	既耕地	未耕地
一三、七九四平方粁	二九五平方粁	一、四七五平方粁	一、七七〇平方粁	一二、〇二四平方粁	一二・八%	八七・二%	二・一%	一〇・七%	一六・七%	八三・三%

本地方の土地は昔は悉く旗人の受領であつたが、後年多く移住支那人の手に歸した。注意すべきは小作農が居ないことで、縣公署の調では縣下農家戶數三、七〇〇、人口一八、〇〇〇餘、自作農二、七〇〇戶と記してゐる。即ち農家の七割强を占むる者は自作農であり、他は一割六分の雇農と農繁期に雇傭勞働者となる手工業農の一割とから成つて居る。而して雇農も小農の沒落したものでなく此等は概ね近年の移民であり漸次自作農化しつゝある者である。而して此地方では大農約四〇〇晌で一〇〇晌以上を耕す者全農家戶數二割、それ以下の中小農が八割强を占めてゐる（總說農業の項參照）

土質は全般的には砂質壤土で地力は齊齊哈爾方面の砂質壤土に勝る。黑河を中心とする黑龍江流域は砂礫質冲積土であるが地力大ならず、一部地方に殖土地帶あるが拉哈方面の地力に比すれば劣る。

土地價格

（康德二年十月現在 黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量	區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
黑河市內	街基	甲	（每丈方）一三・〇〇圓		東岡警察署區域	各村宅地	普通	二八・〇〇	
同	同	乙	一〇・〇〇		同	耕地	上	一三・〇〇	產水稻 五斗
同	同	丙	七・〇〇		同	同	中	五・〇〇	產小麥 三斗
愛琿縣城區警察署區域	城內街基	甲	二・〇〇		同	同	下	三・〇〇	同 二・五斗
同	同	乙	一・五〇		大五家警察署區域	未耕地		・八〇	
同	同	丙	一・〇〇		同	各村宅地	普通	一五・〇〇	
城外各村宅地	普通		三〇・〇〇		同	耕地	上	二・三〇	產小麥 二・五斗
同	耕地	上	四・〇〇	產小麥 三斗	同	同	中	一・五〇	同 二斗
同	同	中	二・五〇	同 二・五斗	同	同	下	一・二〇	同 一・八斗
同	同	下	一・五〇	同 二斗	同	未耕地		・五〇	
西四嘉警察署區域	未耕地		・六〇		張地營警察署區域	各村宅地	普通	一〇・〇〇	
同	各村宅地	普通	三〇・〇〇		同	耕地	上	一・六〇	同 二・八斗
同	耕地	上	一五・〇〇	同 三斗	同	同	中	一・〇〇	同 二・三斗
同	同	中	六・〇〇	同 二・五斗	同	同	下	・八〇	同 二斗
同	同	下	三・〇〇	同 二斗	同	未耕地		・五〇	

この地方の農耕は北滿各地と大差はないが、齊齊哈爾地方に比し一層掠奪農法である。耕種上の作業は一〇晌地を單位としてゐるから、南滿に比すれば甚だ粗放であるが、小興安嶺以西の原始農業に比すれば格段の進歩である。選種には頗る無關心で、普通脫穀調整した儘のものを用ひるが概して南滿より播種量多く粗放で、大豆は齊齊哈爾地方より四〇・七％の薄蒔、點播法を採用してゐる。除草中耕培土等の回數少く、できるだけ手數を省いてゐる。除草中耕培土を行ふ作物は大豆、粟の二種と畦溝を要する作物に限られ各一回行ふに過ぎず、小麥、燕麥、蕎麥、黍、稗は行はないのを慣例としてゐる。而て特に目立つのは機械農具の使用比較的に多いことで、畜類及在來式農具の使用は割合に少い。之はロシヤ農民に刺戟された結果であり、廣い耕地を短期間に小數の人で耕すことに關係してゐる。また南北滿洲とも普通にはやらない休墾法を實施してゐる。即ち開墾後約三年耕作の後には一、二年休墾することによつて施肥の經濟節約を行ふ。之は經濟上の理由よりは寧ろ習慣上の問題もありまた餘り豐饒ではないといふことの結果でもある。從つて作付面積は既耕地面積に比して遙かに少くなつて居る。原則として輪作するが、小麥、粟、燕麥は主要作物なので殆と連作である。輪作は不規則な作付をなし、三年又は四年輪作で其例は次の如し。

例一　一年目小麥、二年目粟、三年目大豆、四年目燕麥—蕎麥

例二　一年目粟、二年目包米—大豆、四年目蕎麥—燕麥、小規模の農家では連作するものがある。

施肥は牛馬糞を元肥として播種時に圃場に撒布するもので幾分地力保持に役立つ程度に止つてゐる。元來施肥には餘り意を用ひず、開墾後一五年は勿論施肥を行はないのが通例で、其後と雖も牛馬糞の多い農家に限り三年一回僅かに大豆、粟作にのみ一晌二〇車程度の施肥で他は無肥料である。

縣下農民の使用する農具の種類及數量は左の如く、民國二〇年度の數字は民國一三—一六年の農業好況時代以來使用されたものであり、大同二年度の數字は近年の水災事變其他を經たものであるが、此一表を以てしても農村疲弊の狀況は明に看取されるであらう。

（滿鐵黑河駐在員報告）

	打揚機	割地機	撒子機	清糧機	洋犁	洋耙	トラクター
民國二〇年	三〇	三〇〇	二〇〇	二〇〇	一、五〇〇	七〇	四
大同二年	二〇	二〇〇	一〇〇	一〇〇	一、〇〇〇	四〇	

（昭和八年滿鐵調査班報告）

	作付歩合%	收穫量（布度）	播種量（布度）	播種期	播種法	畦幅、株間	中耕除草回數	收穫期
小麥	一九	四五	四・〇	四月上	散播	—	—	七月上
大麥	一八	三八	五・〇	〃	〃	—	—	〃
燕麥	一八	四三	五・〇	〃	〃	—	—	〃
大豆	一五	四〇	二・〇	四月上中	點播	畦二・〇	一	八月上
粟	一四	三〇	一・五	〃	條播	株二・〇	二	八月中
黍	六	三五	二・〇	四月下五月上	〃	畦二・〇	一	八月下
玉蜀黍	九	四七	二・〇	四月上	點播	株一・六	二	〃
蕎麥	三	三七	一・八	四月中	條播	畦二・〇	一	八月上
黑豆其他豆類	一	三六	二・三	四月上	點播	株二・〇	一	〃

黑河瑷琿地方の收獲量に就ての滿鐵齊齊哈爾事務所の報告（昭和十年五月）は左の如く、齊齊哈爾地方に比してかなりの減收を示してゐる理由は「氣象關係に支配されることと除草中耕培土等一般耕種の粗放なるに起因するであらう」と說明してゐる。平年及前年の收穫量を齊齊哈爾地方に比較すれば次の如し。

（單位日本石ニ換算）

	昭和九年度			平年作		
	瑷黑地方	齊々哈爾地方	比較	瑷黑地方	齊々哈爾地方	比較
小麥	三、六〇 石	四、三〇 石	（一）	二、七六 石	四、〇〇 石	（一）
粟	一、四〇	四、八〇	（一）	二、一〇	七、〇〇	一、二四
大豆	一、一一	三、九〇	（一）	三、〇〇	五、五〇	四、九〇
燕麥	四、八〇	六、六〇	（一）	四、〇〇	六、〇〇	二、〇〇
蕎麥	〇、七六	二、六〇	（一）	一、五〇	三、七五	二、二五
玉蜀黍	二、二五	四、七〇	（一）	一、九〇	七、〇〇	五、一〇
黍	一、五五	三、六八	（一）	一、九三	五、〇〇	三、〇七

黑河滿鐵駐在員は瑷琿縣の農家經濟に就て昭和九年十二月左の如く報告してゐる。

正（農）業よりの收入一〇〇圓、副業收入（木耳採取、木炭、薪、馬草及馬車運搬等）二〇圓、合計一二〇圓の收入ある中農成人一人の標準生活費は食料品代四八圓、衣服費一二圓、交際費、賦課金其他二〇圓、合計八〇圓であるが、近來の悲境に於ては五五圓迄低下、其結果として彼等は麵粉の如き一年數回口にするのみ、玉蜀黍や粟の粥を常食にしてゐる。

富農の成人男子標準生活費は食費七七圓、衣服費九〇圓、住費及雜費一一六圓、合計二八三圓であり女子は其三割に當る。

農家の耕作面積は齊齊哈爾地方に比し規模甚だ小、最大三〇晌—最小五晌、平均一〇晌內外である。その小規模なるに比すれば農家戶口は割合に多い。大農は栽培面積二〇晌以上、中農は一〇晌、小農五晌に區別し、各世帶狀況は、家屋は二—五間房の狹隘家屋多く、齊齊哈爾地方の如く七—九間房の農家は見られず、小農の平均勞働者は、一名不生產女子一〇名、中農は前者が三—四名、後者は一四—五名、大農は前者が五—六名、後者が十七八名を擁してゐる。

副業には夏期農業の餘暇に、雜草（燃料、薪付、家畜飼料）、洋草（草繩の材料、屋根葺）を刈取るのが最も大きく二—三〇布

度で國幣二元位の收益がある。

而して食費四三圓、衣服費九〇圓、雜費五二圓、合計一八五圓即ち生活費の六五%は貨幣支出であり、餘程自給自足式にやる者に於ても四〇%一一五圓は貨幣支出の必要がある。即ち生活費の半が貨幣經濟と關聯してゐるのである。而て貨幣經濟への依存性は交通の不便と多角的金融資本の存在に依て農産物の販賣及生活必需品の購買市場が獨占的に統制されることと相俟つて農村に重壓を加へてゐる。殊に小麥の單一耕作は製粉工場の聯合に依り原料小麥の買入に於て市價を操縱し農民の所得を制限した實例がある。今日の小麥播種面積の激減は天災事變の外に斯の原因もあるのである。

春耕資金

（康德二年四月末現在　中銀齊々哈爾分行調）

年度	貸付額			貸付戶數	回收額	貸付殘額
	本年度新貸付額	前年度貸付殘額	計			
大同二年	九二、六九二圓	—	九二、六九二圓	一、三六〇戶	二五二圓	九二、四四〇圓
康德元年		九二、四四〇	九二、四四〇	—	二三七	九二、二〇三

作物は大豆、玉蜀黍、小麥、粟、雜穀等普通作であつて、其他の秋收作物は氣候交通等の關係からと思はれるが少い。特用作は稀で、蔬菜類は自己の需要を充たす程度である、産額は玉蜀黍の七千瓲、大豆の五千瓲其他を合せて二萬瓲に足らず、概ね地方消費に盡きて不足分は哈爾濱方面から搬入される。以前は小麥の栽培が盛で民國一四年（大正十四年）の如きは一二〇萬布度（一九、六八〇瓲）に及び三三萬五〇〇〇布度の麥粉をイルクーツク方面に迄輸出するの盛況を示した、が、大同二年（昭和八年）には逆に一六萬四千布度の麥粉を輸入するに至つた事前述の通りである。

註　省公署では愛琿縣の穀物及小麥の增産促進のためか、康德三年四月より他縣より愛琿縣に移入される穀物、小麥に對して瓲當り三圓の縣稅を賦課することになつた。

尙茲に附記を要するは水田と阿片とである。水田は十數年來（民國十一年）鮮人の耕作に依て完熟の地なることが判り、爾來引續き水稻栽培が行はれてゐる。主として瑷琿を中心とする地方で、耕作面積約一七〇晌、平年作に於ける籾の生産一五、〇〇〇布度內外といふ。また一晌當り收量は八〇—一二〇布度、一〇〇布度の籾から八〇布度の玄米を得るといふ。普通黑龍江の支流に沿うた自然の勾配地を選定して灌溝を穿ち簡單な築堤を設けて其中を耕起するのであつて、水は低溫ではあるが、この地方灌排水ともに至便でありなほ發達の見込があるといはれる。播種子は五月下旬、散播除草三回、無肥、收獲は十月下旬。

阿片は曾ての好況時代には黑河の市場に三千封度も集つたといふ。この沿岸の阿片熱河產に比して良質、松花江沿岸のものと併稱された。近年は農村の疲弊其他に依て產額を減じたが、それでも黑河地方稅の三分一は阿片から徵收されたといふ位主要財源の一を成したのである。

勞役關係を見るに、南滿に比し農業勞働者極めて少く、從て勞働賃銀割合は高い。年工、月工、日傭に種別し年工（一〇箇月）は一〇〇元程度、月工及日傭勞銀は小人は二〇錢大人は次の如くである。

種目	春	夏	秋	冬
日傭	〇・五〇元	一・〇〇元	一・〇〇元	〇・三五元
月工	一二・〇〇	一五・〇〇	二〇・〇〇	三・五〇

普通作物

（康德元年度）

種目	作付面積	收穫高
大豆	六、四八〇畝	五、四九〇瓲
其他豆類	四八〇	三六〇
高粱	—	七三〇
粟	一、八九〇	一、五四〇

特用作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
玉蜀黍	五、九四〇	七、三八〇
小麥	三、七八〇	二、八七〇
水稻		
陸稻		
其他雜穀	一、三〇〇	一、一〇〇
計	一九、八七〇	一九、四七〇
煙草	一五陌	六瓲
計	一五〃	六〃

畜産　目下衰微の狀況に在る。特に馬匹と家牛とは民國時代に比して著しき減少を示してゐるといふが、此農業地方に於ける役畜の役割の如何なるかを考ふれば此激減は農村經濟の破滅を物語るものと謂へるであらう。一體に小農階級の農家では役畜を飼育するものが甚だ少いと謂ふ。中農でも齊齊哈爾地方より少く、二〇晌以上の大農は馬車四台、馬一〇頭、牛一頭、豚三、四頭程度で、牛の飼育が少い。

	民國十四年	民國二十年	大同二年
馬匹	一二、一七〇頭	七、二四五頭	三、六二〇頭
家牛	四、三三五頭	一、二一一頭	一、二二三頭

家畜の取引も亦甚だ振はぬ、黑河が對露貿易に依て殷盛を呈した頃には、對岸に向て每年二萬五千頭の生牛を輸出したといふが、今は既に二十年の昔語である。

畜産狀況

（康德二年九月一日現在實業部調査）

種別	數量	備考
牛	一、三六〇頭	黑河省公署調の康德二年六月末現在家畜數は牛一、六二三、馬五、四七一、騾八七、驢四〇、緬羊二三三、豚五、三二五、計一二、七七九頭、鷄一二、一五〇羽
馬	四、二四〇	
騾	三五	
驢	一〇	
羊	二九〇	
豚	四、三六九	
計	一〇、三〇四	
鷄	二七、八二六羽	

林産　所謂黑河材は黑龍江右岸の林木が殆ど黑河を集散地としてゐるための通稱である。本縣は林區狹少のため林產は甚だ少い。然し鐵道開通以來南下材の激增で林業は產業中最も活氣を呈してゐる。黑龍江上流の大小興安嶺材木は民國十五年—大同二年迄に每年二〇〇萬立方呎又は五〇萬布度宛黑河に到着したと稱せられたが一時運賃値上と徵稅關係及一般不況との爲黑河林業者一〇餘軒は全く休業の狀態となつた。

北黑線本營業開始以來康德三年三月迄五ヶ月間には黑河驛發送數量五、七〇〇瓲に達し愈々增加の傾向を見せてゐる。同三月には一立方尺三五—六錢を唱へ一月に比すれば一〇錢の高騰を來した。之は建築季節を控へての現象ではあるが運賃改正は木材業者には頗る有利となり、哈爾濱、齊齊哈爾兩地方に輸送しても採算の見込が立つやうになつたのであらう。尙ほ一箇年流筏材は平年二五—四〇萬本とも謂ふ。

集散する樹種はダフリカカラマツ、オウシウアカマツ多く其他は柞、コヲノオレ、シラカバ、モウコナラ等で樺類は薪材と

なつてゐる。樹齢は五、六〇年—一二〇年内外、三〇〇年内外のも見受るといふ。造材期は十一月初旬から翌年四月末雪解迄で造材人夫は五月頃解氷期に筏で下航して來る。黑河には木材商一一〇戸を算し、水壓式の製材機を有する工場一、其能力一日五、〇〇〇本、手挽工場一〇、其能力三—五〇〇本で、何れも企模小、技術劣るため新情勢に伴はぬ點が多い。價格は露國式を單位とする場合が多いけれど漸次滿洲國度量衡法に準據しつゝある。康德三年三月調の赤松は一本に一尺もの黑河著値八・六〇圓見當、賣價は九・九五圓、一立方尺三〇錢六厘の見込と云ふ。

木耳の生産額は康德三年二月六〇萬斤に達し黑河林務署は之が增産に乘出した。

林産狀況

森林面積	立木			
	針葉樹	濶葉樹	蓄積量（立方米）	
				計
一、〇五七、〇〇〇平方粁	一、〇五七、〇〇〇	一四、七九八、〇〇〇		一五、八五五、〇〇〇

（康德元年現在實業部調）

黑河市場林産物移出入數量

材種	移入數量（薪荷）	見込移入金額	移出數量（出荷）
丸太	七〇、〇〇〇石	二一〇、〇〇〇圓	一六、〇〇〇石
製材	二五〇、〇〇〇石	二、〇〇〇〃	八、〇〇〇石
薪材	二五〇、〇〇〇石	二七五、〇〇〇〃	—
足場丸太	三、〇〇〇本	三、六〇〇〃	—
木炭	一、二〇〇、〇〇〇斤	一八、〇〇〇〃	—
木耳	三、〇〇〇甫	七五、〇〇〇〃	二、九〇〇甫
計	—	五八三、六〇〇圓	—

（康德一二年黑河林務署調）

鑛産

砂金 黑河を中心とする各地方から砂金の産出を見る。併し其盛期は民國十三年頃で、華やかなりし當時の黑河背後地金鑛には夏季十四萬、冬季六萬の鑛丁が居り、其門戸たる黑河は人口四萬を擁し其繁榮振りは黑龍江兩岸を壓した。現在市内の大建築物、櫛比する商鋪は當時の面影を物語るものである。同十四、五年頃から産金量減少し、現在の鑛區は殆ど當時の掘殘しに屬し手掘では採算が面白くない。加之事變の混亂、地方の不安等幾多の原因が重つて近來衰微の觀がある。

縣内金廠別業態

金廠名	鑛種	鑛區位置面積	成分	經理氏名	鑛廠主管人	資本金	開始年	鑛丁數	作業可能日數	備考
逢源金廠	砂金	法別拉河上流右岸十方里二一四畝五里雅河流域八方里	九・一％	徐翔九	李月樓	合資 一〇、〇〇〇円	民國 八年	六三〇	三五〇	九鑛區技術員事務員一四〇
德源金廠	同	宋家屯二方里六七畝餘	八三・〇	高靜任	同上	七、一四三	同 十三年	二六〇	三五〇	三鑛區
大吉金廠	同	德盛溝五方里	八八・〇	徐寶家	同上	一〇、〇〇〇	同 十四年	一〇	二四〇	康德三年十月停辦
凌源金廠	同	剌爾濟河流域二方里二二五畝	七三・二	玉紫屏	同上	合資 六、〇〇〇	同二十一年	一六〇	三五〇	二鑛區
裕邊金廠	同	滿別拉河支流二方里	九三・〇	玉垂南	同上	合資 三六、〇〇〇	同 十五年	二七	三五〇	二鑛區
古溪金廠	同	阿凌河流域	八二・〇	顧德禮	邱馨五	合資 七、五〇〇	同 十四年	七二	三五〇	技師六事務員
阿凌河金廠	同	小太平溝	六五・〇	翔畫舫	張先敬	六、〇〇〇		一七〇	—	二二鑛區一
開泰金廠	同	八車力河	八四・〇	玉丙岩	採金會社				—	
福源金廠	同	二道河子二方里四〇畝	六七・〇	宋殿文	採金會社				—	
至誠金廠	同	全陽河外三筒所	八八・〇	呂鼎洲	採金會社	五、〇〇〇		一六〇	—	
德安金廠	同	拖泥河二方里	九〇・〇	林佩卿	同上	二、〇〇〇		二一	—	
源利金廠	同		九〇・〇	王天營	採金會社	三〇、〇〇〇	康德 元年	六三〇	—	
				仲子元	干恒喚	三〇、〇〇〇	民國十六年	四〇	三五〇	

（康德二年十二月末現在黑河省金鑛業同業公會調）

逢源金廠は黑河の西南一五〇滿里に在り、民國五年前發見せられ、官商合辦の振遠公司を組織し樺樹派子の開掘に着手したが結果面白からず中止、民國八年資本金八千元の商辦逢源金鑛股份公司の組織を見、漸次成績良好となり增資後民國十一年合資

組織に改組、更に大平金廠の委託經營を引受け現在に及ぶ民間鑛區である。産金額は民國九年以來同十二年迄四箇年の合計七一、八七〇兩（約二、六九五瓩）、翌十三年より三箇年の合計約六、四〇七瓩に達し發起人優先株配當二〇萬元、普通配當六割と云ふ好記錄で當時支那全國を通じて最大の金鑛と稱せられた。康德二年一月から十一月の産金量及鑛丁數は

總計二三、六六一・三一ゾロトニーク、月別最高産金量は十月の四、六五〇ゾロトニーク、鑛丁延人員七、八三九、月別最高は八月の一、〇三九で七、九兩月は共に一千餘で之に亞ぐ。

德源金廠の康德二年の産金量二四、四九二ゾロトニーク、鑛丁延人員（九月迄）一、七三四、最高六月の二九〇。

其他金廠の康德二年に於ける産金量を示せば凌源金廠二一〇ゾロトニーク。裕邊金廠四二六ゾロトニーク、古溪金廠二、三九〇ゾロトニーク、阿凌河七、四一〇ゾロトニーク、福源金廠（九月より四箇月間）一、六五〇ゾロトニーク、德安金廠三五、六五〇ゾロトニークである。

尙、前表の他康德二年二月現在の新發見鑛區採掘許可申請中のものは二十件で、内五件は採金會社より監督官廳に手續中である。

鑛産別鑛區

（康德元年末現在滿鐵地質調査所調）

種別	産地名	位置	品位又ハ品質	經營者其他記事
金	黑河	黑河ノ西北西七粁ノ江岸		昭和八年一二月地質調査員鹽田勇夫氏ノ發見ニカカル
砂金	金廠	寬河流域		
	達彥河	黑河ノ北一〇〇餘支里		德源金廠
	石灰	霍爾泌屯、馬廠屯間		
	法別拉河	縣城ノ北方一〇〇餘支里		一九二二—二五年間稼行ビッチヲ發見
	小太平溝	黑河西方額泥河上流地域		
	老公司五道溝間	黑河ノ北西五〇支里		
	霍爾泌	黑河ノ南西五〇支里		
	松樹溝	アリヘ河（縣城西方公別拉河支流）流域		
	宋家屯	黑龍江沿岸ノ一小村落		
	黃井子	三站ノ南三〇支里		
	南河	三站ノ西三五支里		
	朱堵子溝	遜畢拉河上流		
	腰嶺	遜畢拉河左岸		
	鄭家窩棚	霍爾莫津ノ北西		
	下馬廠			
	四季屯			
	樺樹縣排子			
	二道通			
	黃石嶺子			
	伊勒呼里山	伊勒里山附近		
	鰣鱗溝	黑河ヨリ二〇支里		
	連陰	黑龍江上流露領ヴヂアリンダノ對岸		
	南甕河金旺溝			
	金旺溝			
	雙金溝			
	臥龍亞溝	黑河ノ南西		
	小東溝	黑河ノ北西一五〇支里		逢源公司管理
	小西溝	黑河北西五〇支里		
	駱駝脖子	黑河ノ北西六〇支里		
	樹桃子	黑河北西一一〇支里		
	頭道邪裡根氣	黑河南西九〇支里		德源金廠
				逢源金廠

砂金	二道邪裡根氣	黑河南西八〇支里	
	三道邪裡根氣	黑河西七〇支里	
	南子河	黑河南西二〇〇支里	
	胡芦琴	黑河南西四〇支里	
	張家地營子	黑河南東一七〇支里	
	蟆蜓河	黑河南方一六〇支里	
	奇哥特	黑河南東三〇〇支里	
	南馬二道溝	黑河ノ南西	
	卞馬卞氣溝		
	豬肚河溝		
	中興溝		
	西虎拉溝		
	三道博爾格力溝		
	四道博爾格力溝		
	五道博爾格力溝		
	六道博爾格力溝		
	七道博爾格力溝		
	千金溝		
	古闌溝		
	結爾機千溝		
	二道河溝		
	刺爾濱河別拉罕溝		
	司烝黑罕溝		
	五里雅溝		
	靴鞭草溝		
	茶路八奇溝		
	刺爾賓河三岔溝間	黑河 裕邊廠	不良
	庫溜河左右溝	黑河 周遠隆	良好
	西北索拉雞幹溝	黑河 孫寶基	
	刺爾賓河十道溝	黑河 裕邊廠	
	大河崖小猪肚河溝	黑河 王永麟	
	拙泥河	黑河 徐鵬志	
	拙泥河下拉格	黑河 合同利	
	大格楞溝	〃	
	三道卞老哈齊拉溝	〃	
	南河凌河溝	黑河 恒增裕	
	西北川牛河	黑河 張樹會、王鴻達	
石炭	武市ノ北マルコーウオノ對岸	約二五年前試掘シタルモ湧水多ク不成功ニ終レリ	
	霍爾泌站		
	黑河		
	松樹溝		
	煤窰溝		
	宋家屯		
	蔡家地營子		
	二龍站		
陶土	山神府		
石灰岩	石灰窰		

	霍爾泌站ノ上流約二八支里		
	黑河西方小額泥河部落ノ北東五粁		
	縣城ヲ距ルコト三〇支里		
	縣城ノ西三〇支里		
	宋家屯ノ南西四〇〇米ノ新窰溝	黑河 德源金廠ノ經營	不良
	瓮琿ノ南西八〇支里	黑河 逢源金廠ノ經營	不良
	黑河西方約二五粁	〃	良好
	寄石廠附近	〃	
		〃	
		〃	
		〃	
		〃	
		〃	
		黑河 振興金廠	
		黑河 古溪金廠	
		〃	
		〃	
		黑河 簫邊金廠	
		〃	
		黑河 德源金廠	
		〃	
		黑河 源利金廠	昭和八年六月發見ス

水産

特筆すべきものは無い。漁場も一定せず魚量も尠い。多くは沿岸農民が片手間に網を使用して漁撈に從事する程度である。年産七萬斤を普通とし、大同二年には七萬四千斤程度と推定せられた。價格は鮮鮭毎甫度二圓、鹽鮭五圓五〇錢。漁船二〇隻

あり。大同二年度の魚類別漁獲高推定は次表の通りである。

種別	數量	一斤價額
黃魚	二、四〇〇斤	·一五
鯉魚	三、六〇〇	·一〇
鮒魚	二、四〇〇	·一〇
臭化魚	一、八〇〇	·一五
島魚	六、〇〇〇	·一〇
草根魚	六、〇〇〇	·一五
虫蠶魚		
紅尾魚		
把魚	二、〇〇〇	·〇五
鴨綠魚		
鮹魚		
其里富魚	三、六〇〇	·一五
大瑪哈魚	三六、〇〇〇	—
計	七三、八〇〇	

（四）交通

黑河は黑龍江岸地方交通の中心地である。從來水路を以て重要な交通路としてゐたが、建國以來陸上交通施設は黑河省城（瑷琿を含む）を中心として續々開拓せられ、總說交通の部に於て記述した通である。

國道

1　黑河—龍鎭—北安鎭　〇〇〇粁

瑷琿站—北安站〇〇〇粁。北黑線建設道路を利用して建設中である。舊道は龍鎭—通化—海倫に延びてゐる。

2　黑河—嫩江—訥河—齊齊哈爾

黑河—嫩江は一等國道として康德二年完成、四季を通じて自動車の運行が可能となつたが、雨季には障害を起すこともある。

3　黑河—汗達氣—嫩江　〇〇〇粁

所謂西廻線で興安嶺金廠を經由してゐる。黑河—汗達氣は四季自動車の交通可能。

4　二站—孫吳—遜河—奇克特

延長〇〇〇粁。西廻線二站より奇克特に通ずるもの。〇〇に於て北黑線と交叉す。遜河縣開拓の重要道路である。

5　三站—裕邊金廠—三道卡（豫定線）

延長〇〇〇粁。西廻線の三站より山地を通て江岸三道卡に至るもの。

舊道

1　黑河—奇克特

延長〇〇〇粁。冬季のみ自動車の運行可能なるも、必要に應じて官衙其他調査團等の自動車が運行する程度の道路である。更に烏雲、佛山を經て羅北に延びてゐる。

2　黑河—金山鎭

延長〇〇〇粁。呼瑪縣最大の邑落金山鎭に通じ、この道路も冬季のみ自動車運行し、官衙或は調査團體等自動車が必要に應じて運行してゐる。途中主要部落は三道卡、呼瑪縣城等。本道路は更に鷗浦、漠河に延びてゐる。

主要都市部落間道路粁程

黑河—訥河間（鐵路總局自動車課營業粁）（粁程削除）

	訥河	九一	嫩江	四站	河沿	二站	愛琿城	黑河
黑河								三三〇

黑河—呼瑪間（粁程削除）

	黑河	馬廠	張地營子	白石礤子	滿洲屯	青石廠	三道卡	老道店	庫瑪爾	老家船口	呼瑪
黑河											
馬廠											
張地營子											
白石礤子											
滿洲屯											
青石廠											
三道卡											
老道店											
庫瑪爾											
老家船口											
呼瑪											

（昭和八年十一月滿鐵調査班調査）

二八七

（削除）

車馬 車馬は此地方に於ける重要交通機關ではあるが、國道の通行が許されないのと、普通の道路が冬季以外惡道路なる爲に其の能力が充分に發揮されない。

車數	荷馬車	木頭車	轎車	牛車	橇	計
	（削除）	（同上）	（同上）	（同上）	（同上）	（同上）

康德二年二月調

自動車　黑河を中心として嫩江、呼瑪、奇克及北安鎭に通ずる道路を利用する自動車の運行が旺んである。縣內の自動車數は康德二年五月末現在公私を合して七〇台と云ひ貨物自動車は黑河に三七台を有してゐる。鐵道總局は總論に於て述べた如く訥黑線の一部を哈爾濱鐵路局をして經營せしめてゐるが、路線は最初黑河—辰淸線及黑河—二站—嫩江—訥河線を總局が經營、黑河—奇克、黑河—呼瑪、黑河—龍門、黑河—訥河及孫吳—遜河—奇克の五線に國際運輸扱のバス或は貨物自動車が運行してゐた。然し乍ら現在では全路線を總局に於て經營することとなり國際は全部運輸を中止した。總局經營路線次の如し。

(一)　黑河—瑷琿　自動車營業粁程〇〇粁

康德元年三月營業開始當時は黑河—瑷琿—二站—塔溪(四站)—嫩江—訥河間三三〇粁の運輸に從てゐたが、北黑線開通に伴ひ康德二年十一月二十二日より現在の路線に短縮せられ、同時に北辰線との連絡のため營業中の黑河—辰淸線も廢止となつた。訥河線の一部を爲し訥河迄の道路狀況は雨季或は雪解季には往々路線に故障を生ずるも四季を通じて殆ど自動車の運行可能と云てよい道路となつた。每日二往復旅客及手荷物程度の貨物運輸を行つてゐる。

(二)　黑河—興安金廠總局—汗達氣　營業粁程〇〇〇粁

四季を通じて自動車の運行可能。早くより嫩江縣の興安金廠總局自動車が黑河間に運轉せられ、鐵道總局は本道路の國道となるに及び康德二年八月十日より汗達氣迄延長し假營業を開始、同年十二月二十五日より旅客及荷物運輸の本營業に入り三日每に一往復を行つてゐる。訥黑線の一部である。

(三)　黑河—瑷琿—奇克　營業粁程〇〇〇粁

訥黑線の一部で康德三年一月二十日營業開始。八日每に一回運行となつてゐるが、之は黑河—汗達氣線の延長として經營せられてゐるため所要日數が多いのである。

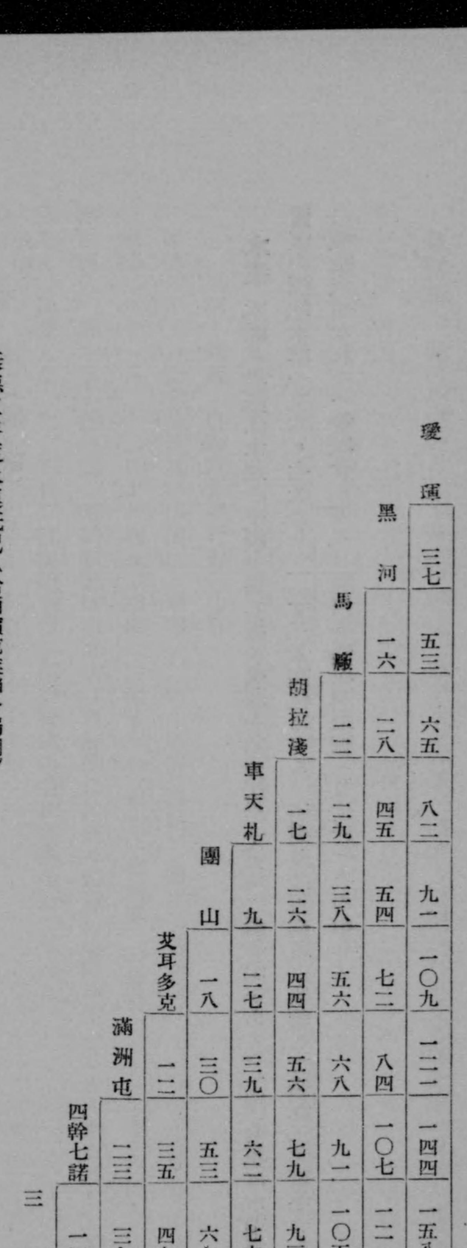
總局は更に黑河より呼瑪に通ずる縣內の金山鎭に至る路線及龍鎭縣の孫吳より遜河縣城、奇克縣城に通ずる路線の營業を計畫近く開始の豫定である。

鐵道　辰黑、北辰兩線の接續に依り康德二年十一月一日より名實共に北黑線と成つた譯で、本縣內に屬する鐵路は其の辰黑線孫吳站の稍北方より黑河迄約〇〇〇粁と、貨物專用線たる黑河碼頭線四•六七四粁とである。同碼頭線は水陸貨物運輸連絡の圓滑を期して建設せられ北黑線の延長線と見るべきである。辰黑線が康德二年(昭和十年)二月二十日開通するや黑河、大連を繫ぐ南北滿洲縱貫の大幹線が實現せられた。各站區間距離は次の通りである。

距　離　(粁)

(削　除)

水運　本縣は黑龍江水運の中樞を爲し黑河碼頭を始め江岸十箇所に船着場がある。黑河碼頭は水準海拔一三九•九米即ち哈爾濱の標準水準一二六•七米より一三•三米高位に在る。同碼頭は舊碼頭に接續して康德二年新築せられ延長〇〇〇米、〇〇〇噸級汽船なれば一隻橫付し得る。縣內各碼頭間距離(單位粁)次の如し。



康德二年度水運概況（哈爾濱航業聯合局調）

碼頭別船客數

碼頭名	乘船	下船
三站	一、四五五	二、二六五
張家地營	八	三〇
黑河	一四、五七六	一〇、四九一
卡倫山	六八	一三〇
瑷琿	三、〇九七	三、三一六
富拉爾基	—	一
大五家子	五一六	五六九
馬廠	四三八	四四八
四季屯	七八五	六八六
計	二〇、九四三	一七、九三六

碼頭別貨物移出入數量（單位瓩）

碼頭名	移入	移出
三站	一二〇、〇九一	四、〇九八
馬廠	—	一、〇〇〇
三合站		二二、九五一
張家地營	一、七二〇	—
黑河	七、七四二、五五八	五、一八一、二五六
卡倫山	四九一	—
瑷琿	六三八、二二六	八、五八六
大五家子	一〇、八五二	—
四季屯	一三、一五九	—
計	八、五二七、〇九七	五、二一七、八九一

註　品種別移出入數量は總論參照

空運　滿洲航空輸送會社は總論に於て述べた如く、黑河—北安鎭—哈爾濱線及黑河—嫩江—齊齊哈爾線の二航空路を經營してゐる。

（五）商工業、金融

商業　本縣商業は元來對露貿易の根據地として發達し、其禁止に依て大打擊を蒙り、哈爾濱、富錦、拉哈との國內交易に局限せられたが、黑河は依然として沿邊一帶の要衝をなしてゐた。北黑線開通後は愈々本縣商業中心地としての黑河の商權は堅固となり、黑河省並額爾克納河地方に對して物資集散市場たる價値を示してゐる。而し乍ら昔日の黃金時代には比すべくも無い。たゞ黑河省公署設置以來政治的中心地となり、北黑線の開通、對哈爾濱航運の發達等に依て商人の移住開店するもの日に多きを加へ或は新企業計畫の進められる等好條件を具備して黑河の堅實なる商業經濟發展が期待されやう。

瑷琿縣に於ては黑河、瑷琿を除きて見るべきものなく、他は金鑛地に於ける金廠經營の賣店を擧げ得る程度である。康德二年末現在として黑河省公署調査の商賈數を見るに

黑河　雜貨店五四、旅館二四、粮米商一二、金店四、鮮魚商七、估衣七、當舖一、寫眞館二、飲食店五、肉舖三、魚菜店三、澡塘三、理髮店三、計一二八。

瑷琿　雜貨一八、飲食店四、鮮貨商五、葯材商五、旅館三、計三五

とあるが之は主なる商賈のみと觀られる。財政部の調査せる康德元年末現在の商賈數は黑河市誌に於て後述の通りで總數三一

七戸、その内日本人經營のもの二八戸を有してゐる。又黑河の特徴として市内には砂金收買店を兼營してゐる商店二五戸を算してゐるが、之に就いては總論の鑛産の項を參照されたい。

黑河を中心とする沿邊一帶の地は對露交易、金鑛採掘等に依て殷盛を極めた過去を有してゐるので、從て生活程度も比較的高く高粱、粟の如きを常食とせず、主として富錦方面より莫大の麥粉、精米を水運に據りて移入し、其他は哈爾濱拉哈方面より各種綿布、棉花、砂糖、鹽等の食料品及雜貨を移入してゐた。移出に於ては砂金、毛皮、木耳を主として哈爾濱に仕向けてゐた。而して黑河が之等物資の集散市場であつたことは勿論である。と同時に黑河は哈爾濱に對して中繼市場としての重要地位を占めてゐる。國内取引經路は北黑線開通前迄、夏季は江運に據て哈爾濱方面との多量取引を行ひ、冬季は馬車又はトラックで拉哈との取引があつた。當時の兩經路の運賃は畧同額であつたが陸路輸送の捷徑を利用するものが多かつた。而し此の取引系統も北黑線の營業開始を轉機として大變革を來したのである。滿洲事變當時は交通杜絶、兵變、水害、馬占山の不換紙幣發行等に惱み續けた當地方特に黑河の物資缺乏は極點に達し、物價は無限に高騰する狀態となつた。而し省公署の適宜措置、哈爾濱との江運開始、北黑線開通等に因り漸次市價を抑制し、物價は下向き、物資の缺乏からも逃れ得た譯である。此の間注意を惹いた現象は洋酒、ガソリンの如き特殊品は一時ブラゴウエシチエンスクから分派の蘇聯國營貿易局(ゴストルグ)が販賣してゐたので比較的廉價に購入されたことと、江運及北黑線の開始に依て著しく日本商品が躍進したことである。

黑河小賣物價調

康德三年六月現在(單位國幣圓)

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
主食物					
白米	本地米	一斗	三・〇〇
高粱	滿洲産	〃	二・七〇
粟	〃	〃	一・五〇
玉蜀黍	〃	〃	〇・九〇

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
主食物					
麥粉	寶船		一袋		三・〇〇
玉蜀黍粉			一〇斤		〇・四〇
切麵			〃		〇・八〇

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
副食物					
大豆			一斗		一・一五
粉條	細		一斤		〇・二〇
豆腐			一個		〇・〇一
干豆腐			一斤		〇・一〇
葱			一〇斤		〇・一五
蒜			〃		一・三〇
玉菜			〃		〇・一〇
白菜			〃		〇・三〇
韮菜			〃		〇・五〇
萌芽			〃		〇・三〇
唐辛子			〃		三・〇〇
馬鈴薯			〃		〇・一〇
大根			〃		〇・一五
生鮮魚			一斤		〇・二〇
鹽鮭			〃		〇・一六
豚肉			〃		〇・三〇
羊肉			〃		〇・三〇
牛肉			〃		〇・二五
雞肉	大		一羽		一・一〇
雞卵	地	卵	一〇個		〇・二五

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
調味料					
粗鹽			一〇斤		一・三〇
砂糖	㊀	印	〃		一・三〇
醬油	滿人造	上等品	〃		〇・二〇
〃	〃	下等品	〃		〇・一〇
〃	日人造		〃		〇・一五

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
調味料					
味噌			一〇斤		〇・〇五
胡麻油			〃		〇・四二
豚油			〃		〇・三〇
豆油			〃		〇・二〇
醬油			〃		〇・六〇
酢			〃		〇・〇五

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
嗜好料					
燒酒			一斤		〇・二〇
黃酒			〃		〇・二五
紹興酒			〃		
サイダー	三星印		一壜		〇・一五
煙草	粉刀王		一個		〇・〇九
〃	哈德門		〃		〇・〇五
〃	雙鶴		〃		〇・〇五
茶	香片毛峰		一斤		二・八〇
〃	加珠大方		〃		二・六〇

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
燃料					
石油	黃印		一罐		五・三〇
〃	赤印		〃		五・一〇
木炭	白炭		一〇斤		〇・四〇
〃	黑炭		〃		〇・三〇
石炭	塊炭		一噸		
〃	切込炭		〃		
薪	硬		一〇〇斤		〇・七〇

品名	品銘	品質	數量	單位	價格
衣料及靴類					
〃	綿絲	白色桂月	一斤		〇・七二
〃	藍色桂月		〃		〇・七八

衣料品及靴類			衣料及靴類品類		
綿布	白色遼塔	一〇尺	護謨靴	太陽印自由靴	一足
〃	藍色遼塔	〃	皮靴	牛皮	〃
綾子	直貫綾	〃	雜品		
人造絹布	滿洲公子	〃	燐寸	寶山印	一包
楊花	滿洲產	一斤	燒紙	白玉霜	一卷
沓下	洋貨綿製	一足	化粧石鹼		一個
方口靴	牛皮底	〃	齒磨粉	美人印	一包
			洗面器	琺瑯引	一個

〃	〇・九〇	〃	〇・八五	〃	〇・〇七
〃	一・一五	〃	七・二〇	〃	〇・二〇
〃	二・〇〇	〃		〃	〇・一六
〃	一・五〇	〃		〃	〇・一〇
〃	〇・六五	〃		〃	〇・四〇
〃	〇・四〇	〃			
〃	二・五〇	〃			

對蘇貿易は蘇聯ゴストルグ黑河出張所の手で取扱はれ、大同二年は輸出無く、輸入は總額四六、〇〇〇餘圓、主要品は海產物一三、〇〇〇餘圓、砂糖八、〇〇〇圓、綿布七、〇〇〇餘圓、其他元豆、罐詰類、石油、石鹼、鐵板、ベンジン油、窓硝子林檎及び磁器等であつたが、翌康德元年度は日本商品に壓倒されたため輸入は甚だ振はなかつた。在黑河ゴストルグは日本商品躍進の新情勢に鑑み哈府外國貿易代表部の隷屬を離れて哈爾濱通商代表部の直屬に移り、爾來同部から商品の供給を受けつゝ業務を繼續して來たが遂に康德三年二月一日廢止された。

黑龍江を挾む露支兩國の商業史を顧るに、露國は一九〇六年（光緒三二年）浦鹽の自由貿易港を撤廢したが、之より曩一八六二年の露支陸路貿易章程に依り露支國境兩側一〇〇支里の地帶は自由通商を許されてゐたので、浦鹽自由港の撤廢は却て露支國境より直接露領への物資供給を盛んならしめた。其の經路は哈爾濱方面より水路黑河を經てブラゴウエシチエンスク地方に輸出せられたものである。露國は黑龍江方面に於ける自由貿易の益々殷盛なるに鑑み、遂に一九一三年に至り露支陸路貿易章程の廢棄即ち國境無稅通商の特權廢棄を宣言、同時に阿片及酒に關する相互禁止協定を破棄解禁し、直ちに輸入支那貨物に對する課稅徵收を實施し支那側商人に大打擊を與へたので、翌年支那側は沿邊一帶の輿論を容れ兩規定の廢棄を宣言之に對抗した結果、露支通商は黑龍江岸に於て事實上禁止され、玆に自由貿易時代より密貿易時代に移るや、反動的に貿易額は愈々增加し、一九一七年黑河の極盛時を現出した。

其後蘇聯政府の國境封鎖に依り、さしも旺盛なりし密貿易は一路頹勢を辿つて輸出額は激減し、殊に近時對岸に於る稅關警察及ゲーペーウー等の監視峻嚴を極めたると、ゴストルグを設置し食料雜貨の輸出取引を行ふ以外は一切の商取引を禁止したため貿易は全く衰頽した。現在の密貿易品は鹽、石油、燐寸、硝子類、毛皮類、火藥等で小規模に行はれ、二三小匪團が蘇聯商と連絡してゐると謂はれる。

工業　本縣の工業は砂金と對露貿易とに依て發展した。之がため黑河の如きは露國革命以後、酒精、製粉、麥酒等の近代的規模の機械工業が發達した。また黑河省內で電燈廠の經營を見るは本縣のみである。而し乍ら蘇聯は五ヶ年計畫實施後は輸入禁止に依て外來品を驅逐したので、黑河も瑷琿も致命的な打擊を受けて各種工業は衰微に傾き、工場或は副業的雜工業の操業を中止するものが續出した。一方砂金事業も採金の廢頹に依て見る影も無く、黑河、瑷琿の各種產業に影響するとろ甚大であつた。滿洲建國後水運、鐵道の開通に伴ひ黑河の製材業は漸次活況を呈し、製粉業復興の氣運も認められるに至つた。現在も黑河、瑷琿の他に工業の見るべきものは全く無い。

黑河工業狀況（康德元年度）

工廠名稱	種別	類別	實際出資額	職工	生產總額	主要生產品目
恒曜電燈公司	電氣工業	發電業	一九八、〇〇〇元	四三	八三、九七四元	電氣
泰和油房	化學工業	豆油製造業	五、〇〇〇	三	八、六四〇	豆油豆餅
振邊油房	〃	〃	—	—	—	—
卜內門公司	〃	洋鹼製造業	一、〇〇〇	一	一一、七〇〇	洋鹼
福和堂	〃	葯鋪	一、〇〇〇	七	二〇四	丸散膏丹
福盛爐	金屬工業	鐵匠爐	五〇	三	三八四	馬蹄
金山爐	〃	〃	二〇〇	四	四八〇	〃
鴻祥	〃	銀匠鋪	三〇〇	二	九六〇	手工
新美金店	〃	〃	一、九一〇	三	一、五二五	〃

（黑河省公署民政廳調）

黑璦聯合麪粉廠	食料品工業	麪粉製造業	一五〇、〇〇〇	五六	一二八、九二六	麪粉
振邊火磨	〃	〃	—	—	—	
三合湧	〃	豆醬製造業	一、〇〇〇	一一	一二、三一四	醬油業
永大醬園	〃	〃	二、〇〇〇	七	六、四七五	〃
信義隆	〃	粉房	五〇〇	二	九〇〇	粉條
福信合	〃	〃	二〇〇	五	一、四一〇	〃
海泉永	〃	〃	二五〇	一二	一、五八四	豆腐
義合發	〃	豆腐房	四〇〇	二	一、二六〇	〃
振邊酒廠	〃	釀酒工業	八〇〇、〇〇〇	—	—	
振邊燒鍋	〃	〃	五、〇〇〇	六	二、二〇〇	燒酒
鴻興酒局	〃	〃	二、〇〇〇	四	七、〇二〇	黃酒
復海居	〃	〃	二〇〇	二	四、三二〇	〃
源興居	〃	〃	二〇〇	二	三、八三八	〃
龍江比瓦廠	〃	啤酒釀造工業	二八、〇〇〇	一四	二七、四〇〇	比瓦泡水
玉興祥	〃	糖菓製造業	三〇〇	四	二、七〇〇	糖菓
三有火鋸	雜工業	木器工業	五〇、〇〇〇	三〇	三六、〇〇〇	木材器
天合義	〃	〃	三〇〇	一三	六、三八〇	〃
華通印刷局	〃	印刷工業	一、〇〇〇	一〇	二、九〇〇	印刷品
肇興印刷局	〃	〃	一、〇〇〇	一〇	九八〇	〃
鼎新印刷局	〃	〃	一、〇〇〇	五	六、五〇〇	〃
宋記染房	〃	染色工業	五〇〇	五	五、八九〇	染布
福興東	〃	〃	一、〇〇〇	六	九、三六〇	〃
永華興	〃	裁縫	一〇〇	五	五二五	手工
三合皮廠	〃	皮鋪	三、〇〇〇	六	一三、五〇〇	吼拉
廣招工廠	〃	〃	二、一四〇	六	一、五二〇	〃
廣興發	〃	鞋鋪	一〇、〇〇〇	一二	八、四九二	鞋
鴻盛德	〃	〃	二、〇〇〇	一二	七、一七一	〃

此の他日本人經營の銀店一、木廠一、露國人經營の鐵舖一がある。

黑河の工業に於て業種別に主なる工場の營業狀態を見ると次の通りである。

發電業　恒曜電燈公司（株式組織）は發電力一〇、九五〇ワット。康德元年に於ける電燈供給狀況は電線延長四五萬尺、月平均供給戶數一、二五〇戶、點燈數五、〇〇〇燈である。

製粉業　黑璦聯合麵粉廠（萬寶義火磨）は對露貿易の禁止、下流松花江筋の販路消失等の諸原因に依て業績不振の德昌、萬豐義及璦琿の永記火磨が合同したもの。現在は萬寶義火磨のみ操業中で其の製造高は康德元年四四、七二〇甫度に過ぎず、販賣高は二七、四四〇甫度であつた。

造酒業　麥酒釀造の龍江比瓦廠は一日製造能力麥酒二、〇〇〇瓶、汽水八〇〇瓶、康德元年（一—六月）は白麥酒三四、九〇〇、黑麥酒三五、五〇〇、汽水二四、二五〇及各瓦土（クワス）約一萬を製造した。着色酒（酒精に着色糖分を混和したもの）製造の德裕號工場は康德元年（一—八月）約一萬斤（三、五〇〇瓶）を製造。民國十年頃の最盛時には同業者二〇戶、一箇年平均三五—六萬瓶の對露輸出があつたと。黑河上流八滿里に在る酒精工場振邊酒廠は一日最大生產能力（ウォッカ、麥酒、燒酒各工場）八、六二五斤なるも對露貿易禁止、原料不足のため休業し、目下附帶事業の燒鍋、油房のみを營業してゐる。

油房業　振邊、泰和兩油房は康德元年（一月—八月）は何れも好調、前年度一ヶ年分を凌駕する增產であつた。業績次の通り。

	生產高		販賣高		消費糧石
	豆油（斤）	豆餅（枚）	豆油（斤）	豆餅（枚）	
振邊	一三、九二〇	八、九八八	一五、五四〇	七、四五五	五、八八五（市度）
泰和	七、二四四	一一、二五九	四、八三九	五、一二二	三、五五五

煉瓦製造業　大陸窯業會社（本社は大連）は一ヶ月平均生産能力煉瓦九〇萬個、土管九〇〇本である。

瑷琿主要工業狀況

（康德元年黑河省公署民政廳調）

工廠名稱	種別	類別	實際出資額	職工	生産總額	主要生産品目
永濟電燈公司	電氣工業	發電業	一四、〇〇〇円	五	四、五四六円	電氣
復隆泰	化學工業	豆油製造業	五、〇〇〇	一〇	一三、〇四〇	豆油豆餅
德豐泰	金屬工業	鐵工廠	五〇〇	三	二、一四五	鐵器
永吉木鋪	雜工業	木匠鋪	七〇	五	一、一六〇	木器
福合盛木鋪	〃	〃	七〇	一	八三四	〃
長順永	〃	〃	一〇〇	一	八七六	〃

金融　黑河省の金融機關は黑河の他見るべきものは無い。對露貿易と砂金洪水時代に現出した黑河の極盛時（一九一八—二四年頃）の黑河には黑龍江省官銀號はじめ五大銀行の分支行が設置せられ何れも堅實な營業振を示し、庶民金融機關としては黑龍江省官銀號系の同濟當のほか民間側の同順當、惠民當が存在し一時は年貸出額一箇年二一萬圓を超える繁昌を見せた。其後採金の減少、對露貿易の禁止に遭ひ、殊に滿洲事變當時馬占山軍の掠奪に災ひされ全く衰微を來し、建國後、黑龍江省官銀號、東三省官銀號及邊業銀行の三行は滿洲中央銀行に包含せられ、他の中國、交通兩銀行は支那本國に引揚、最近中國銀行は當地方に有する自行舊債權約二〇萬圓を整理する爲行員を駐在せしめて居り、又哈爾濱福順德銀行は代理店を設置し中國各地向送金事務の取扱と僅少貸付業務とを行つてゐる。當舗（質舗）は其後大興公司が同濟當、惠民當を回收し康德元年七月廣信當と稱して開店、業績良好で康德二年下半期（七—十二月）の當入金額八一、〇〇〇圓、贖出九二、〇〇〇圓、現在貸放額約四〇萬圓である。

銀行、當舗の他に特殊金融事業として商工貸款及春耕貸款がある。之は政府の農商工民救濟のための貸款で兩者とも康德三年一月末日を以て貸放を打切つた。前者は馬占山事件後極度に疲弊衰微せる黑河及瑷琿の商店に對し政府は中央銀行黑河支を經て貸放せしめたもので當時の瑷琿縣城の原放額は一二戸二一、〇〇〇圓、回收額八、三三五圓、黑河は原放額一三戸二九、〇〇〇圓で全部回收を終つた。春耕貸款は瑷琿縣の大同二年度原放額九二、六九二圓、（一、三六五戸）回收額九二、五四二圓で、康德元年度原放額九二、二九〇圓、（一、三五四戸）回收額七、八七六圓である。

滿洲中央銀行黑河支行營業狀態（康德二年下半期）

月別	預金 國幣	預金 金票	預金 國幣	預金 金票	貸出 國幣	貸出 金票	受入 國幣	受入 金票	拂出 國幣	拂出 金票
七月	五四五、六二八・〇三円	三〇、四〇四・八一円	二一、九三三・二〇円	—	六〇六、六三三・五二円	一五、九一三・八〇円	二二三、八〇二・五四円	五、〇〇〇・〇〇円
八月	八七七、二九七・二八	二〇、五九八・九四	二九、四二〇・四二	—	六五五、四三六・九四	二二、三三・五〇	三三七、〇八〇・七三	五、〇〇〇・〇〇
九月	六三三、八八一・八六	一四、九八六・九九	二八、三二六・二八	—	七三七、九五三・一八	三〇、二八四・〇〇	二四二、〇〇七・七八	二、〇〇〇・〇〇
十月	六八八、八〇三・五七	三七、三二一・四三	六六、六五〇・八三	—	六二四、一六五・九六	二五、五三六・四四	三四六、九六四・〇五	—
十一月	三八八、三九一・九一	四〇、九六九・六三	三九三、四八八・九三	—	五三一、八六六・二三	一八、四九九・四五	一七三、九七六・九七	一、〇〇〇・〇〇
十二月	四五四、四三・〇六	一一、〇八八・九六	九七、四六五・一四	—	七二〇、四四一・七三	八、八八一・〇二	一九七、三四〇・三一	—
合計	三、三六八、四四四・七二	一五五、三七〇・七六	六三三、二六四・八〇	—	三、八六六、四九七・五五	一二、四三四・二二	一、四〇一、一四二・三七	一三、〇〇〇・〇〇

（六）邑　鎮

黑　河

北境の古都黑河は現在の標準名稱となつたが、從來幾種かの名を以て稱ばれ、即ち黑河（ヘイホウ）の他にサハリヤン（露名）、海蘭泡（滿人間に稱ばれ萬國協定による電報通信名）、大黑河、江南（地方的俗稱でブ市に對して南に在るによる）

と稱ばれてゐる　東經一二七・二九、北緯五〇・一五に位し我樺太國境線の稍北方に等しい。

一八五八年瑷琿條約締結の結果黑龍左岸は露領に歸し、アムール州の州都としてブラゴウエシチエンスクが建設された。これ迄清朝勢力の根據地は瑷琿であつたが、玆に於て露に對抗する爲對岸サハリヤン(黑河)に護路軍司令部が置かれた。これが今日の黑河の萌芽である。一九〇六年浦鹽の自由港撤廢に伴ひ、南滿及江岸物資の露領輸出中繼地たる地位を占め、漸次政治的經濟的中心たるの地位を獲得した。殊に歐洲大戰當時は極東露領との貿易殷盛を極め、その年額大洋四、〇〇〇萬元といはれ人口四〇、〇〇〇と稱せられた。而して此時代(一九一四—一九)を最盛期として蘇聯貿易杜絶し、奥地產金の衰微、洪水、露支紛爭、滿洲事變等引續いて黑河のみならず沿岸都市はすべて沒落したが、最近治安の恢復北黑線の開通と共に再び前途の曙光を認めてゐる。

市街は黑龍江に臨み東西八條、南北七條の大街より成り、露式の大建築多く露西亞氣分濃厚である。黑河警察廳管内の康德二年十月末現在の戶數二、八九六、人口一一、六三五。之を康德元年十二末現在民政部調査科調に比較すると二六七戶、四三七人の增加となつてゐる。前者の統計による民族別人口次の如し。

	總人口	漢人	滿人	回族	日本人 內地人	日本人 朝鮮人	歸化	無國籍	蘇聯
男	八、〇七五	六、一九三	一、〇六三	二一五	四六六	八三	—	四九	六
女	三、五六〇	二、四二三	五二三	一一六	三八七	五四	一	四二	四
計	一一、六三五	八、六一六	一、五八六	三三一	八五三	一三七	一	九一	一〇

尙、康德三年七月末現在の財政部總務司發表に依ると總人口一二、〇九六、滿人一〇、六八四、日本人一、一五四、外國人二五八である。

日本人は大正初年頃から二〇〇人ほど在住し、同六年西比利亞出兵に際し第七師團騎兵隊が對岸ヅ市に司令部を置くや三〇〇人に增加、その內特殊婦人は一〇〇人に達した。而し翌年日本軍の引揚、領事館の撤廢、特殊婦人の引揚命令に依つて料亭も影を潛め、黑河の黃金時代又も盛返したが大正十三年には五戶三七人に減少、滿人の妻となつて黑河の他、漠河、呼瑪、鴎浦、奇克、烏雲等に散在した。朝鮮人は農業を主とし洗布業に從事してゐるもの八人と謂はれてゐる。

黑河の行政史を見るに、一九〇八年對露交涉局に代て黑河都統府が設置せられ、一九一二年同府の廢止に依つて其の所管事務は瑷琿直隸廳及兵備道台に移管され從來の道台は觀察使と改稱し黑河に移駐、一九一六年再び改稱して道尹と稱せられた。一九一九年黑河鎭守使及哈爾濱稅關瑷琿分館、露國領事館等が設置せらるるに及んで黑河は瑷琿の繁榮を奪ひ政治、經濟、交通の中心地となつた。一九二七年市政を施行し滿洲建國に依て市政籌備處は廢止、大同二年(一九三三年)省公署駐黑辦事處を特設し沿岸十縣の行政及對蘇地方的外交に當らしめ、翌年行政區劃改革に依り黑河省公署が設置せられたのである。

公私機關　省公署、縣公署、滿洲國外交部辦事處、混成第十五旅司令部、中央銀行支行、哈爾濱稅關黑河分關、黑河國境警察隊、黑河地方警察學校、國道局黑河出張所、阿片專賣分署、國境檢疫所、稅捐局、黑河林務署、鹽倉、承審辦事處、監獄、齊齊哈爾鐵路局自動車營業所、哈爾濱航業聯合局埠頭事務所、哈爾濱水運局出張所、同航政局黑河分局、消防隊、衞生隊、瑷琿縣農會、同商會、電報局、郵局、滿洲採金會社黑河總局、硝礦局、協和會辦事處、市立病院、貧民院、滿洲航空會社出張所。日本側、齊齊哈爾領事館出張所、同警察分署、國際運輸出張所、朝鮮人居留民會、其他團體には白系露人避難民會、興安、逢源等十二金廠の合同組織に成る鑛業公司、黑河風船同業會、旅黑山東同鄉會、河北同鄉會、同善社、黑河房產聯合會、山西會館。

教育機關としては縣立初級師範學校、同第一初高兩級小學校、同第二女子初高兩級小學校、市立小學校、民衆學校、旅黑山東同鄉會小學校、協和會附屬日語學院、幼稚園及日本小學校等があり稅關附屬圖書館もある。文教團體には滿洲帝國教育會黑河省分會、瑷琿縣支會、瑷琿縣初級師範童子團、滿洲帝國體育聯盟黑河省事務局等がある。市民の娛樂場として支那劇場二箇所あり之は對岸蘇聯領在住支那人の消費地たらしむるための一の吸收策として開設されたものである。

社會施設は旣述の通りで他に特別のものは無い。協和會は龍江省事務局管下の黑河辦事處を置き併せて日語學院を開いてゐ

るが、黑河省城には黑河辦事處管下の軍界分會、商業分會、勞工分會及市民分會がある。

黑河は瑷琿縣物資集散の商業中心地を成すばかりでなく、黑河省の中心地でもある　黑河住民の生活程度に就ては商工業の項に於て既述の通りである。商戸の營業種別（康德元年末現在財政部調）は次の如く、又工業狀態及金融に就いては商工業の項を參照。

雜貨三二、粮米舖三〇、當舖一、鮮貨舖四、金店六、銀樓二、銀局五、估衣四、客棧三〇、照像館二、帽舖三、鏡舖一、飯館四七、羅圈舖四、茶館五、切麵舖三、肉舖八、點心舖六、理髮所一三、澡塘三、成衣局一七、洗衣局三、畫舖二、小舖三七床子一六、舖子二、計二八六

日本商戸　雜貨商三、藥種商一、洋品店一、理髮店一、菓子商二、食堂六、料理店七、カフェー七、計二八

露國商店二、獨逸商店一

瑷琿　黑河より三三粁東方に位置し、東北方に開けた草原は黑龍江と鐵道とに挾まれ西方は小興安嶺の連山に接してゐる。驛東南には約二・五粁を距てて東崗子及西崗子の兩部落があり前者は戸數五四、人口四五〇、初高兩級小學校一、後者は戸數四六、人口三二八と謂ふ。

歷史で著名な瑷琿は瑷琿站東北方約一三粁黑河下流水路三七粁に在る。瑷琿條約締結の副都統府の燒跡（一九〇〇年北清事變の際露軍に燒棄された）には今では中學校が建てられ校庭に松の古木の下に紀念碑があり、寂寞たる市街中央の鐘鼓樓と諸官廳の廢屋が當時の殷盛を偲ばせる。

戸口一、二六一戸、六、四七一人內日本人四九人（鮮人二五）

主要機關

國境警察隊分駐所、滿洲國軍隊、警察署、海關分卡、稅捐局分卡、電報局、庫瑪爾路鄂倫春協領公署、

教育機關

縣立瑷琿中學校、縣立瑷琿女子師範學校、縣立第二初、高兩級小學校、（教師男七、女四、生徒男一三四の內中學生三四、女一六九の內師範生二七）魁星樓（教育奬勵）オロチョン人の小學校は廢校。

商工業共に見るべきものは無い。商業は雜貨商一九戸、日本人經營のものには旅館一戸、料理店一戸のみである。當地は遜河方面との取引の要衝である。工業は油房二、發電業、鐵工場、煉瓦製造所各一がある。

油房業の主なるものとして福隆泰油房は製造高の五割以上を黑河其他に移出してゐる。周和泉油房は殆ど現地販賣で現在は振はない。瑷琿永濟電燈公司（株式）武市から輸入した獨逸製發電機を使用し、配給電線八〇〇丈、電燈三〇〇餘燈、大陸窯業黑河支店（本社は大連）の工場は一ヶ年製造高煉瓦十七萬個、土管一五〇本程度である。尙、商工業の項參照。

山尖　北黑線の寒驛、黑河の次站で北安起點二八六・九五粁、丘陵地帶で近くに清冽な流れがあり風光は佳い。

黃金子　北安起點二七三・九五粁、驛東方六粁に在る部落揮三道溝は戸口一四三戸七五四人、瑷琿縣第八初級小學校が在る

小樺樹林子　黑河下流水路約八六粁、霍爾謨津迄同一〇粁。戸數二三、人口八三、大同元年には薪材四〇〇サージェンを出したが鐵道工事のため馬車不足となり同二年には二〇〇サージェンに半減した。大車（三輪車）一四、花輪車（二輪車か）一を有す。

大廠張樹子　奇克との縣境に近い黑龍江岸の部落で、戸口六三戸、二九一人。雜貨二戸、黑河瑷琿と取引を行つてゐる。江義哈灘を中心として漁業が盛である。鮭の漁期は秋分から結氷期に亙る約二〇—三〇日位。鹽鮭は一甫度—五—六圓、生鮭三圓、當地の漁夫は高さ十二尺長さ五〇〇尺の網を有し一日五回の漁で一〇〇尾の鮭を獲、漁期中一回に八〇尾獲ることあり。交通具は大車九、花輪車四。

四季屯　黑河から約八〇粁下流附近に在る。戸數五八、人口三〇一。既耕地三二〇餘晌に達するが康德元年は炭疽病猖獗のため馬匹減少し、また鐵道工事に使役（三、〇〇〇頭は炭疽病で斃死したと）されたため耕作面積は少かつた。農作物に大麥、燕麥が多く次に大豆、小麥、粟、包米等の順位である。交通具は大車一五、花輪車八。墨拉干車一。

下馬廠　黑河より下流六六粁の江岸。黑河まで約八〇粁。戸數一二〇人口五九六。黑河上流の上馬廠に對して下馬廠と稱す。また嘗つて附近に放牧地があつたのでこの名がある。

耕地四一〇晌のうち大豆、粟、包米等各一〇〇晌、雜貨店一、家畜及交通具次の如し。

家畜　馬一二〇、牛五〇、豚八〇、驢四、鷄一〇〇、家鴨及鵞鳥四〇

交通具　三輪車三〇、小船二四、橇三〇

大五家子　黑河より約六〇粁、戸數一四八、人口七五二、商戸四、耕地三〇五晌のうち包米、大豆、小麥、粟、迷子、燕麥等が多く耕作される。工業は油房一、燒鍋一が在るけれど共に休業してゐる。

家畜　馬一二三、牛四〇、豚一五〇、鷄三〇〇

交通具　二輪車二五、橇三九、小舟五

上馬廠　黑河上流約二〇粁、戸數七八、人口二九八、宣統元年頃開けた部落で、熟地二五五晌、燕麥、小麥が多い。雜貨店一あるも名ばかりである。

家畜　馬七五、豚一五〇、鷄二〇〇、家鴨二〇

交通具　二輪車二〇、橇二〇

張家地營子　黑河上流四五粁。碼頭前面に島が横り、部落は碼頭から二滿里離れてゐる。戸數一〇四、人口四四七（ロシア女六）雜貨商四、康德元年熟地三八三晌のうち作付面積は小麥六〇晌、蕎麥二五晌、小麥、大豆、包米各二〇晌等、小麥の成績良好で馬鈴薯の產出も多い。探金調查隊駐在し、旅店一、鐵爐匠二等がある。

家畜　馬一二七、牛三一、豚八〇、鷄三〇〇

交通具　大車五二、橇四五

二道卡　黑河上流七四粁、蘇聯セルゲエフカ（戸數約一〇〇戸）は對岸に在る。戸數七、人口四一（ロシア人二）、農耕地一二晌あるも土地低く毎年水害を蒙る。木耳年產二〇甫度、源利金廠は當地の西南四〇滿里にある。交通具は四輪車二、橇二小舟三。

滿洲屯　黑河上流八六粁、蘇領ビビコフスキーは對岸約一・五粁下流に在る。戸數二四、人口七八。

三道卡　黑河より水路一三〇粁、陸路二〇〇粁とあり、別に三卡又は三卡屯と稱す。戸數七九、人口四二六、（ロシア人女二）。農業は熟地二三五晌の作付面積小麥八五、燕麥四〇、包米三〇、粟、大豆各二〇、迷子一〇晌である。薪材年二〇〇サージェン、木茸年一〇〇布度を產す。黑河、呼瑪、嫩江に通ずる道路があり、嫩江道路は夏季は道路泥濘み大車を通じない。一台四人乘二頭立の橇を走らせると呼瑪迄二日黑治迄三日を要し、運賃は一日一人四圓、雜貨商四、理髮店、木商、燒餅舖各一あり。

六、龍鎭縣

（一）自然及住民

地勢　璦琿縣の南部に連り、黑龍江岸と穀倉地帶とに狹まれ、小興安嶺の餘脈を以て遜河、烏雲兩縣にも接し、西は嫩江縣である。縣の大部分は波狀形高原台地狀を成し、東北の小興安嶺支脈のほかに東南は木庫山嶺、北西に旺安山嶺が橫はり南に沃野が開けてゐる。本縣第一の大河鎭清河は縣內各山嶺に源を發する小河を合せ其の水域は本縣の大部分を占め黑龍江の支流遜河に注ぎ、南部を流れる訥謨爾、呼裕爾の兩河は嫩江に注いでゐる。全面的に南より北するに從て波狀形高原の高度を增し底部は濕地多く平野は甚だ狹い。

氣象　大陸性の氣候ながら土着農民は五風十雨と稱し、北滿としては理想的好適地とされてゐる。氣溫は夏季最高四〇度、冬季最低零下四五度。晩霜は五月上—中旬、初霜九月上旬で、晩霜の關係で大豆の幼芽を害することが多い。

雨季は六月下旬—七月下旬、特に七月下旬は豪雨多く小麥の成熟を害ふことが多い。加之七、八月の雨季に於て河川氾濫し農村に甚大なる被害を與へることが屢々で特に訥謨爾河に其例が頻繁である。

住民　大部分は漢民族に依て占められ滿洲事變以後北黑線建設に從ひ日本人の來住頗る多く北安鎭を中心として辰清其他鐵道沿線に進出してゐる。人口移動は激しい。康德二年末現在の民政部地方司發表に依ると縣人口は

面積（平方粁）	戶數	人口			一平方粁當人口密度
		男	女	計	
一〇、九〇二	四、六八九	一三、六七一	九、四二一	二三、〇九二	二・一一

となつてゐる。之を民族別にすると滿漢人四、〇二一戶、二一一、三六六人（男一二、七一四、女八、六五二）、日本內地人六〇二戶、一、四七二人（男八二〇、女六五二）、朝鮮人四九戶、二〇四人（男一一九、女八五）、其他一七戶、五〇人（男一八、女三二）となる。人口稀薄、縣城北安鎭のみで總人口の九〇％以上を占むる有樣である。

（二）政治及治安、文化

政治　清朝末期漸く北方開發の氣運熟し、龍門設治局を龍門鎭（現在の龍鎭北方六〇滿里）に設置し移民招致に力を用いた。其後數年にして交通の關係から龍鎭に移轉せしめ、爾來開發事業は順調に進捗し克山、海倫方面より物資輸送道路の開通を見て龍鎭は急速なる發展を遂げ、附近にも群小部落が相次いで發生した。

民國十七年頃より北滿各地に馬賊の小集團が跋扈するや馬占山は之が討伐司令として龍鎭に本部を置き地方討伐に努め治安稍恢復を見たが、一方農民は討伐軍の苛酷なる軍費負擔の爲め寧ろ馬賊以上の被害を蒙り、加之黑龍江官吊及大豆相場の暴落等の爲め植民事業も一頓挫を來し、從前の移住者も他地に轉出する有樣であつた。

建國後黑龍江省に屬し康德元年省制の改革に依て龍江省の管下に入り縣公署は龍鎭より北安鎭に移されたが、其れ迄に馬占山軍の背及、北滿の大洪水等で農民は極度に困窮、政府は之が救濟のため春耕貸款、商工貸款、水災救濟、森林伐採等々の策を講じたが未だ恢復の域に達しない。

民政部地方司發表の龍鎭縣財政次の如し。

康德三年度歲入出豫算

（單位圓）

歲入	經常部						臨時部	
	總計	財產收入	使用料及手數料	交付金	雜收入	縣稅	其他	計	前年度繰越金	國庫補助金	計
七八、〇九六	二、三〇〇	一、八五〇	三〇〇	三、一五〇	三三、四六八	—	三〇、〇六八	—	四八、〇二八	四八、〇二八

歳出	總計	經常部							臨時部	
		祭祀費	公署費	警察費	土木費	教育費	社會事業費	衛生及病院費	其他	計	土木費	計
	七八、〇九六	四〇〇	二五、七二五	三七、七三〇	六〇〇	七、八三九	一八〇	一〇一	四、〇二一	七六、五九六	一、五〇〇	一、五〇〇

康德元年度豫算は歳入四八、〇三三圓(內國庫補助額二五、四五六圓)、歳出五八、九四四圓不足額一〇、九一一圓で、建國以來財政に窮狀を示してゐる。

治安 龍江省管下の警務當局と第三軍管區隷下の軍隊は日本軍隊の援助を俟ち協力して治安維持に當つてゐる康德二年十一月末現在に於て縣警察は警察署二、分駐署三、自衛團員約九〇〇、保甲制度實施に依て二保三三〇甲四二三牌を組織、此の保甲自衛團は一二團一、四七二名である。

縣東部一帶の山林地帶は不毛の高地にして物資に乏しく人煙亦稀薄の爲め匪賊の橫行を殆ど見ないが、克山、通北、德都を結ぶ三角地帶は土地肥沃資源に爲み此處に橫行する匪賊に依て本縣も脅かされてゐた。現在は僅かに小匪の蠢動を見るに過ぎぬ。

教育 小學校は北安鎭、龍鎭に在り、康德元年十二月末現在に於て初級一、高級二、教員一二、兒童數三六三、此のほか寺小屋式の私塾が在て文字を識れる者に子弟の教育を託してゐるに過ぎぬ。北安鎭に日本人小學校一あり他には文教團體も見られない。

宗教 龍江省は古くより各派の宗教進出し華やかな佛教文化を現出したが本縣は頗る寂しい。また民度低きため迷信に類する者が多い寺院は殆ど北安鎭に在り、左表の外に回教徒二〇〇、在裡教九五と謂はる。

寺廟及宗教

(康德二年十月末現在龍江省公署教育廳調)

名稱	宗教統系 所屬宗教	宗教統系 所屬派別	成立年月	布教者	信教者	摘錄
大同寺	佛教		大同二年	一	四四	禮字三井に在り
紫霞宮	同		民國十九年	一	一二九	勸字二井に在り
大蓮寺	同		同十一年	一	六〇	訓字九井に在り
中蓮寺	同	慈恩宗	大同元年	一	一六	
理教聯合會龍鎭分會	理教		民國十三年	一	八〇	
天主堂	基督教		康德二年	一	三〇	
基督教會	同		民國二年	一	四〇	
龍鎭山北安寺	佛教	日蓮宗	昭和八年	一	二六	
北安教會所	同	淨土宗	同九年	一	三一	
眞宗東本願寺	同	眞宗火谷派	同	一	三一〇	附設報德幼稚園
財團法人護國	同	同	年			
山大慈院觀音山	同	臨濟宗	七年	一	六五	

社會 匪禍、水災の被害多大のため建國後政府より救濟資金下附せられたることあり。社會事業團體には康德元年一月北安鎭商會の設立せる民營の北安鎭救濟院を唯一のものとす。

康德二年八月民政部令第一四號を以て義倉管理規則公布後、北安鎭に義倉が設立せられた。最少貯畜數量一、五〇〇石。

衛生 當地方の飲料水は南滿各地と比較して甚だしく質惡である。細菌聚落數は大連、奉天、新京等に於て一立方センチ中五個なるに北安鎭では或る井戸の檢査に依て一センチ中五、一六四個といふ驚くべき結果の報告で、龍鎭に於ても二—三、〇〇〇個を含有すると云はれ、惡疫流行は之等惡水に依て媒介されることは云ふ迄もない。獸疫として馬の鼻疽、癩病或は豚コレラ、豚疫等あり、衛生狀態は甚だ不良である。

醫療機關としては北安鎭に最近日本人醫院三が開業、康德三年十月一日より哈爾濱鐵路醫院は北安に北安分醫院を設置（濱北線揚家より黑河碼頭線を診療區域とす）、同じく孫吳診療所は孫吳に設置（北黑線辰清より黑河碼頭線迄、但し辰清を含まず）した。此の地方では衞生施設を見受けない。

（三）資　源

農產　本縣は政治的重要地で無かつたため若干のオロチョン人が山間に棲むほかは民國に至るまで廣漠たる荒地で開墾事業の歷史は新しい。民國以後黑龍江支那政府が黑龍江省淸丈規則、同植民規則、同招墾規則を公布し、特に本縣に關しては細則的規約を設け積極的移民吸集策を採るに及んで南滿、山東、直隸方面より移民の來住多く、之らは會社或は公司による半封建的な形容下に在つて開墾に從つた。斯かる開拓過程の形骸は今にして認められ自作及び自小作を以て絕對多數を占める現狀を招來した。本縣地名に天宇一井より天宇一四井までの同名の地名があるのも其の根跡である。地主作小作人の比率は六〇％にして、土地所有狀態を見ると本縣のみならず本調査區域各縣孰れも南滿地方と異り、本縣の土地無所有農家は全農村中僅かに三四％、最大所有者は一七〇晌、一〇晌未滿の小土地所有は他縣（璦琿、奇克、烏雲、遜河）の四五—四九％に比し三％に過ぎず土地細分化の程度は非常に低い。北安鎭附近農村分散的で集團を形成するものが少い。

主要農作物は大豆、粟、小麥、包米である。

縣面積竝土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地 既耕地	可耕地 未耕地	可耕地 計	不可耕地	總面積ニ對スル比率 可耕地	總面積ニ對スル比率 不可耕地	總面積ニ對スル比率 既耕地	總面積ニ對スル比率 未耕地	可耕地ニ對スル比率 既耕地	可耕地ニ對スル比率 未耕地
一〇、九〇二平方粁	一五八平方粁	四、六五八平方粁	四、八一六平方粁	六、〇八六平方粁	四四・一％	五五・九％	一・四％	四二・七％	三・三％	九六・七％

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高	備考
大豆	二、〇九〇畝	一、九九〇瓲	
其他豆類	三〇	二〇	
高粱	一四〇	一四〇	
粟	一、四四〇	一、二八〇	
玉蜀黍	五〇〇	六五〇	
小麥	四二〇	二九〇	
水稻	—	—	
陸稻	—	—	
其他雜穀	一、七九〇	一、五二〇	
計	六、四一〇	五、八九〇	

特用作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高	備考
棉花	—	—	
阿片	—	—	
煙草	一一畝	四瓲	
線麻	一五	九	
靑麻	—	—	
芝麻	—	—	
蓖麻	—	—	
落花生	—	—	
瓜子	—	—	

種目	作付面積	一晌地當リ收穫高	收穫量	一石當リ時價	收益高
蔬菜					
馬鈴薯					
甘藷					
果樹類					
藍靛子					
蘇ノ他					
計	二六			二三	

五〇晌を耕作する農家の收支　（大同二年）

收益合計	大豆	小麦	雜穀	蔬菜	養豚	燃料（柴）	自家消費高ヲ控除セル殘部	自家用トシテ消費ス
	二〇晌	一五	一〇	五				一五圓
	二・五石	二・〇	四・五					
	小作料殘	差引殘						
	一五	三五	一八・七五	四五				
七一〇・〇〇								一七五・〇〇圓
								四五〇・〇〇
								一五・〇〇
								三〇・〇〇
								四〇・〇〇

種目	內譯	支出高
種子代	臨時傭工勞賃ヲ含ム	
常傭工勞賃	一箇年分給與ヲ含ム	
耕作用	馬三、牛二	
家畜飼育費	一箇年飼料豆粕（一枚二角トシテ）二二〇枚	五〇〇・〇〇圓
		一〇〇・〇〇
		四四・〇〇
國土地並ニ地方稅	一箇年收益高ヲ六二五元ト見積リ	三七・五〇
出產稅	家人一名年十元トシテ四人分	三一・二五
服裝費	石油代	四〇・〇〇
燈用	主ニ食糧代一箇年消費量一〇〇斤トシテ	五・〇〇
調味料	農具購入、家屋修築費其ノ他	一五・〇〇
雜費		三〇・〇〇
支出合計		二〇八・七五

地價　（大同二年現在）

區別	既耕地	未耕地	備考
上地	四〇圓	三〇圓	畑地單位「一晌當リ」
中地	三五	二五	
下地	三〇	二〇	

春耕資金　（康德二年四月末現在調）

年度	貸付額 本年度新貸付額	前年度貸付殘額	計	貸付戶數	回收額	貸付殘額
大同二年	四七、六一圓		四七、六一圓	二五〇戶	二、四八〇圓	四五、一三一圓
康德元年	一一、五五一	四五、一三一	五六、六八二		三八五	五六、二九七

畜產　本縣は穀倉地帶に接近する南部に產業が盛んである。而しながら其數は大したものでない。南滿に反して馬が牛より多いのは馬が邊陬の地方の有力な運輸機關だからである。

家畜數

（康德二年九月一日現在　實業部調査）

種別	數量
牛	七八五頭
馬	三、五五七
騾	二三一
驢	四〇
羊	一二二
豚	八、六一七
計	一三、三五二
雞	七、四二八羽

林産　本縣の森林面積は縣面積の三割を占め、その大半と通北、嫩江兩縣の森林は北安鎮林務署の管轄區城に屬し、一部は黑河林務署の所管となつてゐる。龍鎭北方約三〇滿里附近から小興安嶺一帶は原始林で國有林の他に民間會社として北滿公司が遜河船口、鄭家窩堡に事務所を置き鐵道工事用材を供給してゐたが現在の狀態は未詳である。北安鎭林務署の發表せる出材量は康德元年度五萬石、同二年度六萬八千石となつてゐる。

樹種は白樺、黑樺、柞樹、楡、白揚、柳、紅松を主とし落葉松は餘り多くない樣である。建築用材には紅松のみと云て良く民家では白樺を用ひてゐる。白樺は製炭用に良く其他の樹種は殆と薪となり、鐵道沿線に薪の出荷が多い。運材は訥謨爾河の流筏が僅かに行はれ、交通不便のため荷馬車輸送は頗る高率である。薪材價格は一丈拌子一（長さ二尺五寸の薪の高さ五尺横一丈の推積量）一を單位とし、尺は凡て支那木尺を用ひ日本の約一尺四五寸である。木耳に關する資料は甚だ少い。

森林狀況

（康德元年現在　實業部調）

森林面積	立木蓄積量（立方米）				
	針葉樹	濶葉樹	計	主ナル樹種	用途	出廻量
平方粁 三、一毛	九、四七一、〇〇〇	三、四六二、五〇〇	四八、九三三、五〇〇	—	—	—

鑛産　各種鑛産物あるも産出量は何れも少い。康德元年十二月より齊齊哈爾鑛業監督署の管轄區域に在り今後鑛業開發に積極策を講ずるであらう。砂金の天德金鑛は出願中で未だ工事開始に至らない。

鑛區狀況

（康德元年現在）

種別	産地名	位置	推定埋藏量	品位又ハ品質	産出高	經營者其他記事
砂金	朝陽滿漢溝	龍鎭市街ノ北西一六粁				楊來慶
〃	克洛河滿溝	齊々哈爾ノ北東約二〇〇粁五大蓮地附近				郎岳五
〃	喀奇合溝					黑河、逢源金廠
〃	傳格里溝					〃
銀鉛	訥謨爾河流域					
硫化鐵	訥謨爾河					石油噴出ノ噴アリ
石油	西站東方四粁地點					
硫黃	烏雲和爾冬吉山					
石村	鳳凰山	大蓮寺西方約三支里		尺五寸角丈餘ノモノ		
〃	二龍山	大蓮寺東方約一〇粁		閃綠岩		
〃	烏雲和爾冬吉火山	二龍山ヨリ二〇支里縣城西方		地質玄武岩？硫黃泉？		
溫泉						

（四）交　通

道路　本縣は海倫及齊齊哈爾兩方面より黑河に中心を置き滿蘇國境に通ずる中間地域を占め且河川多きも舟航に利用し得るもの無きため道路建設は早くより行はれ四通發達の觀あるも今は荒廢に歸したものが相當ある。鐵道敷設前には車馬の往來が殊に旺盛であつた。總論交通の部參照。

北安鎭—瓊琿站國道　幅員〇米　延長〇〇〇粁

海倫—黑河の舊道に沿ふ北黑線建設道路を改修して國道に利用したもので、本縣を南北に縱斷してゐる。トラック馬車は四季通行可能。

龍鎭—遜河道路　延長　約〇〇〇滿里

一九一六年建設せる海倫—奇克特道路の一部で北黑線建設道路に一部を利用してゐるので北安鎭—瓊琿驛國道と重複し辰清（舊二站）より岐れて遜河縣の西端を貫き瓊琿縣吳家窩棚より東方に急折して遜河に向ふ。

辰清—霍爾謨津國道　幅員〇米　延長約〇〇粁

海倫—黑河四道を改修した二等道路で、北黑線辰清驛より北上し黑龍江岸の霍爾謨津に達するもの。康德二年未完成豫定。

龍鎭—通北道路　延長〇〇〇滿里

之も海倫—奇克特舊道の一部を成し、烏魚鎭、孫家店等を經由してゐる。本道路は嘗て克山道路と並んで地方物資の輸送道路として重要地位を占めてゐたが、海倫—克山鐵道開通後は其價値を失ひ現在殆ど利用されず、之に代て克山道路及北安鎭—黑河國道が其價値を獲るに至つた。

龍鎭（舊）—克山道路延長〇〇〇滿里

本道路も亦、從前は克山との穀物輸送道路として寧ろ海倫街道に優る經濟的價値を有してゐたが、海倫—克山間鐵道開設後は、之亦、其重要性を失つた。沿道主要部落區間距離（單位滿里）次の如し。

（削　除）

北安鎭—克山道路　延長〇〇〇滿里

齊北線に沿ふ舊道で、齊北、濱北兩鐵道の連結前は兩地間の貨物輸送道路として車馬の往來盛んなりしも、兩鐵道連結後は著しく其の價値を減少し、僅かに地方物資輸送と沿道住民の馬車來往に利用されてゐるに過ぎない。馬車、トラックは四季通行可能で私設營業自動車は不定期運轉を見る。沿道主要部落、區間距離（單位、滿里）次の如し。

（削　除）

北安鎭—德都道路　延長〇〇滿里

殆ど利用價値無き舊道である。

龍鎭—六馬架道路　延長〇〇滿里

右と同樣の舊道である。

北安鎭—劉永屯（縣內）道路　延長〇滿里

馬車の通行は四季可能なるも營業自動車の運轉無く、トラック通行は不能。

北安鎭—糧臺屯(縣內)道路
右　同
龍鎭—雙龍泉(德都縣)道路　延長〇〇滿里
春、冬二季のみ馬車通行可能、トラックは冬季可能。
孫河船口(縣境)—德都東鄉旭日屯道路　延長〇〇滿里
王司令窩堡—德都東鄉俊福屯道路　延長〇〇滿里
北安鎭—德都東鄉王家油房道路　延長〇〇滿里
以上三者はいづれも四季を通じて馬車通行可能と謂はるるも索倫馬車の如き輕快なものを使用するなるべし。トラックは冬季通行可能。

尙、康德二年度土木事業中、北安鎭——德都縣城の道路工事は龍江省公署直營として架橋五箇所を施工、康德三年度中に完成の豫定、北安鎭城內の簡易マカダム式道路工事(延長一、六〇〇米)は完成した。また堤防築堤工事は訥謨爾河の沿岸孫家船口に堤防築堤工事を施工中である。

車馬　本縣は家畜數に於ても推知せられる如く馬が非常に多い。之は交通上に使用されるものが多いからで海克線建設以來殊に北黑線工事用の馬の需要は相當數に上つた。又本縣には自動車交通が行はれないので馬は特に交通上の重要な役割を擔つてゐる。貸切馬車運賃は荷馬車一日三元五角—四元、但し雨季收穫期又は治安狀態不良の地域に向ふ場合は割增となる。

縣內車馬數

車馬種別	荷馬車	木頭車	牛車	轎
車數	〇〇〇	〇〇〇	〇〇	〇〇

自動車　北辰線の開通前までは建設用トラックが同區間を運行しゐたるも、同鐵道完成後、鐵路總局バスは辰清、黑河間を運行し、康德元年十月より康德二年一月に及び、之亦辰黑線の開通により停止されたから、結局本縣には總局營業自動車路線は無い。總局は奇克特—辰清〇〇〇粁の自動車營業を計畫しあるも速急實現は至難の模樣である。

鐵道　本縣には北安站を中心として北黑線、濱北線、齊北線の三線が黑河、哈爾濱及齊齊哈爾の三方面に走つてゐる。

北黑線(北安—黑河)三〇二・九粁

本線は總論に於て詳述の通り先づ北辰線を昭和八年(大同二年)四月起工、翌九年三月軌條敷設完了、同年十月假營業を、同十二月本營業を開始し、辰黑線は同八年十二月起工、同九年十一月軌條敷設完了、同十年一月假營業を、同年十一月北辰線と接續して北安・黑河間本營業を開始したものである。

濱北線(三棵樹—北安)三二六・一粁

事變前の呼海線以外は新建設線で、海克線(海倫—北安—克山)と稱ばれてゐた新線は昭和八年二月假營業を、同年十二月より北安を分岐點として濱北、齊克兩線に區分せられ本營業を開始した。

齊北線(齊齊哈爾—北安)二三一・五粁

本線の內、齊齊哈爾—克山間は齊克鐵道として昭和三年六月起工せられたもので、同五年三月泰安迄延長、事變後呼海線側の東方作業班に對して西方作業班は昭和七年六月泰東站より起工し同十月北安に達し更に李家に向て工事を進め十二月完成、北安、哈爾濱が結ばれたのである。翌八年二月假營業を、同年十二月本營業を開始した。

本縣內には北黑線の驛を有するのみで、濱北、齊北兩線は極く短距離が含まれてゐるに過ぎぬ。

北黑線各站(縣內)區間粁程(粁程削除)

北安　二井　二龍山　訥謨爾　龍鎭　南頭　龍門　禮井　辰清　腰嶺　清溪　堯屯

水運　小興安嶺の東分脈（通北縣內）に發源する訥謨爾河は本縣の南部を東西に貫流して德都、克山兩縣を經て訥河縣に入り嫩江に注ぎ水運の利便がある。夏季陸上交通杜絕期には專ら旅客貨物の輸送に利用せられ、沿岸諸地方を往來する者は小舟を以て本河を上下する。經濟的には東部大青山森林地帶より遠く嫩江に筏流する木材は齊齊哈爾に搬出せられてゐる。而し乍ら本縣に於ける訥謨爾河の經濟的價値は德都、訥河兩縣のそれ以上に出でない。

空運　縣內には北安鎭を中繼地として哈爾濱—北安鎭—黑河五一〇粁の空路があり、康德三年十月一日より日、水二往復運行となつた。當地利用者は少ない。總論參照。

通信　北安鎭に郵局が開設せられたのは大同二年十一月一日、龍鎭、孫吳は康德二年四月一日である。哈爾濱郵政管理局の管下に在り、取扱事務は限定されてゐる。

電信、電話事業は滿洲電信電話會社の經營するところで、北安鎭に電報局、電話局が在る。

（五）商工業、金融

商業　一九一〇年頃奉天省からの移民進出に漸次地方が開發せられ、北安鎭龍鎭等何れも當時開拓の農村である。西比利亞事變當時、露領の物資欠乏に因てブラゴウエシチエンスクに對する輸出頻繁となり、龍鎭は一躍濱黑街道の要衝となり商況殷盛を呈したが、間もなく赤露勢力の浸潤に壓倒されて滿洲事變前は衰微し切つてゐた。鐵道開設後の新興景氣は從來本地方の支配地たりし克山、海倫の地位を奪つて商勢頓に振つたが、矢張り背後地關係に傳統的强味を有する克山、海倫を附近に控へてゐることは、商業都市としての北安鎭將來の發展に期待をかけられることは無理で、急激な鐵道建設事業に伴ふ勃興期に於てさへ其の點に不安を抱く斯業者は大資本の投下を控へたのである。

商品は建國後猶ほ蘇聯製品（燐寸、石鹼等）が見受けられたが、漸次日本製品に驅逐せられ、滿洲製品は主として哈市製造によるものである。本縣の開發は鐵道に賴る他なく、本縣の商業中心地北安鎭の背後地は北黑線沿線を動脈とし訥謨爾河支流々域及德都縣の少地域のみである。物資移入經路は洋雜貨加工品、綿布、人絹布等の運賃負擔力に富む商品は取引關係上哈爾濱より濱北線を經て移入せられ、低級品は大連、奉天より齊齊哈爾を經て移入される。

工業　は電氣事業と小規模の燒鍋二、油房三を除き他に企業と見るべきものなく、僅かに一箇年製作數一一〇台程度の荷車製作業二が活動してゐるに過ぎぬ。電氣事業と云ても克山電業股份有限公司北安鎭分廠が北安鎭の電燈供給を行つてゐるのであつて、同公司は大同二年十二月滿洲電業公司の設立後は其の經營に委ねられてゐる。而して當地の電氣事業は同年四月日本軍隊の專用として點燈したのを最初とし、其後一般市民に供給されることとなり今日に及んだものである。

對露輸出旺盛時には燒鍋二、油房七を新設して燒酒、豆油の製造に活況を呈したものであるが、其後は地方消費に充てられてゐる。勞働時間は概ね十時間制で油房では二交代制を採用してゐるものもある。

康德元年度末現在の龍江省公署實業廳調に依ると商工業者三二一戸とあり、又滿鐵の調査では資本金一、〇〇〇圓以上のもの滿人側一〇、日本人二四（土木建築關係會社をも含む）で、日本人側は雜貨商を主としてゐる。日本人商工業者は滿人側に比し相當大なる資本を有してゐるが大口取引を爲すもの殆ど無く邦人共喰の實狀に在る。

物價は哈爾濱より移入せらゐる一般商品は幾分格安なるも從來よりの關係から哈市商品を排して齊齊哈爾より仕入れるものが多く齊齊哈爾の物價に對比すると大約三〇%高、哈爾濱より約二〇%高見當である。康德元年十月調の北安鎭物價次の如し。

品種	單位	價格	品種	單位	價格	品種	單位	價格
白米	一俵	一一・五〇円	酒（並）	一升	〇・八〇円	鷄	一羽	〇・八〇円
麵粉	一袋	四・六五	味ノ素（小）	一個	〇・〇二—四	卵	一個	〇・〇二—四
味噌	一〇〇匁	〇・一二	白菜	二〇〇匁	〇・八〇	茶番	二〇〇匁	〇・〇三
醬油（一等品）	一升	〇・七五	玉葱	一〇〇匁	〇・三五	鰺	一〇〇匁	〇・〇八
砂糖	一〇〇匁	〇・一五	馬鈴薯	一	一—二・〇〇	鯖	一二〇匁	〇・〇三—四
酢	一本	〇・四五	里芋	〃	〇・一五	鮒	〃	〇・一三
ソース（イカリ印）	一本	〇・四五	澤庵（並）	一二〇匁	〇・七〇	鯉	一〇〇匁	〇・一五
鹽	一〇〇匁	〇・一七	豚牛肉（上）	〃	四・五〇	薪（並）	一輛	〇・三五

（大同二年十二月現在）

勞働賃銀

國籍別	大工	左官	油房苦力	木挽職人	洋服工
滿人	一日 一・〇〇	一・〇〇	一・六〇	一・五〇	一・〇〇
				一・五〇	

（康德元年十二月現在）

營業種別	店名	國籍別	執事人氏名	資本金	開業年月	一ヶ年賣上高	聯號及支店其所在地
雜貨	北大號	滿	尙鏡清	二、〇〇〇円	昭和八年九月二七日	一六三、〇〇〇円	本店哈爾濱
〃	新北商店	〃	周光宇	一、〇〇〇	昭和八年九月一五日	一四〇、〇〇〇	
〃	廣來源	〃	崔小泉	一、〇〇〇	昭和八年七月一六日	一〇、〇〇〇	
〃	張繼熙公司	〃	張繼熙	五〇、〇〇〇	昭和八年一二月六日	三五、〇〇〇	
食料雜貨	南海洋行	日	岩井義雄	四、〇〇〇	昭和八年八月一〇日	二四、〇〇〇	本店四平街
〃	北安洋行	〃	長澤紀代司	一〇、〇〇〇	昭和八年七月二六日	二〇、〇〇〇	
菓子商	風月堂	〃	稻尾福次郎	一五、〇〇〇	昭和八年六月三〇日	五〇、〇〇〇	本店哈爾濱
和洋雜貨	信濃洋行	〃	小田切義治	二〇、〇〇〇	昭和九年二月五日	一、〇〇〇、〇〇〇	本店大連
〃	大和洋行	〃	廣野儀三郎	一五、〇〇〇		六〇〇、〇〇〇	〃
〃	住本洋行	〃	住本勝一	一〇、〇〇〇		一〇〇、〇〇〇	
藥種商	原田藥局	〃	原田德三郎	五〇、〇〇〇		五〇、〇〇〇	
酒類販賣兼旅館	日滿商會	〃	烏越條三	本店五、〇〇〇、〇〇〇			
土木建築	東亞土木出張所	〃	甕福光次	本店一、〇〇〇、〇〇〇			
〃	福昌公司出張所	〃	須田要	一、〇〇〇、〇〇〇			
〃	北滿公司	〃	田中民藏	本店一、〇〇〇、〇〇〇	昭和八年一月一〇日	一〇〇、〇〇〇	
〃	松本組	〃	因幡福松	本店一、〇〇〇、〇〇〇	昭和八年五月二〇日	五七五、〇〇〇	本店吳市
〃	東組	〃	東政雄	二〇〇、〇〇〇	昭和六年五月一日	五〇、〇〇〇	
〃	池田組	〃	池田圓利	五〇、〇〇〇	昭和九年九月一五日	五〇〇、〇〇〇	
農業、材木販賣	大北公司	〃	森脇要平	三〇、〇〇〇	昭和七年十二月一日	一〇〇、〇〇〇	
水道工事	眞田水道工務出張所	〃	黑木優	本社五〇〇、〇〇〇	昭和九年七月二日	二七〇、〇〇〇	本社大連
陸軍用達	石原洋行	〃	石原喜太郎	三〇、〇〇〇	昭和八年三月二四日	一〇〇、〇〇〇	
〃	日新洋行	〃	金正柱	五、〇〇〇	昭和八年一一月一五日	四〇、〇〇〇	

旅館	大日ホテル	〃	梅田重助	六、〇〇〇	昭和八年五月二〇日	五九、〇〇〇
〃	北安ホテル	〃	田代貞次	二六、〇〇〇	昭和八年五月二〇日	一九、〇〇〇
〃	ミドリ旅館	〃	志磨タカ	九、〇〇〇	昭和八年七月一一日	一五、〇〇〇
〃	北黑ホテル	〃	池松圓利	二〇、〇〇〇	昭和九年九月一〇日	一三、〇〇〇
〃	日本旅館	〃	西浦嘉次郎	四、〇〇〇		一二、〇〇〇

註　其の他、日本人經營のものには料理店一四、カフエー七、食堂三あり。

工業狀態

（康德二年十一月現在　龍江省公署實業廳調）

種別	國籍別	工場數	資本金	生產品	一ヶ年製品數量	生產額
製油業	滿	一	五、〇〇〇円	豆油	一五、一〇二斤	一、四三八円
釀酒業	〃	一	五、〇〇〇	白酒	一二、四三二壺	二、四二五
木器製造業	〃	一	一〇〇	木器	四七九、二二〇斤	一二、三六八
裁縫業	〃	一	一六〇	滿洋服	四七五、三三〇斤	一、四二六
窯業	〃	二	五〇、二〇〇	磚鉢	八四件	二、五八〇
克山電業有限股份公司北安鎖分廠	日、滿、合辦	一	一〇〇、〇〇〇	電力	四二〇件	五六六
新滿公司	日	一	三、〇〇〇	煉瓦	八、五〇二、〇〇〇個	二九、三一〇
					一六四、四〇〇KWH	四九、三二〇
						一五、〇〇〇

註　克山電業公司北安鎖分廠の電燈需要家數五〇八戸、實燈數四、三二六燈（康德元年十一月現在）である。

金融　往年北安鎮の金融は海倫の支配下にあつたが鐵道開通後は克山との關係密接となり市場取引は江大洋をもつてなされてゐた。最近迄銀行、質舗等の金融機關無く、僅かに滿人回春芳の經營する錢舗「賢豐」あり資本金二、〇〇〇元を以て兩替業を營む外、海倫、哈爾濱、齊齊哈爾との爲替取引業を行つてゐた。

康德元年十一月始めて中央銀行辦事處が此の地に設置せられるに至り稍々金融の便を得たが、商況に見るべきものがなく從て金融も不活潑狀態である。其後同辦事處は支行に登格營業を行つてゐる。日本人勞力の浸透に依り金票流通の程度は割合に廣い。當舗は康德二年末現在北安鎮に一戸（鎮發當）錢舗も一戸（鎮莊成）營業してゐる。

（六）邑　鎮

北安鎮（北安）　濱江起點〇〇〇・〇粁、濱北、齊北兩線の接續地で站名は北安と稱する。當地方は光緒二十五年（一八九九年）清丈分局が設置せられ、其後民國三年（一九一四年）招墾分局が新に設置、邊境開拓に手が染められた。而し乍ら海克線の完成當時の北安鎮は一寒村に過ぎず、今日の如く急激に發展したのは滿洲事變後、大同元年馬占山の龍鎮燒打に依て縣公署は北安鎮に移轉し、海克線の完成に次で北黑線が起工せられるに及び、黑河への足溜りとして一躍新興都市となり、一時は人口二萬一千を算した。

市街の構成は驛より南大街、北大街を中心に東西の二大街交叉し、その十字路附近の他に見るべきものはない。東方は丘陵地帶、西方に平野あり、都市計畫は工費二五萬圓、五箇年繼續事業として大同二年末調査を完了したが、市街は北方に伸展性がある。康德元年十二月末現在の戸口次の如し。

國籍別		戸數	人口 男	人口 女	人口 計
滿人		一、二六三	三、〇五四	一、三八一	四、四三五
日人	內地人	五七一	八三五	四一五	一、二五〇
	朝鮮人	九六	八八	七九	一六七

外國人	一〇	一五	一二	二七
計	一、九四〇	三、九九二	一、八八七	五、八七九

北安鎭は元來政治、經濟上の支配力無く、僅かに交通上舊縣城龍鎭を主なる背後地とするに過ぎなかつたが、鐵道開通に依て凡有事情は一變した。即ち南北滿洲を繼ぐ齊克、平齊兩線と濱北線との分水嶺を成し、運賃政策上主要意義を持つ地點となり一時は龍鎭、克東、遜河船口、德都縣城の經濟上の支配者としての地位を築いたが、近時經濟的重要性を克山に讓りつゝある。之は北黑線完成の結果、足溜りの重要性位置から現在は通過驛になつたことと、物資集散の地理的不利からと見られてゐる。

當地ではな氣象觀測が從來行はれず、最近は克山地方觀象台が觀測を行つてゐる。北安鎭で縣公署の測定した氣溫は夏季最高四〇度、平均三〇度。冬季最低零下八三度、平均二二度。降霜は一〇月上旬開始、結氷は同月下旬、解氷三月下旬開始。

主要機關　縣公署、警察署、稅捐局、北安鎭林務署、電報局、電話局、郵政局、中央銀行支行、商務會、農務會、電業公司出張所。日本側　齊齊哈爾領事分館、日本人民會、在鄕軍人分會、義勇消防隊。

衞生施設としては哈爾濱鐵路醫院北安分院のほかに日本人の開業醫三（太田醫院、土屋醫院、高崎醫院）のみで孰れも昭和八年以後の開設である。

敎育機關には初級及高級小學校各一あり、日本人小學校は昭和九年四月開校せられ校長以下敎師三、兒童は北安鎭、龍鎭の鮮人子弟二五である。

龍鎭　北安站北方八一・二粁に龍鎭站あり、その東南方二粁に舊縣公署所在地たる部落が横はる。近代都市形式による中央廣場を中心とする放射狀の街路あり、往年黑河の殷盛時代には大麥、粟の重要集散地として繁昌し、事變前は約七〇〇戸を算した。大同元年馬占山軍の燒打に遭ひ、縣公署は北安に移るに及び急轉して衰微甚しく戸口は戸數約四〇〇、人口一、五〇〇となり其の大部分は農民を以つて占めてゐる。

しかし、近時警備機關の充實、治安の回復を待て歸還する者多く、北黑線工事中は戸數三四六、人口二、七五二（內常住者約四割、他は鐵道工事關係者）に及んだ。之は日本人一九五人（內常住者一割他は工事關係者）を含んでゐる。昭和九年十一月龍鎭神社が建立された。

主要機關　滿洲國警察隊、電報局、稅捐局、農務會、商務會、初高兩級小學校敎師四生徒一二〇、交通機關は荷馬車、馬橇で、日本の旅館二、料理店七、カフエー二、食堂二ありたるも、鐵道工事完成後は之ら營業者概ね引上た。

二龍山　僅かに數戸を算ふる寒村に過ぎず、附近の雜木林より北安消費の薪を當地より供給してゐる。站東方二粁の二龍山は春夏秋を通じ山遊地としての好適地。水質極めて不良。

辰清　嘗て二站と稱したる地にして、附近の丘陵小山は白樺、黑樺の疎林に覆はれ北滿奥地風景を描く。東方山上に二站神社なる小社あり。冬季最低氣溫零下四五度、平均二八度、夏季最高溫度三八度、平均二七度。結氷期十月下旬—四月下旬。主要機關は日本人居留民會、日本商戸は旅館三、料理店九、食堂二、滿人料理店九。

堯屯　白樺、黑樺の疏林に覆れた小山に包まれ、清流あり、景色は佳い。部落は六五戸、六五四人。小麥、白菜、豆類の農作がある。

孫吳　小興安嶺山中の窪地に在り瑷琿縣との縣境に位してゐる。鐵道開通以來殊に將來は森林開發上の交通の要衝となるので人口は急に增加してゐる。到る處に濕地が在て夏季雨量が多い、部落は驛西北方約六粁の鄭家窩舖で同地は瑷琿縣に屬してゐるかも知れない。戸口一五〇戸六九四人、內日本人男四六女四〇。氣溫は夏季最高四〇度平均三〇度、冬季最低零下四三度平均二五度。主要機關は商務會、林務署出張所、哈爾濱鐵路局機務段其他各段の分段。地味豐かで主要產物は煙草。

滿鐵調査の主要部落（人口五〇〇以上）戸口表（昭和九、一現在）

屯名	戸數	人口 男	人口 女	人口 計	屯名	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
天字頭井	一〇六	二九七	三四七	六四四	天字十三井	二〇四	六七〇	四五四	一、一二四
天字二井	一一六	三四八	二四五	五九三	天字十四井	一〇七	三二八	二一七	五四五
天字三井	一一九	三六九	二八五	六五四	務字頭井	一二四	四一三	二八一	六九四
天字四井	一六四	四九九	三七五	八七四	考字二、三井	一二三	四六七	三三六	八〇三
天字九井	一九一	五五四	四六四	一、〇一九	北安鐵龍鐵第二郷	五一九	一、四九九	八八九	一、三八八
天字十井	二二八	六四九	五四二	一、一九一		三三五	九三五	六五五	一、五九〇
天字十一井	一〇五	三二五	二八七	六一二		二一八	一、二九〇	四二七	一、七一七

七、奇克縣

（一）自然及住民

自然　黑龍江と遜河縣とに挾まれた小縣で、面積一、二四四平方粁。もと遙に廣い縣域を有してゐたが民國十九年現在の通り縮少された。同年の行政區劃變更の會議に於て縣知事が假睡の裡に調印した結果だとの挿話がある、と縣の報告に記載。

吉里哈爾山嶺が南部縣境を東西に至り（最高四五〇米）其派生的丘岡が隨所に突起してゐるので丘陵地帶多く、平野は江岸より三―一〇滿里に過ぎぬ。けれども、丘陵とても傾斜は至て緩漫、近年地方的耕作地としてぼつ〳〵開墾されつゝある。

河は東境の遜河、西境の霍勒漠津河等。他に沙河と稱せらるゝ無數の小流及支流があり平常は涸渇し雨季には氾濫する。また諸河川の流域には濕潤地多く全然耕作に適せざるのみならず、車馬通行不能の箇所が多い。

冬季は九月下旬より翌五月上旬迄、其間零下三〇―四〇度に下る。そのうち十二月下旬より二月下旬が酷寒、黑龍江は十一月初中旬に凍り酸寒期は貨物滿載の自動車、大車、橇が堅氷の上を往來する交通の最盛期である。冬の間無風清朗の日が多いが、雪は深く三―四尺に及ぶこと珍しからず、爲に自動車は運行不能に陷ることがある。

黑龍本流の解氷は五月上旬を例とし、其頃黃塵萬丈、樹木發芽。六月中旬より二十日位の雨季を經れば夏、この間河川氾濫して交通は杜絶する。夏は六月下旬乃至八月下旬であるが酷暑は七月中旬より八月中旬迄、日中一〇〇度に上ることがあるが日沒と共に急に降下し浴衣着では外出出來ぬといふ。一年を通じても亦一日を通じても寒暑の差甚しきが特徴である。春と秋とは何れも一ヶ月足らず、判然たる區別は難しい。

奇克天氣概況

（大同二年七月—康德元年六月）

	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	一月	二月	三月	四月	五月	六月
快晴日數	二七	二四	一二	二三	一八	二二	二〇	一五	二〇	一六	一三	一六
曇天日數	—	—	八	四	七	二	七	三	五	四	一〇	七
降雨日數	四	七	九	一	—	—	—	—	—	一	六	五
降雪日數	—	—	—	三	一	四	四	一	二	二	—	—
風天日數	—	—	一	—	四	三	—	九	四	七	二	二

住民 奇克縣の報告書（康德元年十月）はその開拓過程に就て記すること最も詳である。以て他を推すにも足りると思ふから次に之を摘錄する—

奇克縣の原住民はダウールとオロチョンである。彼等はもと南部の縣境山地で狩獵を事とし黑龍江及支流沿岸では漁業を主業として營んでゐた。が、前者に於てはかなり古く後者に於ては民國初年頃から一部農耕に從事したといふ。現に前者の如きは殆ど漢民族化した農民である。

一七世紀に入つて露人が南下し清朝は之に備へて齊齊哈爾、墨爾根より瓊琿に至る道路を建設し、軍人家族及流人を送る等殖民の事に努むるに及んで黑龍江一帶の地方に滿漢人が移住し始めた。殊に一九世紀の半以後瓊琿を中心とする地方への移住者年を追うて增加し、奇克縣も亦之に伴うて開拓された。古老は今から二五〇年前即ち瓊琿市建設（一六八四年）の直後に縣の西境霍勒漠津、嘎巴亮子附近へ最初の移住者が來たと云つてゐる。此等沿岸住民が部落らしい形をとつたのは五〇年も後のことであらう。併しそれも北清事變（一九〇〇年）中露人の侵入によつて一時に四散したが、北黑線の堯屯の如き當時江岸から逃げた部落民の開いた村だといふ。

一九〇六年露軍撤退、瓊琿副都統府復活、次いで瓊琿より蘿北に至る軍用兼郵便道路建設、玆に於て避難中の住民及新移住民が沿岸一帶に續々と入つた。一九〇七年には車陸にオロチョン統治機關として畢拉爾路協領公署が置かれ車陸鎭が建設された。而して各地に部落の發生を見たのであるが、その部落は概ねオロチョン及ダウール人が住んだ後を享けたもので、頗る原始的な生活を營んでゐたものと思はれる。

縣の背後地地方では移住民の增加に伴うて光緒時代（一八九五年）に通肯（海倫）副都統管區が設けられたが、其頃から通肯方面に住んだ滿人ダウール人は龍門鎭、奇克特の線を通つて對岸露領のボルヤコワ哥薩克村へ交易に出かけてゐた。毛皮を持つて行て火藥、衣類、食糧品を得て來るこの交易は年と共に頻繁となり、漢人の進出を誘致することになつた。また奇克特其他の地では土着して雜貨屋を營みつゝ交易をする者が出、此等の土着者に必要なる野菜穀物を作る者も出て來るといふ有樣で幾つかの新な聚落が發生した。現在の東西小丁子は此等移住者に依て建設された村の好例である。

黑龍江省の南部地方に住んでゐた農商民は由來北進して黑龍江へ出る短路を求めてゐたのであるが、前記海倫の滿人及ダウール人の交易路が顯著になるにつれ玆に公道が建設されることゝなつた。即ち海倫—通北—龍門鎭—奇克特六九〇支里（別書には六三〇支里）で民國五年（一九一六年）開通、爾來奇克縣地方は南方商業の中心と連絡せられ、穀類の移出、雜貨の移入等著しく經濟方面の發達を促すに至つたのである——

縣城を初とし一般に民度は極めて低く民情は質朴であるが生活は極度に困窮してゐる。縣民の七—八割は貧困者と云ふべき現狀である。元來縣內の邑落は縣城奇克を首とし殆ど對露貿易に依て發達したもので、對露貿易杜絕の一事のみを以てしても衰微すべき運命に在つた。然るに數年來の連續的水災、馬占山の叛亂等相次ぐに及んで全く疲弊、更に康德元年から地方の主たる收入源であつた罌粟栽培の禁止に依て徹底的に打ちのめされた。即ち農家が致命的打擊を蒙つたのみならず商家も之が餘波を受け、縣城所在の雜貨商の如き賣上二分一—三分一に減じた。而して其結果頗る憂慮されたのであるが、遇々北黑建設工事があつて農民は土工又は馬夫となつて活路を見出し、商家も其等に對する商賣があつた爲に辛うじて當面の生活を繫ぐことが能きたといふ有樣である。

康德二年十二月現在民政部地方司調の戸口は一、二九九戸、五、七六五人(日本內地人男一六女一二)。即ち縣面積一、二四四平方粁に對し一平方粁當人口四・六三四で黑河省の最高率を示してゐる。同年十月黑河省公署總務廳調の民族別次の如し。

	總人口	漢人	滿人	回族	日本人 內地人	日本人 朝鮮人	歸化	無國籍	備考
男	三、八三九	三、一一八	六六三	一五	二〇	四	—	一九	滿人にはダウール、オロチョン人を含む
女	二、〇三六	一、三九二	四八五	八	一四	三	一三二	二	
計	五、八七五	四、五一〇	一、一四八	二三	三四	七	一三二	二一	

原始民族ダウール及オロチョン人相當居り、ダウール人は滿人化して識別困難なるも縣報告では三八家二二八人とあり、オロチョンは車陸附近に多く棲み四旗七八八人といふ。オロチョン人は狩獵遊牧の生活を營み近來漢人の壓迫に遭ふて吉里爾哈山一帶の山地に逃れ棲むもの多き爲め調査は愈々困難となつた。

(二) 政治及治安、文化

政治 行政は卡倫制度下に於ては瑷琿廳に屬した。民國四年瑷琿縣の管下に在つたが同十八年設治局、同年縣政施行。天產に惠まれず且つ交通不便、人煙稀薄等の爲縣財政は收支償はず多額の國庫補助を仰ぐ狀態である。康德三年度縣財政は次の通りである。

康德三年度奇克縣歲入出豫算

(單位 圓)

縣收入額	二年度	三年度	增減
國庫補助額	八、〇三八	七、三〇一	七三七
	二六、七七七	二七、二〇三	四二六
歲出	三四、八一五	三四、五〇四	三一二

治安 縣警察及び第三軍管區司令部管下の黑河地區警備司令部兼混成第十五旅並に江防艦隊が治安維持機關の根幹を成し、奇克特方面治安維持委員會が組織せられ、又、保甲制度も既に實施され一保一三甲一三〇牌の團員一九〇餘名となつてゐる。縣民は極度に疲弊してゐるため匪賊は掠奪の對象を失ひ、且つ民度低く民情質朴の縣民に思想的犯罪も無く、治安は圓滿に維持されてゐる。

教育 學校は康德二年度末に於て兩級小學校二、初級小學校八、此教員數一三名、兒童數兩級一五六初級二五二で、前年より總數に於て約九〇名を增加したが就學率は四八%。民衆學校は城區、車陸、干舍子及び霍爾謨津の四箇所に設置され、その兒童數七〇餘名、何れも寺小屋式の施設である。教育團體としては康德二年六月滿洲帝國教育會の奇克特分會が設置された。

宗教 本縣住民の大部分は佛教徒と謂はれ乍ら特殊の宗教團體は存立してゐない。主として龍門派に屬する道教信者で、布教師が三名居り、その寺廟は縣城西門外に三聖祠が建立されてゐるのみである。此外に希臘正教と回教とが若干の宗徒を有してゐる。

社會 執政賑款は大同元年三月下賜せられ、救濟事業として民政部設立の福民診療所が在るほか特殊の社會事業團體は見當らぬ。義倉さへ今のところ設立されてゐない。

衛生 公醫一名配置され所在地の他巡回施療を行つてゐる。滿人藥店三。

(三) 資源

農產 可耕地は總面積の約一割、既耕地は可耕地の三分一、而して康德元年度の作付面積は既耕地の三分一、以て本縣農業

の大勢を知ることが能きる。地質は第四紀新層に屬し土壤は地味豐沃な黑土で占められてゐる。土地所有狀況は無所有者は總數の三、四割に及び所有者も一〇晌未滿の者が最多數を占めてゐる。最大の土地所有者は興安嶺以南に於て龍鎭の一七〇晌なるに對し奇克特には三一五晌を極數として居り、概して江岸地方就中本縣及遜河附近に大なるものが多い。

縣面積竝土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地				不可耕地	總面積ニ對スル比率			可耕地ニ對スル比率	
	既耕地	未耕地	計			可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
一、二四四平方粁	四一平方粁	七四平方粁	一一五平方粁		一、二二九平方粁	九・二%	九〇・八%	三・三%	五・九%	三五・七%	六四・三%

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	四二〇畝	三六〇瓲
其他豆類	三〇	二〇
高粱	一二〇	一〇〇
粟	三九〇	四八〇
玉蜀黍	二五〇	一九〇
小麥		
水稻		
陸稻		
其他雜穀	九〇	八〇
計	一、三〇〇	一、二八〇

特用作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
煙草	七畝	三瓲
瓜子	三五	二〇
計	四二	二三

縣の報告によれば總戸數の七六%迄農民であるが、其八割近くは十晌未滿の小經營者、一〇—二〇晌の者一割、五〇晌以上の者二〇戸に滿たず、一〇〇晌以上（極數一三〇晌）は五指を屈する程度である。而して此等は自作、小作、自小作に分れ、自作及自小作は古き縣内の居住者多く、小作は大部分山東よりの出稼人を以て占められてゐる。小作條件には左の三種があり、其内第一が普通で七割を占め、三種とも契約は普通一年毎に更新する。

一、一切の耕作を小作人がする場合　借地一晌につき　國幣　三圓
二、同　上　〃　收穫穀物十甫度（五年）
三、初耕は地主、後は小作人がする場合　〃　國幣十一圓

地價

（康德二年十月現在　黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
第一區縣城	街基	上	一・三三圓（每方丈）	
	同	中	一・〇〇	
	同	下	二・五〇（每畝）	小麥大豆雜糧三—一五斗
	耕地	上	二・〇〇	
	同	中	一・五〇	
	同	下		

第二區	車陸街基	同上中	一・四〇	一・八〇	小麥大豆雜糧三—一五斗
	同下中	同上下	・二〇	一・五〇	
	耕地上	同耕地上中	—	一・〇〇	
第三區	干岔子街基	同上中	・四〇	—	
		同上上	・二〇	二・一〇	小麥大豆雜糧三—一五斗
		同耕地中	・三〇	一・六〇	
		同下中	—	一・〇〇	
		同上下	・二〇	・二〇	
第四區	霍爾謨津街基	同上中	一・八〇	一・八〇	小麥大豆雜糧三—一五斗
		同耕地上	一・五〇	一・五〇	
		同耕地下	一・〇〇	一・〇〇	

一般に採用される農耕法は氣象、人口及所有者不明の荒地多き等の關係で粗放である。土質肥沃のため肥料は全く用ひられず所謂掠奪農法を見る。特筆すべきは中農以上は開墾及其後の作業に當つて馬力又は牛力に依る耕地機、播種機、刈取機、精穀機等を使つて居り、人力に依る者は小自作農又は小作農に限られてゐる。一晌當收量布度は縣の報告によれば次の如し。

	播種量	不作	平作	豐作
大麥	七	三〇	四五	六〇
小麥	七	三〇	四五	六〇
大豆其他豆類	三	二〇	五〇	八〇
粟	一	二〇	三五	五〇
苕麥	七	三〇	四五	六〇
大麥	一	五〇	六五	八〇
迷子	一	三〇	四五	六〇
玉蜀黍	七	三〇	四五	六〇

尙、縣の報告には大同二年度の收穫に就て下の如く附加へられてゐる。全縣下に雪害と鼠害とが甚しく各種農作物とも一率二—三割乃至五割の被害、最も被害の大きかつたものは小麥と苕大麥で雪鼠兩方の害を一緒に受けた所では三—八割の減收である。大豆の雪害は減收一割に止つたが、表皮は悉く黑色化した。

往年對蘇貿易の盛であつた時代には農作物主として小麥が商品として取扱はれ相當栽培が行はれたが、貿易杜絕後耕作面積は全般的に減少した。數年來の連續的水災と馬占山の亂は著しく農耕勞力（人及牛馬）を減少、これ亦耕地減少農業衰微の一因。民國一六—七年來罌粟の栽培が始まり小面積で多額の收益を擧ぐることになつた之も一因。農產價格暴落の結果開墾耕作するも收支償はず、災害に遭へば喰込になるので農民は自家用耕作だけをすることになつた之も一因。斯くて縣內の收穫は自家用及地方の消費に當てられ、大同二年度の如き大豆五〇〇石、小麥八〇〇石の縣外搬出を見たのみである。

春耕資金

（康德二年四月末現在調）

年度	貸付額 本年度新貸付額	貸付額 前年度貸付殘額	貸付額 計	貸付戶數	回收額	貸付殘額
大同二年	一〇、一五四円	—	一〇、一五四円	六七	三、九三五円	六、二一九円
康德元年	ナシ	六、二一九	六、二一九	—	一、四七八	四、七四一

畜産　畜類は農業勞力の供給源として存在するもので事業としては問題にならぬ。大同二年中縣城に於ける屠殺數も僅に牛一五頭豚七五頭に過ぎぬ。

畜産狀況

（康德二年九月一日現在　實業部調査）

種別	數量	備考
牛	四八一頭	前年より合計稍增加し、鷄は約六百の增加（縣報告との比較）、康德二年六月末現在黑河省公署調では牛四三五、馬一、二三〇、騾三、驢一三、豚二、〇一六、鷄四、八四九とある。
馬	一、二二〇	
騾	七	
驢	二	
羊		
豚	一、七七〇	
計	三、四八〇	
鷄	四、四二五羽	

林産　本縣開拓の當時に在つては南境の山地一帶に豐富な森林を見た由であるが、住民が增加して濫伐をやつた結果は林業としての價値を有するものが無くなつた。目下南境の山地及河岸に白樺、黑樺、其他の疎林を見るに過ぎないが、住民は冬期農閑に此等を自由に採取し其生計を補つてゐる。

建築用材として縣内に消費さるゝ紅松、唐松は前年洪水の際上流からの流木と、黑河方面から買入れるものとある。また白樺、黑樺も薪價が安い爲煉瓦代用として盛に家屋建築に使はれる。

森林狀況

（康德元年現在　實業部調）

森林面積	立木蓄積量（立方米）		
	針葉樹	濶葉樹	計
一二八平方粁	一九二、〇〇〇	一、六〇〇、〇〇〇	一、七九二、〇〇〇

鑛産　鑛業として記すべきものはない。採金も職なき苦力の內職的意義を有するに過ぎぬと報告されてゐる。康德二年十月齊齊哈爾領事館黑河警察分署の報告に依れば最近奇克特の上流三〇滿里の地點に在る乾岔子附近に於て砂金鑛を發見し相當有望視され目下滿人苦力多數入込み採掘中とある。

炭礦は奇克縣城を距る約四粁の地點に發見されたと云ふが專門的調査は行はれてゐない。

砂金鑛區

（康德元年現在）

種別	產地名	位置	產出高	經營者其他記事
砂金	小西河	霍爾莫津ノ西	一班六人ニテ一日約一チール（約一匁二分）	約二〇年前朝鮮人、滿人合同ニテ採金現在休止、
	霍爾莫津	霍爾莫津南西一六支里		
	西溝	黑河南東二〇〇支里		
	高灘			
	霍爾莫津河			

水産　農民の副業としての域を脫せず、縣內漁業專業者は十八戶四〇余名を算するに過ぎぬ。統計的數字判明せざるも一箇年間の總漁獲數量は一萬布度と推定せられ殆ど大部分が自家用である。大同二年度縣城のみに於ける漁獲高及價額は左の如し。

（縣報告）

種別	數量	一布度當價額
牙魯魚	一、五〇〇布度	・六〇円
大嗚哈魚	六〇〇	二・〇〇
鯉魚	五〇〇	二・〇〇
鯽魚	五〇〇	一・二〇
狗魚	三〇〇	一・二〇
白大魚	一〇〇	二・〇〇
粘魚	一〇〇	・四〇
黃河魚	五〇	四・〇〇
鱖魚	五〇	六・〇〇
遍花魚	五〇	二・〇〇
計	三、七五〇	

（四）交通

道路 黑河省內では瑷琿縣に次で發達してゐる。その主なるものは

一、霍爾謨津—辰清　國道豫定線　幅員六米　延長約〇〇粁

二、霍爾謨津—車陸　舊道　延長　〇〇粁

三、奇　克—遜河　二站　國道　幅員六米　延長〇〇〇粁

此の內、一は國道局に於て建設中で、二は往時瑷琿、蘿北を結ぶ軍用兼郵便路として、其の後は移民路として利用せられたもので本縣唯一の橫斷幹線路を成し、夏季は河川、濕地の爲め通行不能となる。冬季は大體に於て自動車の運行可能であるが、奇克—車陸間の一部は右道路より寧ろ黑龍江々上を通行するを便利とする。

三も滿洲國國道局の建設、康德元年九月着手、同二年六月竣工。北黑線孫吳驛と遜河、奇克兩縣城を繫ぐ重要交通路となつた。

交通機關 主要邑落間の道路は概ね夏季通行不能。交通機關は車馬及橇、自動車は冬季は積雪の場合を除き自由に運行し得べく、日滿長途汽車公司（黑河）の黑河—奇克間不定期路線が最初に開始、次で總局自動車路線が開かれた。總局では更に奇克—辰清線〇〇〇粁の自動車路線の實施を豫定してゐる。

水運 黑龍江は結氷期に於て最も重要な通路となり、開江期は哈爾濱—黑河線、富錦—黑河線、黑河—奇克線の三定期航路を哈爾濱航業聯合會が經營してゐるので、奇克の水運は頻繁である。沿岸小屯間は小型木船に依て自由に往來してゐる。

通信 縣城には郵局、電報局がある。郵便は夏は定期輪船の交通頻繁なるため比較的順調なる遞送を見るが、冬は黑河郵局中繼の驛傳式に依る爲屢々杜絕することがある。黑河—奇克縣城間郵便到達日數は

夏季二—八日、冬季四—八日、解氷結氷時一五—一六日

電報局（滿洲電信電話會社の管理）は黑河及龍門台へ各一回線、後者は電話線として使はれてゐる。奇克電報局は勿論一般電報を取扱ひ、同局附近の配達可能の區域を除き着信は郵便をもつて配送してゐる。電話は同會社所管の黑河電話局に依て有線電信線を切替へ有料通話を行てゐる。

尙、治安維持會の警備用有線電話は黑河に通じてゐる。

縣內車馬數　（康德二年二月現在）

種別	荷馬車	木頭車	轎車	橇	小舟
車數	・（削除）	（同上）	（同上）	（同上）	（同上）

大車及橋一日貸切料金

地名	荷馬車	轎
縣城	二・〇〇円	二・五〇—三・〇〇円
車陸	三・〇〇	二・五〇
干岔子	三・五〇	二・五〇
霍蹤津	三・五〇	二・五〇

縣內邑鎭區間粁程（粁程削除）

	霍爾謨津	哈達彥	何地營子	老西窩堡	干岔子	漁梁子	奇克特	索地營子	十八里崗子	車陸
霍爾謨津										
哈達彥										
何地營子										
老西窩堡										
干岔子										
漁梁子										
奇克特										
索地營子										
十八里崗子										
車陸										

縣內各碼頭間水路粁程

車陸	四三	九五
奇克特	五二	嘎巴亮子

康德二年度水運概況

碼頭別船客數

碼頭名	乘船	下船
紅毛鷄	四〇七	三七〇
嘎巴亮子	六三五	六九九
康牛湖	八六	三四二
干岔子	一、三〇九	一、〇一六
高灘	九	五
奇克特	三、一九八	二、六二二
車陸	八三	五二
計	五、七二七	五、一〇六

（哈爾濱航業聯合局調）

碼頭別貨物移出入數量（單位瓩）

碼頭名	稅入	移出
紅毛鷄	八、三一〇	—
嘎巴彥子	五五、七七八	—
康牛湖	—	二一三
干岔子	一〇、一一九	九、五六一
奇克特	七七八、六〇八	一一六、七六一
車陸	四〇、七一〇	九一、二八〇
計	八九三、五二五	二一七、八一五

註　品種別數量は總論參照

（五）商工業、金融

商業　縣城奇克が抑々對岸露領との交易に依て生れた都邑である。露西亞革命の後對岸一帶が物資窮乏に陷つた頃には、砂糖、小麥、燒酒、布疋を初とし石鹼、手拭、靴下等日用小雜貨に至る迄相當多量の輸出を見、頗る活況を呈したが、貿易の杜

絶と同時に商況も萎微し、縣城中流の商戸にして一ヶ月賣上一萬圓位あつたものが1/2乃至1/3に減じ過去に於て膨張せる商業規模が却て一の壓迫となつて來た。殊に地方農村の疲弊に加へて康德元年の罌粟栽培禁止は顧客たる農民をして窮乏せしむると共に、罌粟栽培の爲に毎年入縣した七〇〇—一、〇〇〇の勞働者が來なくなり、商家は文字通火の消えた如うな有樣である。斯くて倒産者の續出を見るかと思はれたが、遇々北黑線工事に依て曾家窩堡方面に勞働者蝟集し、從來唯一の背後地たりし遜河縣城以外に一新背後地を加ふることゝなり些か愁眉を開いたのであつた。

奇克の主なる商家は後に揭げる。縣城以外で營業稅を納付し商家として認められてゐるのは車陸に五戸、嗚巴亮子に一戸あるだけである。而して之等の商戸は開江期中哈爾濱、富錦等より輪船を以て商品を仕入れ、之を縣內及背後地に移出して居り、小賣價格は哈爾濱に比して二—五割高である。

縣內商戸の營業狀況に就き黑河省統計書（黑河省公署刊行）を見るに

雜貨三〇、飲食店八、鮮貨一、理髮一、肉舖一、澡塘一、旅館一一で、此の總資本金（實際出資額）約二萬三千圓、その內雜貨商二萬二千圓で雜貨商の利益額五千餘圓、缺損額四千圓即ち戸別に見ると利益を上げたもの二二戸であつた。

縣城市價（單位國幣圓）（黑河省公署調）

品名	單位	康德元年十月	康德二年二月	〃四月	品名	單位	康德元年十月	康德二年二月	〃四月
白米	每甫	三.〇〇	三.二〇	三.二〇	蜂蜜	〃	一二.〇〇	一二.〇〇	一二.〇〇
粟（谷子）	〃	〇.三五	〇.四五	〇.六〇	白糖	〃	五.六〇	五.六〇	五.六〇
包米	〃	〇.四〇	〇.五〇	〇.五〇	氷糖	〃	八.八〇	八.四〇	八.〇〇
元豆	〃	〇.五〇	〇.五〇	〇.七〇	牛肉	每斤	〇.二〇	〇.二〇	〇.二〇
小麥	〃	〇.九〇	一.一〇	一.二〇	豚肉	〃	〇.二五	〇.二五	〇.二五
三號麵粉	每袋	三.五〇	三.四〇	三.四〇	鷄肉	每支	〇.六〇	〇.八〇	〇.八〇
燒酒	每甫	七.〇〇	七.二〇	七.二〇	大母哈魚	每斤	〇.一〇	〇.一〇	〇.一〇
鯉魚	每斤	〇.〇八	〇.一〇	〇.〇五	茸	〃	〇.二五	一	一
黃魚	〃	〇.二〇	〇.二〇	〇.一五	木茸	〃	〇.六〇	〇.九〇	〇.四〇
白魚	〃	〇.一〇	〇.一〇	〇.〇六	白菜	每甫	〇.二〇	〇.二五	〇.四五
毛巾子	每條	〇.二〇	〇.二〇	〇.二〇	馬鈴薯	〃	〇.八〇	一.一〇	一.二〇
羊襪子	每雙	〇.三〇	〇.三〇	〇.三〇	葱	〃	〇.五〇	〇.五〇	〇.五〇
手套	每付	〇.七〇	〇.七〇	〇.七〇	大蒜	每揭	〇.五〇	七.〇〇	七.〇〇
燈油	每甫	六.八〇	七.〇〇	七.〇〇	花布	每疋	七.〇〇	一四.〇〇	一四.〇〇
豆油	〃	四.二〇	五.五〇	五.五〇	貉子皮	每張	一五.〇〇	四.〇〇	三.〇〇
生髮油	每瓶	〇.七〇	〇.七〇	〇.七〇	貓皮	〃	四.〇〇	〇.五〇	〇.三〇
醬油	每甫	四.〇〇	四.〇〇	四.〇〇	灰鼠皮	〃	〇.五〇	〇.二〇	〇.二〇
粒鹽	〃	四.〇〇	四.〇〇	四.〇〇	兎皮	〃	〇.二〇	〇.七五	〇.七五
食醋	每斤	一.六〇	一.六〇	一.六〇	膠皮短鞋	每雙	〇.七五	〇.八〇	〇.八〇
豆餅	每片	〇.二〇	〇.三〇	〇.三〇	布鞋	〃	〇.八〇	一.〇〇	一.〇〇
海紙	每疋	三.二〇	三.二〇	三.二〇	膠皮地下足袋	〃	一.〇〇	二.四〇	二.三五
棉花	每斤	〇.六〇	〇.六〇	〇.六〇	面鹹	每甫	二.三五	〇.一〇	〇.一〇
海卵	每個	〇.〇四	〇.三五	〇.〇二	牙粉	每包	〇.一〇	〇.一〇	〇.一〇
雞參	每斤	一.八〇	一.八〇	一.八〇	牙刷	每本	〇.一五	〇.一五	〇.一五
海干貝	〃	一.二〇	一.二〇	一.二〇	洋火	每包	〇.一〇	〇.一〇	〇.一〇

工業　商業同樣縣城及車陸の兩地以外には見るべきもの無く、奇克と雖も油房、燒鍋、製粉等小規模のもののみで、僅かに地場消費を滿たす程度である。製粉工場は四箇所ありて何れも例年十一月より翌年に至る冬期間に限り操業し、其の生產麵粉の品質も小磨麵と稱し富錦、佳木斯製の五號麵以下の粗惡なものである。其他の鐵匠、木匠等は極く少量の鉋丁、馬蹄を製造する外、車輛、橇等の修繕を爲す程度である。

奇克主要工業狀況

（康德元年度黑河省公署民政廳調）

工廠名稱	種別	類別	實際出資額	職工	生產總額	主要生產品目
德豐昌	化學工業	豆油製造業	六〇〇圓	六	六、二八二圓	豆油豆餅
世一泰	〃	〃	二、〇〇〇	六	七、〇九二	〃
連海泉	食料品工業	釀酒工業	二、一四三	一一	五、六九四	燒酒

此他工場には製粉業四（資本總額八〇〇圓、從事員四）鐵工業三（資本總額四五〇圓、從事員八）、木器製造業四（資本總額六〇〇圓、從事員一〇）煉瓦製造業三（資本總額一五〇圓、從事員六）等何れも微々たる家內工業に止まる。

勞働賃銀

（康德元年六月現在）

國籍別		大工	日工	燒鍋工	油房工	鐵工	裁縫工	農業
滿人	年工	二五〇·〇〇円	一〇〇·〇〇円	三〇·〇〇円	一·〇〇円	一八〇·〇〇円	二〇〇·〇〇円	三〇·〇〇円
	月工	三五·〇〇	二五·〇〇	二五·〇〇	三·〇〇	一五·〇〇	一八·〇〇	二·〇〇
	日工	二·〇〇	一·〇〇	八〇	四〇	六〇	七〇	七〇

備考　1　國幣建
　　2　年工、月工ハ總テ食事付ノ住込ナリ。

金融　金融機關は皆無。農商民間に於て事業資金を必要とする場合には僅かに身邊の知人關係を辿り、貸借が成立してゐる狀態である、此の場合の利息は普通一箇月四―六分であると。

江大洋、哈大洋は既に全く影を潛め、相場は康德元年六月以降國幣建となつた。奇克縣城では同年五月日本憲兵分駐所の開設に依て其の使用する金票が流通してゐるが、流通高は漸次減退してゐる。

（六）邑鎭

奇克（奇克特）　黑河の下流水路一五四粁の地點に在る縣城所在地で、下流對岸のボヤルコワ村と斜交ひになつてゐる。康德元年十二月末現在民政部調査科調の戶口數は三三六戶、一、六五五人で縣人口の約三割を占めてゐる。國籍別にすれば次の如し。

總人口		滿人	內地人	朝鮮人	外國人
男	一、〇八二	一、〇七六	五	一	一
女	五七三	五三七	六		三〇
計	一、六五五	一、六一三	一一	一	三〇

之を三、四年前に比較すれば著しく減少を示した。商戶四七戶を有し本縣及遜河縣城附近の中心市場をなしてゐる。商戶は主として雜貨を取扱ひ一時對岸蘇聯との取引によつて隆盛を極めたものである。

奇克業種別營業狀況調査

（康德元年二月現在縣公署調）

種別	戶數	資本總額	使用人員	一ヶ年賣上總額	納稅總額
雜貨商	一五	二七、五二〇圓	一〇六	四三、八四八·六八圓	一、四二二·八六圓
藥店	三	四五〇	六	七一〇·四六	二五·一八
肉屋	二	二五〇	四	六二六·四〇	二二·八三
飯店	八	五六五	二六	二、五二七·二〇	七六·五二
菓子屋	二	一八〇	五	六四〇·三五	二六·六八
豆腐屋	二	一三〇	六	三三三·四三	一〇·四五

	計	四七	三〇、九一〇	一七〇	八二、八五八・五二	二、八二二・五一
野菜商	一		二〇	二	二〇一・五〇	六・一〇
宿屋	三		一八〇	三	四八六・〇〇	六三・七三
衣莊	二		一〇〇	四	一八四・〇〇	六・一一
茶社	八		一、五〇〇		三三、一二〇・〇〇	一、一五五・一四
古物商	一		一五	一	一八〇・五〇	六・九一

主要機關　縣公署、電報局、郵局、稅捐局、商會、農會、國境警察隊、江省軍黑河地區警備軍の一隊

車陸　奇克下流四三粁の江岸に在る縣城に次ぐ部落で、戶數八一、人口四六三、住民は滿洲族多く中にはゴリド族も少數見受けられると云ふ。滿人の妻となつた露西亞女三〇名は主として乳牛の飼育に從事してゐる。住民の主たる職業は狩獵で、農業、薪伐採、茸採取、漁業を副業とする。鄂倫春畢拉爾協領公署及稅捐局分卡が主なる機關で、當協領管下の鄂倫春人七—八〇〇人は車陸の背後地に多く居住してゐる。康德二年末現在の商戶は次の如し。

雜貨商六、飯店一、豆腐商一、客棧一、茶莊三、計一二

雜貨商の一箇月賣上額は最高一〇〇圓程度で、當地を中心として棲む鄂倫春人を有力な顧客としてゐる。

工業としては僅かに家內工業的な製粉業、鐵工場が在り、其內容は次の如く貧弱なものである。

製粉業　二、資本金三〇〇圓、從事員二

鐵工場　二、資本金一五〇圓、從事員三

東小丁子　車陸上流三〇粁。戶數二五、人口一三〇

西小丁子　車陸上流三五粁、戶數三八、人口二一五（露人男二、女一七）。開墾以來二十數年、民國二年頃に密貿易を業とするもの二戶ありたるも現在商戶無く物資は悉く奇克より購入してゐる。耕地九五晌を有し小麥四四晌（一晌當收穫高七〇—八〇甫度）、燕麥二八晌（一晌當七〇甫度）、其他大豆、迷子、包米、煙草等を耕作してゐる。蘇聯との交易に依り機械農具比較的多く使用され、之が種類別の一日一台能力を擧げると次の如くである。

牧草刈取器	二台（古物）	能力　二〇〇甫度
播種用具	一台（古物）	能力　三晌
收穫用具	二台（內一台新品）	能力　二晌
耕作用犁	八台	能力　一晌
調整用具	一台（ボヤルコワより密輸入）	二五〇甫度

農產の他に牧草年產一、六〇〇甫度、毛皮少量、木耳は產しない。交通具には二輪車二、四輪車一四、橇二〇、木船は無い。

高灘　奇克上流水路一三粁、遜河縣城迄三三粁、戶數三一、人口一七二（露西亞人一）。農民は殆ど全部自作農で僅かに兼小作農がゐる。耕地は康德元年に於て一六〇晌、此の內大豆三一晌餘（一晌當り六〇—七〇甫度）、小麥五〇晌（一晌當り六〇甫度）燕麥三八晌（一晌當り五〇甫度）等であつた。

砂金は江岸一帶に產出するが甚だ少く採金定住者は見られない。一日採取量は一組（五、六—七、八人）三〇—四〇多羅（九六多羅は一ゾロトニーク）である。

嘎牛戶　奇克上流三一粁、戶數一九、人口七三（ロシア女一）の部落で、民國八年始めて獵師に依て開墾が始められ露領とも交易が行はれた。住民は殆ど農業を營みそれも全部自作農である。康德元年度の耕地九一晌に於ける收穫高は迷子一、五六〇甫度（一晌當り六〇甫度）燕麥二、一〇〇甫度（一晌當り一〇〇甫度）西瓜種子三〇〇甫度（一晌當り三〇甫度）包米六四〇甫度（一晌當り八〇甫度）、其他小麥、大豆、小豆、向日葵等である。機械農具は收穫用と耕地用と各一台ある。

運送業二戶あり、烏雲、奇克、璦琿よりの航運貨物は當地を經て遜河縣城（三〇粁を距る）へ輸送せられてゐる。

嘎巴亮子　奇克上流五六粁、戶數六の內商戶一あり人口一一の寒村。民國元年對露交易を目的とする移住者四〇戶を以て

殷ひを呈したが洪水、露支紛爭のため遜河方面に移住した。開拓當時を偲ばしめる店舗、倉庫が現在でも人目を惹く。對岸コンスタンチノフカとの密貿易中心地をなし、奇克—遜河との交通は頻繁であつた。今は奥地輸送物資の中繼港に過ぎぬ。薪材年五〇〇サージェンを產出する。

哈大楊 嘎巴亮子より奥地へ二粁。戶數四一、人口二一九を有す。土質良好でないが耕地一〇九晌あり、康德元年度の耕地別收穫高は粟三五晌（一晌當四〇甫度）大豆一五晌（一晌當五〇甫度）等であつた。物產は薪材年五〇〇サージェン、木耳年三、〇〇〇甫度。交通具には四輪車三、二輪車一七、橇一七がある。

霍爾謨津 別に紅毛鷄と稱し東西二屯が在る。奇克縣城より上流水路六二粁に位置し、戶數一三四、人口六二一（男四二一、女二〇〇）の相當の部落で、龍鎭縣辰清より遜河縣城附近を經て當地に通ずる國道約七〇粁が康德二年度完成した結果、當地は遜河縣の門戶となつたが船舶の寄港は不可能である。龍鎭縣辰清より此の西紅毛鷄に至る國道が建設せられた。

八、遜河縣

（一）自然及住民

自然 縣域は小興安嶺の支脉より派生する丘陵地帶と遜河流域とより成る。が、四面丘陵に圍まれてゐるので盆地狀を呈し到る所に濕地がある。縣名の起源をなす遜河は縣の北部を東流し幾多の支流併せ黑龍江に注ぐ。河幅約一〇米、水深約三米である。而して遜河流域と丘陵地帶とは何れも農耕及牧畜の適地と認められてゐる。

毎年三、四月は北西の風强く砂塵を捲上げて步行の困難を來すことがある。四月下旬解氷。六月下旬より七月下旬にかけて雨季、この間河川の汎濫を見ることが多い。暑熱は七、八月最も甚しく最低八〇度より最高一〇〇度に達する。夏季は蚊虻の發生極めて多い。十月末結氷、十一月頃より降雪あり四尺に達すること珍しくない。一、二月が嚴寒、零下三五—四〇度に降る。結氷は四月まで續くが地下五尺以下は盛夏と雖も解氷することがない。

住民 清朝末期から民國初期へかけては遜河流域及小興安嶺の支脉に亘る山丘の森林地帶に僅少のオロチョン、ダウール（タフリ）等の原住民と、之亦少數の滿洲族人が住んで狩獵を生業としてゐたに過ぎない。民國五年（一九一六年）に至て稽墾局が設置され農耕移民を招致するに及んで、瑷琿龍鎭方面から南方移民が來住し、漸次遜河流域に定住開墾するに至つた。民國一七年（一九二八）稽墾局を設置局と改稱。二〇年滿洲事變。大同元年（一九三二）馬占山叛亂、商家は店を閉し農民は耕地を棄て逃亡する等縣民の移動轉出甚しく一時混沌狀態に陷つた。大同二年滿洲國の縣公署設置。

住民は縣面積四、二七七平方粁に對し康德二年十二月末現在民政部地方司調は八四九戶、四、四八六人（日本內地人男一二女五計一七）、即ち一平方粁當人口密度一・〇四八。尙同年十月黑河省公署調の民族別次の如し。

總人口	漢人	滿人	回族	日本人 内地人	日本人 朝鮮人	日本人 無國籍	備考
男 二、一九四	一、四一〇	六八三	五一	一二	一九	一九	無國籍者は白系露人でその女は滿人の妻妾となつてゐるものを含む。
女 一、三七四	八〇〇	四九九	二五	八	五	三七	滿人中オロチョン人七一三を含む
計 三、五六八	二、二一〇	一、一八二	七六	二〇	二四	五六	

（一一）政治及治安、文化

政治 住民は頗る疲弊してゐる。物資が乏しい上に馬占山の叛亂、大洪水の慘害の痍がまだ癒えない。殊に滿洲國政府の罌粟栽培禁止は農家の經濟にも縣財政にも致命的打擊を與えた。縣財政は次の通りである。

康德三年度遜河縣歲入出豫算

（單位圓）

項別＼年度別	二年度	三年度	增減
歲出	二八、〇九一	三三、四〇〇	五、三〇九
縣收入額	四、五六五	四、〇七六	四八九
國庫補助額	二三、五二六	二九、三二四	五、七九八

治安 本縣は地形起伏し林野多く、爲に匪賊の蟠�据に好適の地で、二、三の小匪團は此處を根據として瓊琿縣を覗ふと云ふ。大同元年四月馬占山兵匪五〇〇に縣城を襲擊せられたるも其後縣内では匪害を聞かぬ。それは目下のところ人口稀薄物資缺乏の結果彼等の襲擊對象が無く、他方警備機構が稍整備してゐるからであらう。

警備機關として大同二年三月以來江省騎兵旅（黑河地區防衛軍）が駐屯縣警察側と協力、又縣宣撫小委員會、自衛團が組織せられ、其後保甲制度の實施に依り三保一五甲八一牌を組織し保甲自衛團は三團九六名を有してゐる。

文化 文化は極めて低い。滿洲人は支那化した農民、鮮人は近來對岸蘇聯から移住して水田經營に當り、露人も亦滿人と雜居し、すべて幼稚な農村文化を形成してゐる。オロチョン人は狩獵を事とし山間林野を徒涉して他族と殆ど交涉を持たぬ。本縣の民情は比較的素朴である。次に教育、宗教、社會、衛生等に就いて畧述する。

教育 縣財政の窮乏は教員の俸給さへ支拂ひ困難の狀況であつたが漸次改善せられ、康德二年末の學校實況は兩級小學校一、初級小學校四（前年より三校增加）で、教員は前者に三名後者に四名、生徒數は前者に五〇後者に一〇八、之を前年に比すれば兩者を通じて七八名の增加を示し、就學兒童比率は四〇％で、黑河省に於ては低率の方である。前年の實況報告では校舍は不完全で、縣長及縣公署員の妻女に無給教授を依囑し、生徒からは授業料を徵收せず毎月一名に付筆墨料として國幣一角を支給し就學を奬勵してゐると。

小學校の他に城區民衆學校一が在り其の生徒數四四。また文教團體として滿洲帝國教育會遜河縣分會童子團が設立せられた。

宗教 佛教を主とし其の宗徒約一〇〇、其他は回教徒七〇、基督教徒一〇に過ぎぬ。寺廟は遜河縣城に回教の清眞寺一、道教の三聖廟一あるのみ。

社會 執政賑款及び政府支出の救濟金を基金とする社會事業も振はず、慈善團體として理善聯合會遜河縣玉善堂があるも會員一一〇名を擁するのみ。遜河には協和會分會が置かれてゐるが特筆することも無い。義倉は建國後始めて設立せられ康德二年十月新倉建築に依り可能積穀量六、〇八〇甫度となつた。

衛生 之も亦た見るべきものが無い。傳染病も赤痢、腸チフス患者を稀に發生するのみであるが、獸疫は比較的多く、「瘟」と稱する傳染病の爲め馬の斃死が流行する。醫師一、漢法醫二、藥店一。

（一二）資　源

農産 交通未開發のため相當廣い沃地を有し乍ら縣面積に對して五九・三％の未耕地を有し、農民は資金無きため傳統的粗放農法に甘んじてゐる狀態である。而し乍ら瓊琿縣二站に通ずる國道の竣成は本縣農業の開發を促しつゝある。

土壤は第四紀新層に屬し地味豐沃の黑色細微土である爲め殆ど掠奪農法によつてゐる。遜河縣城附近は奇克縣と共に大なる土地所有者多く、經營規模は一〇〇晌以上の者若干を除けば他の大部分は一〇晌未滿の經營者である。江岸地方の特例として本縣も亦不在地主の多いことが眼立つ之は稽墾局設置當時哈爾濱奉天方面の商人が土地を買收した結果である。

農民は殆ど自作農である。大同二年頃の小作人と云へば水田に働く朝鮮人だけが水田一二晌より一年の小作料として米二〇甫度、畑五一晌より耕作料江洋二〇四圓を縣公署に納付してゐたが他に小作農を見なかつた。小作契約は年々の契約に依るもの大多數を占め、永小作の如き形態は認められぬ。從て契約不成立の場合は地主は自由に無償で自己の耕地を回收し得るのである。

地價は事變前後及馬占山軍逃亡當時の掠奪甚しく地方農民が購買力を失つた爲め急落した。土地賣買方法は友人知己を證人とし一定の契約書を取交すを普通とする。次に大同二年の畑地一晌當りの地價を參考に示せば既耕地は上地四〇圓、中地三〇圓、下地二〇圓で未耕地は上地二〇圓であつた。

地價

（康德二年十月現在　黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
第一區	耕地	上	一・五四〇	三・五斗
同	同	中	一・〇〇	三斗
同	同	下	〇・五〇	二斗
街基		上	五・〇〇（每方丈）	
同	同	中	二・〇〇	
同	同	下	〇・五〇	
第二區	耕地	上	一・三〇（每畝）	三斗
同	同	中	一・〇〇	三・五斗
同	同	下	〇・五〇	
第三區	同	上	一・八〇	五斗
同	同	中	一・二〇	三・五斗
同	同	下	〇・八〇	二・五斗

縣面積竝土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地 既耕地	可耕地 未耕地	可耕地 計	不可耕地	總面積ニ對スル比率 可耕地	總面積ニ對スル比率 不可耕地	總面積ニ對スル比率 既耕地	總面積ニ對スル比率 未耕地	可耕地ニ對スル比率 既耕地	可耕地ニ對スル比率 未耕地
四、二七七平方粁	三〇平方粁	二、五三五平方粁	二、五六五平方粁	一、七二三平方粁	六〇・〇%	四〇・〇%	〇・七%	五九・三%	一・二%	九八・八%

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	一、〇六〇陌	九〇〇瓲
其他豆類	八〇	六〇
高粱		一二〇
玉蜀黍	三一〇	二五〇
小麥	九六〇	一、二〇〇
水稻	六二〇	四七〇
陸稻		
其他雜穀	二一〇	一八〇
計	三、二四〇	三、一八〇

春耕資金

年度	貸付 本年度新貸付額	貸付 前年度貸付殘額	貸付 計	貸付戶數	回收額	貸付殘額
大同二年	一八、二八五円	—	一八、二八五円	五五戶	—	一八、二八五円
康德元年	—	一八、二八五	一八、二八五	—	—	一八、二八五

（康德二年九月一日現在實業部調査）

畜産

種別	數量	備考
牛	二六八頭	康德二年六月末現在黑河省公署調査に依ると牛三六六、馬八一二、騾二、驢三、緬羊四、豚五四八、鷄一、九六〇とある。
馬	七六九	
騾	三	
驢	四	
羊	一〇	
豚	一、一一八	
計	二、六七二	
雞	三、八四二羽	

（康德元年現在實業部調）

林産

森林面積	立木蓄積量（立方米）			備考
	針葉樹	濶葉樹	計	
平方粁 九一五	五、四九〇、〇〇〇	八、六五二、五〇〇	一四、一三、五〇〇	副産物として木耳の産出多し

（康德二年四月末現在調）

鑛産

種別	産地名	位置	經營者其他記事
砂金	遜河 寶來溝 烏龍幹溝	遜河烏都黑河合流點ヨリ下流	哈爾濱 夏紹康

（康德元年現在）

（四）交通

道路 國道は二本新設せられた、一は瑷琿縣の二站から來て縣城遜河を經て奇克縣城に達するもの、一は龍鎭縣辰清から來て縣の西端を通過して奇克縣の霍爾謨津に至るもの である。

二站—孫吳—遜河—奇克を結ぶ國道〇〇〇粁は概ね新設道路で、舊道改修の部分は康德元年九月起工同二年五月竣工、全工程は同三年六月竣工、北黑線孫吳站に通ずる主要交通路を成す。

辰清—霍爾謨津國道〇〇粁は二等國道で、縣城より北方〇粁附近を通過して居り、黑龍江岸と結ぶ重要路である。

康德三年九月完了の筈。

舊道には遜河縣城を中心として

至龍鎭〇〇〇滿里（一部國道となる）、至蒲拉口子〇〇滿里、至雙河屯〇〇〇滿里、至烏雲縣城〇〇〇滿里、至奇克縣城〇〇滿里（一部國道）、至奎子屯〇〇滿里、至霍爾謨津〇〇滿里（大部分は國道）

等であるが、國道に併用されたものを除き之等道路上の橋梁は先年の大洪水に流失した儘のものが多く殆ど渡舟によらねばならぬ。

交通機關 到る處丘陵地と濕地との爲に交通は不便を極めたが、黑河、奇克間の舊道と結ぶ舊道は黑河の長途汽車公司が

屢々利用して居り、馬占山事件終熄後同公司と國際運輸會社との合辦に依り營業を續け、更に北黑線工事中は遜吳、遜河間の舊道に於て運輸營業を開始したるも康德二年解氷期(此の舊道が國道となつた頃)に中止された。此他の交通具は夏は馬車、冬は橇で僅かに近隣との往來に止まる。

縣內車馬數

車種別	荷馬車	牛車	木頭車	轎
車數	○○○	○○○	○○	○○○

水運　本縣は地圖で示される如く、僅かに黑龍江を覗く程度の江岸を有してゐるに過ぎず一の埠頭をさへ持つてゐないから、水運と云へば遜河の舟運のみである。之に就いて縣當局は「增水の際航行に依て烏雲に達することを得」と報告して居り、康德元年三月哈爾濱航政局の調査には「風船及戒克は河口から八〇粁迄の通行可能」と記してゐる。

通信　康德三年二月十六日遜河縣城に郵局が設置された。黑河より遜河縣城迄の郵便物到達日數は冬季五—十日、其他の期間は五—二十日で、冬季比較的順調なるに反し解氷後特に夏季は道路の不備、虻の襲來等の爲め二十日を要することが多いのである。南滿よりの郵便物は二三十日乃至四十日、日本とは二箇月を要することあり、急を要するものは黑河着の航空便によるべく、之に據れば齊齊哈爾より七日大連より十二日と云ふ。尙、電報は奇克へ送信、電話は奇克、辰淸、龍鎭へ通話が能きる。

(五) 商工業

商業　本縣の商業も近隣諸縣と同樣に對露貿易時代から幾變遷して今日に至り、商家の主たるものは遜河縣城に集り商品は主として奇克又は黑河から搬入してゐるが特記すべき事は無い。康德元年度現在の縣城商家種別及其數は次の通りである。

雜貨商八、木匠舖二、燒舖一、木炭商一、材木商一、鐵匠爐二、藥店一、成衣舖二、飲食店五、肉舖一、旅館五、洋鐵手藝舖一。

尙、雜貨商の營業狀況は總資本金約七、六〇〇圓、康德元年は七〇〇圓の缺損であつた。

工業　工業關係では小規模の燒鍋一、鐵工業二、雜工業三が在り、燒鍋の一日生產能力僅かに二〇〇斤內外、鐵工業は主として庖丁、馬蹄等の製作修理をする程度で何れも資本二〇〇圓以下である。

物價　物價は哈市より大黑河又は奇克に移入せられたるものを更に仕入て來る關係上、運賃稅金等を加算すれば優に三倍餘の賣價となる。新國道及北黑線開通後の物資移入經路及物價の變動に就てはまだ資料がない。左記は康德元年春期に於ける物價である。(國幣圓)

小麥	一布度	一・〇〇	豆油	一布度	三・四〇
大豆	〃	・四二	燒酒	〃	四・二三
包米	〃	・三三	醬油	〃	三・〇〇
馬鈴薯	〃	・三五	ビール	一本	・五〇
米	〃	四・〇〇	卵	百個	三・〇〇
粟	〃	・六二	薪	一沙	三・〇〇
牛肉	一斤	・三〇			
豚肉	〃	・三五			
川魚	〃	・一〇			
支那素麵	一布度	三・六〇			

（六）邑　鎭

遜河（畢拉爾） 縣城所在地で、龍鎭から奇克に通ずる舊道上に在る。康德二年北黑線辰清及孫吳の兩地から遜河を經て奇克縣霍爾謨津に至る國道が通じた。康德三年十二月末現在の戸數一六一、人口七三八（男四八七、女二五一）を有してゐる。日本人一三（男九、女四）のみ露國人は男二、女一九で女は滿人の妻妾となるものが多い。

庫爾濱 遜家屯より黑龍江を遡ること約五粁、オロチョン人統轄の庫爾濱佐領のあるところ。事變後歸來するもの增加しつゝある。對岸クブリアノよりの密輸入品は遜河縣城に送られてゐた。戸數九三、人口二七一の部落で、商戸は只一戸あるのみ。

其他主要部落戸口

（昭九、一現在滿鐵調査）

屯名	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
雙河屯	五〇	二〇二	六八	二七〇
何義祥屯	四六	一四一	七二	二一三
遜安堡	五七	一五七	九二	二四九
松樹溝屯	三七	一二四	八八	二一二
興隆屯	三〇	一〇二	八三	一八五

九、烏　雲　縣

（一）自然及住民

自然 面積一九、二八七平方粁、東は佛山縣に連なり、南は小興安嶺末脈の森林地帶を以て湯原、通北、龍鎭の三縣と向背し、西北に遜河縣を抱き、北は悠久の黑水を隔てて蘇聯領黑龍州に相對してゐる。縣內の三分の二は山岳地帶を以て占められ荒原、小河、沼澤は到る處に散在して人跡未踏の地が多い。小興安嶺と其支脈たる瑪哈拉山系の瑪哈拉山、瑪喇山、烏蘭山等の山峽に發源する科爾芬、烏雲、米果斯河等々の諸河川は黑龍江に注ぎ、江岸は概ね巾廣き小丘狀平野を成してゐる。

氣象に關する學術的な資料は無いが、縣公署、航聯等の調査に依て概ね明瞭となつた。黑龍江は五月中—下旬解氷を終り、十月下旬より結氷開始、十一月二十日前後結氷を完了する。七月中旬より一箇月間は氣溫最高、往々百度を超える酷暑となり又夏季は虻、蚊の發生が甚しいので住民は夜間步行に覆布を用ひて其の害を防ぐといふ有樣である。極寒期の氣溫は零下四十度以下に降ることがある。雨量は六月下旬—七月初旬に亙り最も多く、十一月中旬より降雪あり積雪數尺に及ぶ。

住民 人口頗る稀薄、康德二年十二月末現在民政部地方司調の戸數七九六、人口三、三九四、一平方粁當人口密度〇・一七五に過ぎず前年より二五三の減少である。嘗て露國との接觸が緊密だつた割に文化の風潮に染まず民情朴直。

縣民々族別

（康德二年十月末現在 黑河省公署總務廳調）

總人口	漢人	滿人	回族	日本人 內地人	日本人 朝鮮人	無國籍	備考
男 二、〇六四	一、七五七	一五四	二	九	一二一	二一	滿人中にはオロチョン人一三

女	一、二二七	九〇四	一二九	一	七	八六	一〇〇
計	三、二九一	二、六六一	二八三	三	一六	二〇七	一二一

○を含む。無國籍者は白系露人を以て占め女は滿人の妻となつてゐるもの。

日本內地人は官吏と其家族で、オロチョン人は獸毛皮、角を以て日用品と交易し、白系露人は殆ど革命當時逃れ來つたものである。朝鮮人は西比利亞金鑛區を轉々として民國十年頃來住したものと、之より龔大同八年佳木斯から匪賊に追はれて來たものとが多く農業に依り辛うじて生計を支へてゐる。

(二) 政治及治安、文化

政治　約四、五年前迄は小興安嶺森林中に狩獵を生業とするオロチョン人が居住したのみであつた。黑龍江航路開拓に伴ひ哈爾濱方面より來住する山東人が年と共に增加し、對岸露人との商取引が始められ民國初期には最も旺盛を極めた。其後漸次荒地を開墾し農業に從ふ者が增加し、民國五年には地方行政機關たる設治局の設立を見、同十八年設治局は烏雲縣と改稱せられ始めて縣政の施行を見るに至つたのである。(一說には民國六年縣政施行とある)

民國二十年滿洲事變勃發當時は僻遠の地にあるため何等動搖を見なかつたが、大同元年四月馬占山の黑河僞政府樹立後匪賊暴民の跋扈甚しく、之が爲め縣民は窮乏の極に達し樹皮草根に露命を繋ぐ慘狀を呈し他縣に轉出するものが續出した。滿洲建國後極力物資の移入と治安工作に努め今日では漸く縣政の圓滑な施行を見るに至つた。本縣は康德元年黑河省に編入されたが特に警察隊を置かず行政警察を以て警察業務を掌てゐる。現在物資供給は比較的圓滑であるが產業振はず徵稅の對照は微々たるもので縣財政は近接諸縣同樣國庫補助を仰いで歲入を補塡してゐる。

康德三年度縣財政次の通りである。

康德三年度烏雲縣歲入出豫算

(單位圓)

歲	二年度	三年度	增	減
縣收入額	三〇、七四三	二九、〇九三		一、六五〇
	三、四一三	四、三〇一	八八八	
國庫補助額	二七、三三〇	二四、七九二		二、五三八

治安　人口稀薄、交通不便の爲め外部からの匪賊侵入を見ず、露支紛爭、滿洲事變當時の暴徒橫行以外は平穩であつた。陸上交通路開拓の結果は遜河、奇克方面からの遁入匪賊を警戒する爲め江省軍騎兵の一部隊が駐屯し、縣警察署と共に治安維持機構の確立に努めた。現在では軍警及治安維持會の他に自衞團を創設、また保甲制度が實施せられ、之等諸機關團體は、日系官吏の入縣と共に第三期工作を進めてゐる。自衞團は九團に分れ第九團は鮮人を以て組織。保甲制度は全縣一保九甲を以てし、第一區の一甲四牌も鮮人を以て組織してゐる。

對岸インノケンチエフスカヤ町はアムール鐵道アルハラ驛との交通便なるため朝鮮人赤化分子の本縣に潛入する事あり之に對する警戒は嚴重を極めてゐる。近年二三共產黨員潛入し小學校教員その他に僞裝して主義宣傳に努めた結果、露國に脫走した青年五名あるも朝鮮人居住民の多くは革命當時財產を沒收され露國より逃亡して來た者が多く彼等は蘇聯に對する反感が强い。

教育　縣立兩級小學校一、初級小學校二、朝鮮人居留民會小學校一が在る。小學校は各校共に教員一名、生徒一九九名。何れも寺小屋式教育を施してゐる有樣であるが、就學兒童率は五〇%を示してゐる。朝鮮人小學校に至ては縣立第二小學校の一部を借受け民留民中の識者が交替に教授するといふ狀況である。他に城區民衆學校があり文教團體としては滿洲帝國教育會烏雲縣分會が設置されてゐる。

宗教　本縣も龍門派に屬する道教を筆頭とし、道教徒の建立せる關帝廟は縣城西門外に在るも、布教師二名、信者一九名

に過ぎず、禮門教(在裡教)は其の公所一を有し信者六〇名である。

衛生　縣内を通じて漢法醫一名と無開業の朝鮮醫一名とが居り、一般民衆の衞生思想は甚だ乏しい。縣治安維持會では宣撫費及一般より寄附金を募集して藥品を購入し、康德元年五月より縣民一般に無料施藥を行ひ、朝鮮人醫を臨時雇入れ各部落の病者を巡回施療し併せて衞生思想の普及に努めてゐる。又本縣には特殊の風土病は無いが、毎年五六月頃、赤痢に類似する傳染病が流行してゐるので之が防疫にも努めてゐる。

(三)　資　源

農産　本縣産業中最も主要なる農業も交通不便のため販路得難く殆ど自給自足の狀態である。罌粟は良質を以て知られてゐるが、栽培禁止に依て密栽培を行ひ康德元年の密栽培面積一〇〇晌(二、〇〇〇兩)と推定されたが現在では取締嚴重のため激減した模樣である。

阿片栽培禁止に依て縣財政は致命的打擊を受け農民の他地に移住したものが多い。水田は朝鮮人に依て僅に經營せられてゐるが苗代を作る事なく種子(籾)は撒種の直蒔で、播種期は氣候が乾燥するため播種後は木頭輾子で鎭壓してゐる。而し水田經營は將來性に乏しい。

鮮農約四〇戸あり、移住當時は資金を得る途なく滿人耕地の小作により辛うじて糊口を凌ぎつゝ民國十五年春期に至り漸く田畑數十晌を開墾した。建國後は日本側諸機關の進出と二、三年來の豐作とに依て滿人よりの借財も漸減し其の生活漸く自給自足の域に達した。康德二年十月現在鮮農の戸口、康德二年度作付面積並收穫豫想高は左記の如くである。(齊齊哈爾領事館黑河警察分署調)

戸口表

部落屯名	戸數	人口 男	人口 女	人口 計
烏雲(培達屯)	二九	七七	六三	一四〇
稻田地	一三	三二	二〇	五二
計	四二	一〇九	八三	一九二

康德二年度作付面積並收穫豫想高

種別	作付面積	收穫豫想高
小麥	三五晌	四五石
粟	一七	一七〇
大豆	三〇	二一〇
粟	三〇	三〇〇
玉蜀黍	一〇	九〇
其ノ他	一〇	一〇〇
計	一三二	九一五

(大同二年現在)

縣面積並土地利用狀況

總面積	耕地 既耕地	耕地 未耕地	耕地 計	不可耕地 可耕地	不可耕地 不可耕地	總面積ニ對スル比率	可耕地ニ對スル比率 既耕地	可耕地ニ對スル比率 未耕地
一九、二八七平方粁	六〇平方粁	三、六六五平方粁	三、七二五平方粁	一五、五六二平方粁	一九・三%	八〇・七%	〇・三%	一九・〇%	一・六%	九八・四%

本縣の農業經營が小規模である原因に就ては總論に於て既述の通りである。農民の耕地所有狀況を烏雲縣城區に就て見るに

無所有九〇戸、一〇晌未滿八三戸(康德元年現在)、即ち縣城區農民の殆ど全部は無所有者及十晌未滿所有者を以て占められてゐる譯である。

自小作狀況に就き屯長(部落の聚落單位たる屯の長)の述べるところでは大同二年頃の烏雲縣城區の農民は地主五%、自作六三%、自作兼小作八%、小作二四%で地主兼自作は見られ無い。又縣城區農民は八〇〇元迄の負債は普通で、附近の鮮人部落倍達屯では江洋數百元に上る負債を有する者が三分の一を占めてゐる。

民國十二—三年頃より事變直前まで縣設置局及縣公署の發給した地照があるけれど、地權所有者にして本縣內に居住するものは縣城區及溫河鎭(碼頭)に商舖を開く者四、五名に過ぎぬ。之が爲め不在地主の所有土地は本縣耕地の大半を占め農民は他人の土地を勝手に耕作してゐる有樣で、之らは法的解釋に於て小作人と云べきも事實には自作農である。法的の小作人は僅少で其の小作條件は地主が馬匹其他農具を貸與し收穫の三割を小作料とし、朝鮮人のみは一・五—二割となつてゐる。

(康德元年現在)

普通作物

種目	作付面積	收穫高
大豆	九一〇畝	七七〇噸
其他豆類	七〇	五〇
高粱	—	—
粟	二六〇	一〇〇
玉蜀黍	八三〇	二一〇
小黍	五三〇	一、〇三〇
水麥	—	四〇〇
陸稻	—	—
其他稻	—	—
雜穀	一八〇	一五〇
計	二、七八〇	二、七一〇

特用作物

(康德元年現在)

種目	作付面積	收穫高
煙草	四畝	一
青麻	二	一
瓜子	三	五
計	九	七

地價

(康德二年十月現在黑河省公署調)

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
第一警區	耕地	中	(每畝)二・〇〇円	產小麥 四斗
	街基地	上	(每方丈)・三〇	
	宅地	上	(每方丈)・二〇	

(康德二年九月一日實業部調査)

畜產

種別	數量	記事
牛	五八頭	總數は前年より二〇〇の減少を來した(縣報告との比較)、康德二年六月末現在黑河省公署調では牛二三四、馬六五七、驢一豚三八六、計一、二七八鷄一、九六〇
馬	二四三	
騾	—	
驢	五	
羊	—	
豚	三四六	
計	六五二	
雞	一、五七二羽	

林産　ダフリカカラマツ、モンゴリナラ、カバを産し、呼瑪縣その他如く黑龍江沿岸森林地帶の林相(極整齊)を示す。森林は烏雲河、結列河沿岸地帶で、薪材に使用するもの多く、大同二年度一五、〇〇〇サージエン(市價毎サージエン三圓)伐採した。主として地場消費と航行船舶燃料用に供してゐる。木材のほか山貨を類別すれば凡そ皮革一萬枚價格七千圓、木耳二千プード價格一三〇圓である。

而白いことは蘇聯側で强制勞働に依る森林の伐採が行はれ、その流筏から離脫して流れる丸太材を採取することを業とする滿人が相當多いことで、烏雲縣の此の流木採取量は一箇年約二千本に上るさうである。

森林狀況

森林面積	立木蓄積量(立方米)		
	針葉樹	濶葉樹	計
六、二三五 平方粁	四三、六四五、〇〇〇	五九、二三二、五〇〇	一〇二、八七七、五〇〇

(康德元年現在實業部調)

鑛産　本縣には金廠は無いが、農民は副業的に砂金採集を行つてゐる。採取地は黑龍江沿岸地帶特に雪水溫より雙河鎭の間上と直幹より庫爾濱の間が多く、其他庫爾濱河及烏雲河上流地方に採金勞働者を見ると云ふ。採取方法は奇克地方と同樣である。烏雲河上流地方は古くより採金地として知られ、康德二年十一月より滿洲採金會社に依て試掘が行はれたが排水不良の結果成績思はしからず、康德三年十月減水期を待つてポンプラ利用作業を行ふ豫定であると。

産金收買は縣城商人も行ふが、康德三年五月より自衞團を總收買人に指定(滿洲採金會社の委囑)して收買を行つてゐる。砂金の含金量は八七・五で年産一萬圓と推定せられる。

烏雲炭層と稱せらるゝは縣城區西方二十滿里の山地に在り、同地には金鑛も在るが何れも沼澤多く且つ虻蚊の猛襲の爲め交通困難となり調査は未だ行はれない。

鑛産狀況

種別	産地名	位置	推定埋藏量	品位又ハ品質	經營者其他記事
砂金	遜河烏底河合流點附近	奇克特南々東	少シ	不良	黑河　姚忠
〃	科爾芬			黑雲母花崗岩大材	民國三年採掘開始、現在稼行セズ
〃	タラチ河			同	
〃	阿興奇溝				
石炭	烏雲炭田	烏雲東方約一〇粁黑龍江岸			
石材	ブルハン山	車陸ノ東			
〃	漁窠子	烏雲東南			

(康德元年現在)

(四)　交　通

道路　黑龍江沿岸地方を除けば山岳重疊、加ふるに小河、沼澤各所に散在する爲交通極めて不便である。

烏雲—奇克道路　〇〇〇滿里

此の道路は江岸に沿ひ奇克を經て黑河に通ずる幹線で、車陸—上道幹は山道である。夏季は泥濘甚しく冬季も積雪に惱まされるので、寧ろ黑龍江の氷上交通を便利とする。沿道部落區間距離(單位滿里)次表の如し。

（削　除）

烏雲—佛山道路　〇〇〇滿里

烏雲に於て奇克道路に通ずる黑龍江岸の幹線道路で冬季は江上交通を以て之に代る。沿道の部落には雪水溫及夏河鎭がある

以上の道路に依る陸上交通は不完全極るもので、佛山及奇克兩地に至る國道建設が完成しなければ冬季交通は困難である。小河、沼澤には橋梁其他の施設無く、又夏季に於る山地との交通は虻、蛟が多いため薄布を覆つて步行する有樣で、馬もオロチョン人使用の馬でなければ通行不可能である。結氷期（十一月下旬—三月下旬）は黑龍江上を馬橋に依て奇克及佛山兩縣との往來頻繁で、解氷期（四月下旬—五月中旬）及結氷直前（十月下旬—十一月中旬間）は江上交通全く杜絕する。

車馬　鐵道が未だ敷設されず、自動車さへ營業し得ない原始的交通時代の本縣にとつて車馬は唯一の交通機關である。冬季は堅氷の黑龍江上を二頭立馬橋で往來し、其の所要日數は奇克—烏雲三日、佛山—烏雲一日半である。馬橋賃は通常片道の走程でも往復運賃を支拂ふことになつて居り、一日の使用料は平均約二元五角である。

縣內車馬數

（康德二年二月現在）

種類	荷馬車	橋
車數	〇〇〇	〇〇

水運　哈爾濱航業聯合會經營の哈爾濱—黑河線、富錦—黑河線二航路の船舶が烏雲に寄港してゐるので開江期は非常に交通の利便を與へてゐる。縣內各碼頭間距離（單位粁）次の如し。

	朝陽鎭	雪水溫	烏雲	常發屯	柳河通	下道幹	上道幹	奇克特
朝陽鎭		六八	九三	一一三	一二二	一六四	一六七	二三八
雪水溫			二五	四五	五四	九六	九九	一七〇
烏雲				二〇	二九	七一	七四	一四五
常發屯					九	五一	五四	一二五
柳河通						四二	四五	一一六
下道幹							三	七四
上道幹								七一

康德二年度水運概況

碼頭別船客數

碼頭名	乘船	下船
上道幹	七二八	七七四
常發屯	二二	六九
烏雲	一、四一九	一、五五六
雪水溫	一	—
計	二、一七〇	二、三九九

通信 郵務は烏雲縣城に郵局一箇所設置され、季節に依て船舶、陸路騎馬、馬橇を以て四—七日毎に一回發着するといふ狀況で、春季解氷期(四月下旬—五月中旬)は交通困難の爲め大形小包の行囊は取扱てゐない。

電話は治安維持會の警備用として奇克、璦琿を經て黑河に通ずる有線電話があるのみである。

(五) 商工業

商業 本縣の商業中心地は縣城烏雲で、同地は又黑河下流地方の經濟中心地でもある。商家の規模は小であるが、商業地として背後地の劣勢なるに比し相當な體容を備へてゐる。しかし縣城と舊縣城とを除けば他の部落は商業を農家の副業として營むに過ぎない。本縣も亦對岸露國との商取引に依て發達し、露國革命後は物資缺乏の對岸地帶に對し奇克特と共に烏雲より輸出された食糧品、日用雜貨類は相當多量であつた。然るに對露交易杜絶、阿片栽培禁止等に依り、購買力は減少し季節的勞働者の入縣は皆無となつて、商賈は往年の二、三割に減少するといふ現狀である、然し北黑線の開通以來、採金勞働者の入縣に依て購買力に潤ひを生じて來た。康德二年末現在の商店は次の通りで、物資の大部分を船舶に依り哈爾濱、黑河方面から移入してゐる。

雜貨商一九、茶店及飯店九、洗衣局三、菓茶局及澡塘各一、成衣局四、客棧四、合計四一

烏雲縣城物價 (單位國幣圓)

品名	單位	康德元年一〇月	康德二年一月	〃四月
白米	每甫	三·三〇	三·五〇	三·七〇
粟(谷子)	〃	〇·五〇	〇·五〇	〇·五〇
包米	〃	〇·三五	〇·四〇	〇·四〇
元豆	〃	〇·四〇	〇·四五	〇·六〇
小麥	〃	〇·九〇	一·〇〇	一·四〇
三號麵粉	〃	二·八〇	三·二〇	三·六〇
燒酒	每斤	〇·一五	〇·二〇	〇·二〇
蜂蜜	〃	一·二〇	一·二〇	一·二〇
白糖	〃	〇·一六	〇·一八	〇·一八
氷糖	〃	〇·二二	〇·二二	〇·二二
牛肉	〃	〇·二〇	〇·二〇	〇·二〇
豚肉	〃	〇·二五	〇·二八	〇·二八
鷄肉	每隻	〇·八〇	一·〇〇	一·〇〇
大母哈貝	〃	—	—	—
鯉魚	每斤	〇·一八	〇·二〇	〇·二〇
黃魚	每甫	一二·〇〇	一二·〇〇	一四·〇〇
白魚	每斤	〇·〇八	〇·〇八	〇·〇八

品名	單位	康德元年一〇月	康德二年一月	〃四月
毛布子	每條	〇·二八	〇·三二	〇·三〇
洋襪子	每雙	〇·五〇	〇·五〇	〇·五〇
燈油	每甫	〇·三〇	〇·三〇	〇·三〇
豆油	〃	四·〇〇	五·五〇	六·五〇
生髮油	每瓶	〇·八〇	〇·八〇	〇·八〇
醬油	每甫	四·〇〇	四·四〇	四·四〇
食醋	〃	二·〇〇	二·二〇	二·二〇
粒鹽	每甫	四·八〇	四·八〇	四·八〇
豆餅	每塊	〇·四〇	〇·四〇	〇·四〇
棉花	每斤	〇·七五	〇·八〇	〇·八〇
鷄卵	每個	〇·〇五	〇·〇三	〇·〇二五
海參	每斤	二·五〇	二·五〇	二·五〇
干貝	〃	一·二〇	一·二〇	一·二〇
白菜	每甫	〇·六〇	一·八〇	二·〇〇
馬苓薯	〃	〇·一五	〇·二〇	〇·二〇
葱	〃	一·五〇	一·五〇	〇·八〇
大蒜	每百	〇·四〇	〇·五〇	〇·五〇

(哈爾濱航業聯合局調)

碼頭別貨物移出入數量 (單位瓩)

碼頭名	移入	移出
上道幹	五七、六一五	一九、四六〇
下道幹	三、三八三	九〇一
常發屯	—	一一〇、七三八
烏雲	五七五、六八九	三七七、五八八
雪水溫	四五、八〇一	一〇五、二八九
木拉沙及	—	八三、七七〇
計	六八二、四八八	六九七、七四六

註 品種別數量は總論參照

大尺	尺杆	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	膠皮地下足袋	毎雙	一・八〇	一・六〇	一・六〇				
花布	毎尺	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇	布鞋	毎雙	〇・三〇	〇・三〇	〇・三〇				
貉子皮	毎張	一二・〇〇	一二・〇〇	一二・〇〇	牙粉	毎盒	〇・二〇	〇・二〇	〇・二〇				
雜皮	〃	三・二〇	三・二〇	三・二〇	牙刷子	毎把	〇・四〇	〇・四〇	〇・四〇				
灰鼠皮	〃	〇・六〇	一・〇〇	一・〇〇	洋蠟	毎包	〇・四〇	〇・四〇	〇・四〇				
兎皮	〃	〇・四〇	〇・四〇	〇・四〇	洋火	〃	〇・一〇	〇・〇八	〇・〇八				
膠皮短鞋	毎雙	〇・八〇	〇・八〇	〇・八〇	雙鶴煙	毎盒	〇・〇七	〇・〇六	〇・〇六				

工業　次表の兩油房の製造高を見るに新合成（大同二年十一月末より二ヶ月間の成績）は豆油四、二〇〇フント、豆餅（粕）二、五〇〇枚、寶元成（同年十二月の一ヶ月間）は豆油一、八〇〇フント、豆餅九〇〇枚で、之等生産品は當地方産の原料大豆と交換した殘りを地元商店と物々交換又は現金販賣するが移出することは無い。

烏雲工業狀況（康德元年度）

（黑河省公署民政廳調）

工廠名稱	種別	類別	實際出資額	職工	生産總額	主要生産品目
新合成	化學工業	豆油製造業	六〇〇〇円	二円	一、四八三円	豆油、豆餅
寶元成	〃	〃	四〇〇〇	二	六七七	〃
邊記鑪	金屬工業	鐵匠鑪	五〇〇	一	九八	馬蹄
侯記鑪	〃	〃	三〇〇	一	五六	〃
明記鑪	〃	〃	三〇〇	一	七〇	〃
程家鑪	〃	〃	二〇〇	一	四二	〃
孫家粉房	食料品工業	粉房	一〇〇〇	一	六一〇	粉條
周記衣局	雜工業	裁縫	二〇〇	一	九九	手工

（六）邑鎮

烏雲　縣城所在地で別に溫河鎭とも稱し地方民への商品供給市場。黑河より水路二九九粁、奇克より同一四五粁、哈爾濱を距る同一、一一九粁である。蘇聯インノケンチエフスカヤ（戶數約二〇〇）の對岸約二粁上流に位し、縣民は殆ど此處に集つてゐる。大同元年馬占山僞政府時代は匪賊暴民の跋扈に虐られた。

戶口

（康德元年十二月末現在民政部調査科調）

戶數	人口							
	總數	滿人	日本人				外國人
			丙地人	朝鮮人			
二六〇	男 四四七	二八〇	九	一五八			—
	女 三〇三	一七八	三	九二			三〇
	計 七五〇	四五八	一二	二五〇			三〇

尙、住民は農業を主とし狩獵、茸採取、薪伐採等を副業としてゐる。

碼頭は縣城より五粁半上流にあり自動車、馬車の通行し得る道路がある。

主要機關　縣公署、郵局、稅捐局、商會、農會、自衞團、鮮人居留民會、江省軍騎兵第三旅の一部。

單燈照　（烏雲碼頭）　烏雲縣城は當地の下流五粁半に在り、兩地間に自動車、馬車の通行可能な道路がある。對岸はインノケンチエフスカヤである。戶數一七四、人口七三九（男五〇九、女二三〇）、縣城に亞ぐ部落で、商戶は雜貨商四を有す。

雪水溫　烏雲縣城の下流一五粁に在り、稍下流の對岸はミハイロフスキーである。民國元年の新開地で移民奬勵のため開墾地を總て無償で給與したので今日の發展を見た。又民國十六年頃迄は對岸蘇聯領との交易は自由に行はれたので露人は江を渡つて此地の牧草採取を行つてゐた。戶數六三、人口二九四、商戶無く住民は全部自作農である。

可耕地五〇〇晌の內既耕地一二〇晌（小麥六〇晌、包米三〇晌、其他黃豆、煙草等）で、小麥一晌當生產量五—六甫度、粟八〇甫度、包米八〇甫度、大麥八〇甫度等、四年前インノケンチエフスカヤのエキスポートフレープより大農式器具を購入し現在も使用してゐる。家畜は馬九一、牛二九、豚一一〇、鷄三七一を有す。

林產としては薪材年產八〇〇—一、〇〇〇サージエン、其の八九割は航行船舶に賣却してゐる。木耳の產出も相當あり全部烏雲に搬出する。

交通具は二輪車一、四輪車一九、木船六、橇四一。

上道幹　奇克縣車陸より三〇粁下流に在り戶數三〇、人口一五〇（ロシア女一三は滿人に嫁してゐる）商戶二を有す。住民は農業を主職とし副業として茸採取、薪材伐採に從事してゐる。滿洲事變當時は二、三十名の匪賊が出沒してゐた。阿片栽培禁止となつて山東方面から移住した獨身の阿片栽培者は鐵道工事又は砂金採取に轉じ本縣を去つたので當地住民も激減した。土質頗る良好なるも阿片栽培禁止の結果一時耕地二六晌に激減す。農作物は小麥、大豆、包米、燕麥、迷子、煙草等の順位である。其他の產物は水產（投網を使用し漁量少し）木耳（年產約一、五〇〇甫度）薪材（年產約三〇〇サージエン單價二圓八〇錢）砂金、毛皮等である。木耳は一甫度七圓で哈爾濱に移出し、砂金は二十數里奧地の部落二營子で採取（專業のもの十餘戶四〇名）されてゐるが採取量は微々たるものである。毛皮は降雪少き年は二〇〇枚位で大部分は烏雲に搬出する。

下道幹　上道幹の下流八粁、戶數一八、人口六六（內露人女四）耕地一四晌、商戶一。交通具は四輪車四、橇一一、木船一。

常家屯　烏雲碼頭上流四三粁、蘇聯スコペリツイフの稍下流に在る稍大なる部落。戶數五六、人口二四六（內露人男一、女二二）でロシア女は滿人に嫁してゐるものが多い。住民は全部農業に從事し、耕地四五晌。農產物は包米、小麥、大豆其他木耳の產出相當あり殆ど烏雲に搬出される。交通具は二輪車三、四輪車一四、木船五、橇三三。

孫官屯　上道幹上流一〇粁、蘇聯クプリアノフに對す。戶數二四、人口七六（內露人女四）土質良好にして耕地二〇晌、小麥を主とす。

同河鎭　常家屯の上流二八粁。戶數九、人口三四（露人男女各二）耕地三晌。橇三あり。

一〇、佛山縣

（一）自然及住民

自然　北部と東部とは黑龍江を隔てて蘇聯黑龍州並猶太自治州に對し、南部は嘉音河（嘉蔭河）を境として羅北縣に隣し西北部は結列河を烏雲縣との境界とする。東南地帶に走り來れる小興安嶺山系支脈に發源する烏拉于河（烏拉嘎河）始め諸河川は黑龍江に注ぎ、烏拉于河は本縣の中央部を爲す沿岸地帶特に三道崗子丘陵の森林地帶を擁してゐる。

氣候は黑龍江沿岸諸縣と相似て居り、素人觀測に依れば夏季は氣溫一〇〇度を越えることがある。けれど江岸は住み易く、各季は最低氣溫零下五〇度に及ぶといふ。雨季は五—八月で雨量多く、初霜は九月下旬、初雪は十月で降雪量も多い。流氷開始期十月下旬、結氷期十一月中旬、解氷開始期四月二十日過ぎ解氷完了は五月上旬が普通である。

住民　住民は人口密度低率で、殆ど滿漢人を以て占められ、瑪哈拉山には狩獵を生業とするオロチョン人四二名が棲んでゐる。本縣面積四、九五五平方粁に對し康德二年十二月末現在民政部地方司調の戶數三二〇、人口一、二七八即ち一平方粁當り人口密度〇・二五八に過ぎぬ。

尙同年十月末現在黑河省公署總務廳調の民族別人口左の如し。

	總人口	漢人	滿人	回族	日本人 內地人	日本人 朝鮮人	歸化	無國籍	備考
男	八八二	八一七	四七	四	一〇	三	—	一	歸化二七は滿人に嫁したロシア女。
女	三九五	三二六	二八	七	四	三	二七	—	
計	一、二七七	一、一四三	七五	一一	一四	六	二七	一	

（二）政治及治安、文化

政治　民國五年（一九一六年）興東道を黑河道に改めた際、蘿北、烏雲兩縣の一部を割いて佛山設治局が設置せられ、民國十六年縣政を施行し觀音山に縣公署を置き、民國十九年朝陽鎭即ち現在の佛山に之を移轉、康德元年十二月滿洲國新制度施行に依り本縣も黑河省下に置かれたのである。

露國の東漸政策により露人は光緒二十六年北淸事變の頃、黑龍江を渡つて本縣にも侵入し觀音山に在つた金鑛總局を占據するに及び同地方は一時露國勢力の蹂躙に任せてゐた。

オロチヨン人は烏拉干河上流瑪哈拉山より蘿北縣都魯河上流に亙て轉々狩獵に從事するも畢拉爾協領の統轄下に在り、正紅族第二佐庫爾濱（遜河縣）佐領に屬し三道崗子に鄂倫春族冬舍を見る。

本縣は人口稀薄のため區村制を施行せず各屯に屯長と稱するものはあるが自治區域は未だ確立してゐない。大同二年十月保甲制度實施せられ現在一保三甲二九牌となつて居り、每甲を十牌に分ち十家連座制である。

財政は未開發の地域なるため徵稅の對照は微々たるもので、國庫補助金を縣豫算の主たる財源としてゐる。

康德三年度佛山縣歲入出豫算

（單位　圓）

歲	二年度	三年度	增	減
縣收入額	二九、六三六	二六、〇〇六		三、六三〇
國庫負擔額	一、七〇〇	一、六四三		五七
	二七、九三六	二四、三六三		三、五七三

治安　人口稀薄、殊に住民は極度に疲弊してゐるので掠奪の對象無く匪影を殆ど見ないと云てよく、職業的自衞團も解散せられ、現在の治安狀況は良好である。治安維持には縣警務局、縣治安維持會、縣宣撫小委員會並保甲自警團（一團五〇名）が協力し、治安維持會は北地區治安維持會に屬し本地方の黑龍江沿岸諸縣と共に黑河地區治安維持會を構成してゐる。尙、蘇聯兵の暴行事件は頻發し、或は江を距てて威嚇的態度をとり、或は航行中の滿洲側漁船を不法射擊する等住民を脅かしてゐる。

教育　縣立高、初兩級男女小學校一、城區民衆學校一がある。小學校兒童數は五四、教員三、就學兒童率五〇%。補習學校では日語教育を行つてゐる。

宗教　佛教（道教と合流）、道教（龍門派に屬す）、回教、禮門教（戒煙戒酒を主旨とす）及基督教（露西亞正教）の傳教を見る。本縣の發祥地と云はるる觀音山の觀音堂には昔時十數名の僧侶在り滿洲北境の靈場とされたが、光緒二十六年北淸事變の頃露西亞人の侵略に遭ひ堂宇は荒廢の儘である。此の堂宇は源義經の建立せるものと云ひ傳へられてゐる。關帝廟は佛山東北に在り、例年三月二十八日、十月四日の春秋二期の祭祀は商民の參詣に賑つてゐる。在裡教は宣統三年此地に進出し現在最も勢力がある。

社會　社會事業としては縣城に義倉が設置（康德元年八月）せられてゐる他何者も無い。衞生又然りである。

（三）資　源

農産　酷寒期永く交通不便、人口稀薄等の惡條件により農業に見るべきものは無い。河川を利用し鮮農をして水田三、〇〇〇晌の耕作を計畫しつつあり有望視されてゐる。康德元年迄朝陽鎭附近に阿片密栽培をなすものがあり其面積五〇晌、出産數量一、二五〇兩と推定されたが現在は不明。農民は伐木集材を副業としてゐる。

縣面積並土地利用狀況

（大同二年現在）

總面積	可耕地				不可耕地	總面積ニ對スル比率				可耕地ニ對スル比率	
	既耕地	未耕地	計			可耕地	不可耕地	既耕地	未耕地	既耕地	未耕地
四、九五五平方粁	一〇平方粁	一、七三〇平方粁	一、七五〇平方粁		三、二〇五平方粁	三五・三%	六四・七%	〇・四%	三四・九%	一・一%	九八・九%

地價

三五〇

（康德二年十月現在 黑河省公署調）

區域別	地目	等則	每畝價格	每畝生產量
縣城外	耕地	上（每畝）	二・五〇円	三斗
同	同	中	二・二〇	二・五斗
同	同	下	二・〇〇	二斗
縣城內	街	上	・一八	
同	同	中	・一二	
同	基	下	—	

普通作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
大豆	三五〇陌	三〇〇籠
其他豆類	二〇	二〇
高粱	—	八〇
粟	一〇〇	四〇〇
玉蜀黍	三二〇	一五〇
小麥	二〇〇	—
水稻	—	—
陸稻	—	—
其他雜穀	七〇	六〇
計	一、〇六〇	一、〇一〇

特用作物

（康德元年現在）

種目	作付面積	收穫高
煙草	三陌	一籠
線麻	四	二
計	七	三

畜產

（康德二年九月一日現在 實業部調査）

種別	數量	備考
牛	一〇五頭	前年より牛、馬は少數增したるも鷄は激減す（縣務告に比較）、康德二年六月末現在黑河省公署調では牛六九、馬一四二、豚四二五、計六三六
馬	一九〇	
騾	—	
驢	—	
羊	—	
豚	四二五	
計	七二〇	
雞	一、二五〇羽	

林產

本縣の大半は山林地帶を以て占められ、瑪哈拉山及三道崗子の兩山脈には、松、樺を主林木とする密林が横つてゐる。大同二年の伐採量は器具用材三〇〇株、薪材五、〇〇〇株であつた。從來住民の自由伐採に任せてゐたので之が對策を講じてゐる。木桙は農民の副業として伐採せられ康德元年度船舶に賣却した木桙二、五〇〇サージェン價格九、三七五圓と推定されてゐる。

山貨としては他にオロチョン人の狩獵に依る獸毛皮があり、大同二年の此の產額三二、六八〇圓に及んだ。獸類は瑪哈拉山を中心に三道崗子一帶に棲息し、灰鼠、鹿、狼、熊、狍子等が普通で黃狼、灰鼠が多く稀に虎を見る。

森林狀況

森林面積	立木蓄積量（立方米）（康德元年現在實業部調査）		
	針葉樹	濶葉樹	計
一、七四五平方粁	七、八五二、五〇〇	一六、五七七、五〇〇	二四、四三〇、〇〇〇

鑛產　本縣の採金狀況は全く振はず、康德元年十二月滿洲採金會社調査隊の不拉沙金、馬連站方面の試掘結果も面白くない。觀音山金鑛は最初北洋鑛務總局が經營し宣統三年黑龍江省政府の直營となり、民國元年蘿北縣の都魯河金鑛と合併、觀都金鑛局と改稱し觀音山に其の總局を置いたが大同元年蘿北縣太平溝に移轉した。

嘉音河上流其他砂金產出の多量を傳へられながら今では全く衰へたので採取者の姿を見ない。寶興山に發源する砂金河の如き嘗ては其名の如く含有量多き砂金を產し原始的な採取方法を以て民國十六年には採取可能期の一箇月間に一日三〇〇匁（價格四、二〇〇元）平均を採取してゐたといふ。

砂金の他に石炭は昭和三年頃大石拉子溝に於て砂金試掘中良質なるものを發見したと。

鑛產別鑛區（康德元年現在）

種別	產地名	位置	品位又ハ品質	經營者其他記事
砂金	烏河流域	佛山南方	金粒ト共ニ磁鐵礦其他重鑛物ヲ混ユ	鄒舜五
〃	砂金河			海倫、梁振
〃	小哲勒庫河沿岸			
石炭	大石拉子溝	烏雲南東方	黑色塊狀ニシテ良質	

水產　黑龍江の水產は本縣住民を多少濕してゐるが、漁區は烏拉干河の黑龍江流入口附近で例年五月末乃至九月を漁期とし七、八月を盛期とする。魚類は大嗎哈魚（鮭）最も多く、鯉、鱒之に亞ぐ。

（四）交通

道路　荒廢せる舊道があるばかりで陸路は極めて不便。佛山縣城—觀音山間は稍良いが雨季は矢張り車馬の交通を絕ち、夏季交通は各部落間の小地域に限られてゐる。主要道路は

佛山—烏雲　〇〇〇滿里
佛山—蘿北　〇〇〇滿里
佛山—高地營子　〇〇滿里
佛山—南山裡　〇〇滿里

前二者は黑龍江に沿ふ道路で、冬季は江上交通に代り驛傳式の馬橇が他縣と往來する。各道路共に雨季は步行さへ困難となるので、冬季解氷結氷期のみ絕對的必要路として陸路を利用する。馬橇の交通は頻繁で通信連絡に利用されるが、屢々對岸蘇聯側より射擊を受け或は掠奪されるため住民に不安を與へてゐると。